

久坂音瑞の書

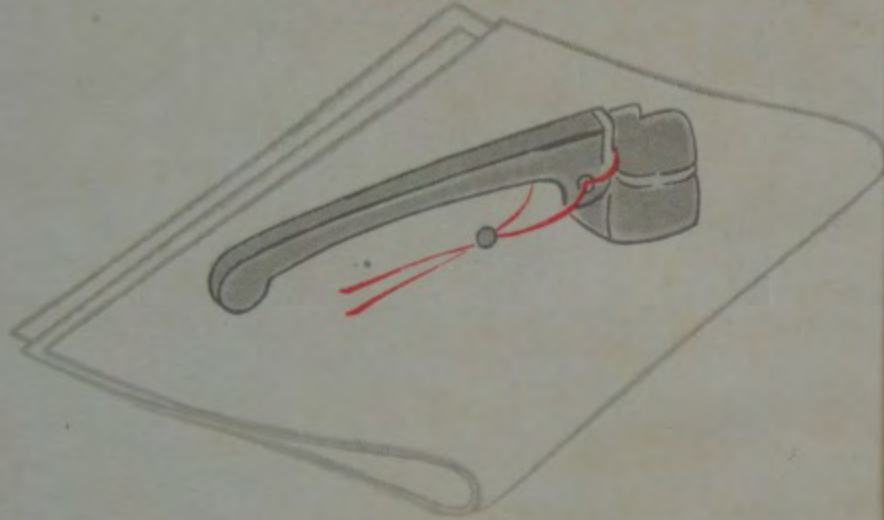
久坂音瑞の書





Y289  
722

久坂玄瑞の妻  
— 袂袖帖 —



33290

萩市立図書館

田郷虎雄

073  
145  
9220

久坂玄瑞の妻

— 涙袖帖 —

田郷虎雄

目次

序章	二人の誕生	一
一章	杉家の人々	九
二章	お因み會	四五
三章	少年の春秋	七一
四章	青年への旅	一〇一
五章	最初の對面	一二五
六章	こほろぎ	一四九
七章	小春日に	一八一
八章	松下村塾	二〇七
九章	二人の結婚	二二七

序章 二人の誕生

序	あとがき	十章 鯉	二
		十一章 鏡	二五九
		十二章 一つの生き方	二八五
	終章 涙袖帖		三一九
			三四九
			三七五

装幀 小西國葉

岸田國士



紀元二千五百年、——年號でいふと、天保十一年の、ある静かな秋の朝。

長州・萩の城下に住む久坂良迪くさかりょうだといふ醫者の家に、一人の男の子が生れて、一家の人々を喜びに酔はせた。

それには少しわけがあつた。

この久坂良迪には、妻—富子との間に、それまでにも二人の男の子が授かるには授かつたのだが、そのあとにもさきにも二人きりの子供の一人—次男の方が、幼い時に亡くなつてゐたので、子供といへば、もう、長男の玄機が唯一とり残つてゐるだけだつたからである。

しかも、その長男の玄機は、その時すでに二十七歳であつた。

この老夫婦、だから二十幾年ぶりにして、思ひがけなくもまた子寶を恵まれたわけであつた。

それも玉のやうな男の子を……。

喜びは大きかつた。

秀三郎——それがこの久坂家の人々を有頂天にさせた幼児の名前であるが、かくも一家の人々の歓迎の中に生れ出た秀三郎こそは、まつたく、世にも幸運な子供といふべきであつたらう。

一般に武家よりは醫家の方を低く見た時代だし、實際に家祿も微々たるものであつたから、久坂家は身分も、もちろん高い方ではなく、生計もまた、決して豊かな方ではなかつた。豊でないどころか、實をいふと家計のやりくりを頭を悩ますことの方が多かつた。

けれども、おむつにくるまつてゐる秀三郎が、そのやうに世智がらいことを、まだ知るはずもなく、知らされるわけもなかつた。この幼児にあたへられたものは、ただ、一家の人々の限らない愛情だけであつた。

それに、たとひ家格は高くなくとも、父も兄も藩中に名を知られた人であつた。

父の良迪は温厚勤勉な藩醫として藩公のおぼえもめでたく、藩中の人々にも重んじられてゐたし、兄の玄機はまた、少壯有爲の蘭醫として、あるひは進歩的な洋學者として、烈々たる海防論者として、その名聲は、はるかに父以上であつた。

だから、この親子を知るほどの人ならば、みな、秀三郎の誕生を喜び、お祝ひの言葉を述べた。

尤も、中には相當そそつかしいのがゐて、秀三郎を、てつきり玄機の子供だと思ひこみ、さういふ意味の挨拶を述べて、玄機を面喰はせるものもあつた。

それも一人や二人ではなかつたから、玄機も時には苦笑し時には閉口せざるを得ないことがあつた。

いつだつたか玄機は、父と晩酌にくつろいだ折、さういふ話を笑ひばなしにしたことがあつたが、その時、良迪は少々くすぐつたさうな顔をしながら、

「いやのう、まつたく、わしもこの年になつて、おむつにくるまつた赤子を抱か



「されようとは思はなんだよ。わッはッは」

と、いささか照れかくしめいた高笑ひをしたのち、

「——いや、正直なところ、秀三郎は、おぬしの子供のやうなものぢやよ。いくら氣は若うても、わしも年が年ぢやでのう、さきは知れてゐる。あの子が一人並の男になるまで丈夫でゐられるか。どうか、さて心もとない話ぢやて。——ぢやが、さうなると、のう、玄機、萬事はおぬしの厄介ぢや。これも宿世すこせの因縁ぢやと思ふて、そこはひとつ、よろしく頼むぞよ、なあ。——弟と思はず、忤たがのつもりでのう」

さう言ひながら、銚子をとつて、玄機の盃に、なみなみとお酌をした。そしてまた「わッはッは」と笑つた。

酔餘のされごとらしく、最後は笑ひのめしはしたものの、それは老ひたる父の本音であつた。

實際、良迪は、長男の玄機を力にし、たよりにしてゐた。この並々ならぬ才能に恵まれ、進取の氣象に富む若者を、彼は、わが子ながらも深く敬愛してゐた。そして長男に對する氣持がさういふ風であるだけに、晩年に出來た末ッ子の秀三郎に對しては、ただもう、こみあげるやうな深い愛情を抱いてゐた。

さうした氣持は、母の富子もまた、おなじであつた。

分別さかりの玄機に、さうした老父母の氣持のわからぬはずはなかつた。その時、玄機は答へた。

「いや、私もね、おと、さま、よい後繼ちとつぎが出來たやうで心づようござります。ほんとに、この節では、なんだか勉強にも張合ひが出來たやうで……」

玄機には子供がなかつた。

この返答は、老父に對する氣休めやお座なりでは毛頭なかつた。玄機は、しんぢつ、この親子ほどにも年のちがふ弟の誕生を、心から喜んでゐたのである。

ともかく、このやうにして秀三郎は、一家の鐘愛を一身に集めながら、すこやかに、すくすくと生ひ立つて行つた。

六

秀三郎が四つになつた年、すなはち、天保十四年の春。

おなじく長州・萩の東郊―松本村に住む藩士・杉百合之助の家に、六人目の子供が生れた。

これは女の子であつた。

杉百合之助と妻―瀧子との間には、それまでに、上の二人だけが男の子で、それからあとずつと三人も女の子がつづいてゐたので、こんどあたり出来れば、男の子を……と、あるひは望んでゐたかも知れなかつたが、さてめでたく生れてみると、もう、男の子だらうと女の子だらうと、子供のかはいさに變りはなかつた。

この子もまた、杉家一族の人々から、深い喜びをもつて迎へられた。

とりわけ、百合之助の弟である玉木文之進は、このくるくるとして愛くるしい姪の誕生を喜んで、ふだん剛氣寡黙で聞えてゐる人にも似げなく、

「うむ、めでたい、めでたい」

と、顔のさうがうをくづして、

「のう、兄上、この子のお祝ひに、ひとつ私が名をつけて進せませうかのう」  
などと、いひ出したくらゐであつた。

平素この弟の學識を尊敬してゐた兄の百合之助は、喜んでその申出を受けた。

そこで、玉木文之進は、自分の名の一字をとつて、この幼児に、文子といふ名をあたへた。……

第一章 杉家の人々

文子が生れた天保十四年は、平和な杉家にも、いろいろと事の多かつた年で、うれしいことや、悲しいことが、こもごもにやつて來た。

うれしいことの第一は、それまでの長いあひだを、護國山の南の山腹で、勤勉な——しかも甚だ貧しい、半農半士の生活をつづけて來た父の百合之助が、この年の二月に、百人中間頭兼盜賊改方といふ、いまで言つたら警察署長のやうな重い役についたことであつた。

貧窮な微祿の武士にとつて、官途につくことは、いふまでもなく、一家の大きな喜びだつたにちがひない。

つづいて文子が生れた。

けれども、この二つのかさなる慶びごとのあとには、こんどはまた、たつた三

日のあひだに、三女の艶子と祖母とが、つづいて亡くなるといふ、悲しいことが起つた。——九月のことであつた。

それ以來、杉家には、ひっそりと、しめやかな空氣がつづいてゐた。

五つになる次女の壽子には、それが淋しくてたまらなかつた。自分をかはいがつて下さつたお祖母さまや、かはい、妹のお艶ちゃんが、急にゐなくなつてしまつたことも、もちろん、悲しいことではあつたけれど、それ以上に、このひっそりとした家の中の空氣が、幼い壽子には、やりきれない氣持なのである。

「誰かお見えにならないかなア」

壽子は、毎日、ぼんやりと、そんなことを考へてゐた。

ところが、その願ひは案外に早くかなへられて、今日は正午すぎ頃から、親戚の女の人たちが、三人も四人も、つぎつぎと集まつて來た。

佐々木の叔母さま、玉木の叔母さま。高須の従姉さま。おまけに、ふだんはお

家が遠いので、さう度々はお出でになれない吉田の叔母さまでも……。

「うあ」

壽子は嬉しくてたまらない。小さい歡聲が思はず口をついて出る。

すつかりと氣持よく晴れた秋の午後であつたが、壽子の色の白い可愛い面長の顔も、澄んだ目の色も、そのお天氣にも負けず、はればれと輝いてゐた。そして玄關に聲がするごとに、だれよりも早く飛んで出て、べたりとそこに両手をつくと、ふだん見習つてゐるとほりのお作法を見せて、せい一ぱいの歡迎をした。

「これは佐々木の叔母さま、ようお出でなされませ。吉田の叔母さま、よう……」  
ところが、その叔母さまたちは、紅縞木綿の着物に紅木綿の帯を結んで、ひどく緊張してゐる壽子の姿に氣がつくと、たちまち、顔をほころばせて、

「ホ、。い、嬢さまになられましたのう、おひささん！」

と、ほめては下さるものの、すぐに、みんなが申しあはせたやうに、そそくさ

と勝手の方へ姿を消してしまふのである。

壽子は、少々あてがはづれて、がっかりした。

「フン、つまんない！」

いまの子供ならば、さう言つて、頬をまるくしたかも知れない。しかし壽子はそんな不作法には慣れてゐなかつたから、小首をかしげながら、自分で考へてみた。

なぜ親戚の人たちが今日かうして集まつて来るか？

それは壽子にも大體わかつてゐた。

お父さまの百合之助が、しばらく家族と離れて、いよいよ明日から城下に住むことになつてゐたのである。この郊外の松本村から日々藩廳に出仕するのは、少し遠すぎて、特別に御用繁多になつて來たこの頃では、なにかと不便なことが多かつたからである。そして、これには十二歳になる長女の千代が、父と一しよ

に住んで、身のまはりの世話をすることになつてゐた。

それで今夜はごく近親の内輪の人ばかりが集まつて、しばしのお別れに、しみりお話をしながら、夕食を共にしようといふわけであつた。女の人たちが早くやつて來たのは、めいめい材料の持寄りで、その用意をするためであつた。

だから、みんなが忙しいのも、すぐに臺所に姿を消すのも、あたりまへのことであつた。

「ぢや、私もお手つだひをしようか知ら……」

急にさう思ひついて、壽子は、さつそく、臺所をのぞきに行つた。

「姉さま！」

かういふ場合、いつでも自分の一番の理解者である姉の千代に、いくらか鼻白んだ聲で、呼びかけてみた。

ところが、かんぢんの千代姉さまの姿は見えなくて、ゴボウをそいだりナマス

をきざんだり、お椀を拭いたりしてゐた叔母さまや従姉さまたちが、くちぐちに、

「姉さまに何ぞ御用ですか、おひささん？」

「姉さまは今あらうで御用をしておいでぢやからのう、おとなしうしてお出でなされませよ、おひささん」

「おひささんは、か……」

賢いんだから……といふ玉木の叔母さまの言葉を、みなまでは聞かないで、壽子は、そこを抜け出し、仕方なく、こんどは、そつと三疊の小部屋をのぞきに行つた。

その小部屋は、もとは祖母の居間であつたが、いまは赤んぼうの文子が、すやすやと眠つてゐた。

壽子は、その枕もとに、そおつと坐つた。そして、しげしげと赤ちゃんの小さい寝顔を見つめた。

よく見てゐると、赤ちゃんといふものは、眠つてゐても、實によく顔を動かすものであつた。ぼつちりと赤い、かはいらしい唇を、モガモガさせるかと思ふと、聲も立てないで小さい小さいアクビをしたりする。それでゐて、いつたい、なにを考へてゐるものやら、まるで見當もつかなかつた。實にかしなものであつた。

けれども、壽子は、さうしてヂツと見てゐるうちに、赤ちゃんが、かはいくてかはいくて、たまらなくなつて來た。それと同時に、自分は、この赤子さんの姉さまだ、と氣がついた。

まるで素晴らしい寶ものでも見つけたやうな氣持だつた。なんとも嬉しくてたまらなかつた。

そもそも、この「姉さま」といふ言葉は、いままでの壽子にとつて、實をいふと、あんまり有難いものではなかつた。二つ違ひで妹の艶子が生れてからといふもの、したいことも、ほしいものも、なにかといへば、すぐ「おひさまは姉さまですよ」とか、「姉さまは賢いんだから」といふ言葉でもつて、いやいやながらも遠ざけられて来たからである。

それならそれで、その姉さまらしいところを、いくらかでも見せようとして、うつかり手をかけたりしようものなら、前の赤ちやんの艶子と来たら、たちまち、小さい瘦せた軀をのけぞるやうにして、ヒイヒイ聲で泣きだし、どうにも壽子に「姉さま気分」を味はせてくれないのだつた。

赤んぼうといふものもまた、壽子にとつては、姉さまといふ言葉同様、どうもあんまり有難いものではなかつた。

ところが、いま壽子の目の前には、まるで違つた別の新しい妹がある！

この新しい妹の文子は、よくお母さまも、

「肝のやけた艶姉さんの身がはりとでもいふのか、この子は、ほどよくお乳さへ吞ませておけば、いつまでもよう寝る、ほんに母さを孝行な赤子ぢやア」

といつて、喜んでゐるくらゐだから、丈夫で、世話がやけなくて、なんだか壽子の手にも負へさうな氣がする。

壽子は、そおツと赤ちやんの顔に自分の顔を近づけ、片手で軽くフツンを叩きながら、用心ぶかく、小さい聲で、

「おふみさん！」

と、呼んでみた。

お文さんは、しかし、ウンともスンとも言はないで、すやすやと眠つてゐる。さうなると、なんだか急に赤ちやんに急用でもあるかのやうに、

「お文さん。… お文さん！ お文さん！」



と、なにがなんでも手ごたへが見たくて、つづけさまに呼んでゐるうちに、とうとう、デツとしておられない氣持になり、

「お文さん、……お文さん、よいお子ぢや」

とばかり、自分でも氣がつかないうちに、むづと兩手を赤ちやんの肩にかけてゐた。

ふんはりと、やはらかい赤ちやんの肌を、なまあたたく兩の掌てのひらに感じたたとんに、ぎやア……と、赤ちやんのお文さんは、とても威勢のよい聲で泣きだした。

壽子は、びつくりして、あわてて手をひっこめた。——が、責任上、あわてながらも、一心にフトンを押しながら、子守唄を歌ひはじめた。その子守唄は少々變つてゐた。「ねんねんよウ」といふ歌ひだしや、節まはしなどは、だいたい普通と變りなかつたが、文句が變つてゐた。しのたまはく、まなんで而して……と

論語の文句がとび出すかと思ふと、とつぜん、海甸かいけんの陰風、草木なまぐさくウ……と頼山陽の詩がとび出したりした。

さういふ素晴らしい子守唄のききめか、赤ちやんのお文さんは、さいはひ、すぐにまた、おとなしくなつた。

「お、お、ほんによいお子ぢや」

壽子は、胸こそ、まだ少しドキドキしてゐたけれども、やうやく安心し、自信を得て、こんどは自分も赤ちやんの側に、ごろりと横になり、右手で頬杖をつき、左手では軽くフトンを押しながら

ねんねんよウ

山崎西に去れば櫻井の驛

サガミ、タラウノタン アメノゴトク

友あり遠方より來る

おころりよウ……

と、歌ひつづけた。

壽子は、いま、すっかり幸福であつた。うつとりと「姉さま」の喜びと誇と愉しさに浸りきつてゐた。——そして、いつか自分もまた、赤ちゃんと一しよに、ぐつすり眠つてゐた。

この頃の杉家は、いはゆる「團子岩の山屋敷」時代で、三疊の玄関に六疊づつの客間と茶の間、それに三疊の小部屋が一つ、といったやうな、至つて狭い家であつた。

その狭い杉家の座敷に、いま、楽しい夕食がはじまつた。——いや、はじまらうとしてゐる。

正面の床の間を脊にして、端然と坐つてゐるのが、いふまでもなく主人の百合之助。彼は今しがた藩廳から歸つてきて、すぐに手足を清め口をすゝぐと、まづ神佛を拜したのち、袴と大小だけをとつて、親戚の女たちの挨拶にこたへると、その女たちに勧めらるるまま、紋服姿のまま、すぐその座についたのであつた。——この年、ちやうど四十歳。謹嚴寡黙で聞えてゐる人だが、風貌は、いかつい感じではなく、むしろ、よくととのつた面長の優しい顔たちである。ただ、その清らかに澄んだ眼の光だけが、この人の高雅で毅然とした人柄を、さすがにかくしきれないでゐる。

その右隣りには、弟の玉木文之進が並んでゐる。文之進は、百合之助とは六つ違ひの、三十四歳。瘦型であるところも、面長のところも、兄によく似てゐるが、兄に比べて、豪毅……といふか何といふか、とにかく更に一段と強い激しい氣性を、その鋭い眼光にも、ひきしまつた口もとにも、はつきりと感じさせてゐる。

る。——が、彼は今さういふい、かつい、顔でなく、いくらか會心の微笑さへ泛べて、しきりに何か低聲で兄に話しかけてゐた。それに對して百合之助は、「ウム、ウム、いや、うむ。……う？　ウムウム、ウム、お、おお……」などと、至つて簡単な、しかしまた至つて誠實な、悠揚と、うちとけた態度で、うけ答へをしてゐたが、やがて大きく肯いて、うつすらと微笑を泛べた。

と、文之進も、かすかに聲を立てて笑ひ、そのまゝ話を結んだ。そして、その微笑を含んだ顔で、自分の左の方を見た。

そこには縁側の障子を脊にして、杉家の二人の息子が、仲よく並んで膳についてゐた。長男の梅太郎が、この時、十六。次男の大次郎が十四。二人とも、軀からだつきさも、顔だちも、父親似のやうであつたが、よくととのつた面長の顔だちであることは、兄の梅太郎の方が、より多く父に似てゐた。大次郎の方は、糸のやうに細長い目をしてゐたが、その目は、夢みるやうに清らかに澄んでゐた。この幼い

兄弟はまた幼い兄弟同志で、しきりに低聲で話しあつてゐた。その様子は、いかにも仲よささうで、見てゐても頬笑ましくなるほどであつた。

が、その時、この二人の方に顔を向けた文之進が、

「大次郎！」

と、弟の方に呼びかけた。重い殿しい調子ではあつたが、その顔には、この若い甥に對する、かくしきれない愛情があふれてゐた。

けれども、文之進は、話をつづけることが出来なかつた。ちやうどその時、茶の間とのさかひのフスマがあいて、女の人たちが入つて來たからである。女たちのあひだでは、敷居ぎはのところで、ちよつと座席の譲りあひがあつた。しかし、それはすぐにつきのやうに落着した。

すなはち、百合之助・文之進兄弟とは向ひあひの、玄關とのさかひのフスマを脊にして、奥から順に、吉田の叔母、久満子。——久満子は、はじめ名を里子と

いつたが、まぎららしいから久満子と御紹介しておく。なほまた、この人の素性や大次郎との關係についても、いづれ後に述べるとして、——さて、久満子の隣りは、幼いながらも父とともに今宵の主賓である長女の千代。千代は、小柄で、さる顔の、美しいといふよりは、かはいらしいと言ひたい娘であつた。母の手織の木綿ものながら、十二の娘にふさはしい紫模様の着物を着てゐた。それが白い柔和な顔によくうつて、一層かはいらしく見えた。

千代の隣りが玉木の叔母、辰子。文之進の妻である。

梅太郎・大次郎兄弟とは向ひあひの、茶の間とのさかひをなす方には、母の瀧子と壽子の中にして、兩側に佐々木の叔母と高須の従姉

瀧子は、この時、三十七歳。色白で肉づきがよく、柔和な顔に、いつも微笑をたたへてゐた。

さて大體これで顔ぶれはそろつた。もう一人ゐるにはゐるが、——そして、そ

れこそ、われわれの主人公であるが、まだ赤んぼうのことゆえ、目をさまして泣きだすまで、ちつと茶の間へ寝かしておかう。

「では、皆さん、なんにもありませんが、お氣持よう始めていただきませうかのう」

瀧子が、にこやかに開會を宣した。

「では兄さま！」

と、文之進が、さつそく、自分のお膳の前の銚子をとつて、百合之助の方にさし出した。

「やあ、こんばんはア！ 皆さん、おなさるかね」

その時、威勢のよい聲が玄關の方にした。

「お、久保の叔父さま！」

大次郎が口もとまで持つて行つたお吸物の椀を、そつとまた下におろした。

「やあ、これはちやうどよいところへ来たのう、これぢやから、わしはどうも、いつも運がええて。わッはッは」

づかづかと玄關から座敷の入口まで進んで来て、久保五郎左衛門は、いきなり高笑ひをした。

百合之助より一つ二つ年上らしく、どこか飄逸な風貌の男だった。片手には、水に入れたらまだ泳ぎまはりさうな、イキのいゝ生鳥賊なまどりをぶらさげてゐた。

「おい、よろこそ……。さあ！」

いつも口数の少い百合之助が、多くは目に物を言はせて、少し身をひきながら、自分と文之進のあひだに、招じようとする、

「いやいや、わしはその前に、こいつをこさへて来ますわい」と、生鳥賊をさし上げて見せた。

「おい、これは見事な……」と文之進が言ひかけたのと同時に、百合之助が

「あなたが……？」

と、例によつて、あとは目でたづねた。

「いや、あなたやお千代さんに御馳走しようと思ふての、實は自分で釣りに行きなかつたんぢやが、昨夜は用が出来て行けざつた。船津の魚庄に持つて来させましたんぢや。まだ生きとる。——お母さま、そいぢや、ちよいとお臺所を拜借しますで」

「ああ、それなら、わたくしが……」

「いやいや、あなたも料理はお上手ぢやが、鳥賊の刺身はのう、やつぱり、わしが得手ぢやて。はッはッは。——それにのう、ここのお父さまは酒もあまり上つ

てぢやないから、看にするのは大方このわしぢやからのう。はッはッは一陽氣な高笑ひを殘して、五郎左衛門は、さつさと勝手の方へ出て行つた。で、瀧子が、やはり手つだひに立た、とすると、久満子がそれをとめて、自分で出て行つた。

ここで簡単に久満子のことを述べよう。

杉百合之助には、文之進の上に、もう一人、吉田大助といふ弟があつた。次弟の大助は、杉家を出て吉田家を継ぎ、おなじく末弟の文之進は玉木家を継いだわけである。

吉田家は世々山鹿流兵學の師範家であつたが、大助は、識見も人格も、さういふ家を繼ぐにふさはしい立派な人物であつた。謹嚴豪氣で聞えた長兄の百合之助よりは、末弟の文之進が、より以上さうであつたが、この大助は、そのまた文之進に更に輪をかけたやうな人物であつたと言はれる。彼は久満子と結婚したが、

二人のあひだには、子がなかつた。そこで百合之助の次子——大次郎を請うて養子とした。

この大次郎が、のちの吉田松陰であるが、五つで大助の假養子となつた大次郎は、六つの時には早くもその叔父であり養父である大助と死別しなければならなかつた。だから、實際には、ひきつづき實家の杉家にゐたのであつた。

一方、二十三四で寡婦となつた養母の久満子は、これも黒川村の實家——森田家に移り住んで、なほ吉田家の務を果してゐたのであつた。黒川村といへば、この松本村からは一里以上も離れてゐたが、久しぶりに大次郎の顔も見たいからといふので、かたがた、今日はわざわざ出かけて來てゐるわけであつた。

それから、黒川村の庄屋——森田頼久の娘である、この久満子は、家格の釣合ひ上、久保五郎左衛門の養女として、吉田大助に嫁いで來たのだつたから、さういふ關係で、杉家と久保家も、ずつと親しい内輪の親類づきあひをつづけてゐる。

のであつた。

さて、その五郎左衛門の器用な手で烏賊の刺身がつくられ、それが久満子の手で一同に分たれると、楽しい食膳は一段と賑かになつた。

尤も、杉家の食膳を賑はしたのは、烏賊の刺身よりも、むしろ、それをたづさへて来た人の、陽気で高らかな談笑の聲であつたかも知れない。

實際、五郎左衛門は、よくしゃべつた。たいへんなごきげんで、ほとんど一人でしゃべつた。それは自分でも気がついてゐると見えて、

「いや、わしはようしゃべるのう」

と自分で感心するかと思ふと、すぐに、

「いや、わしにしてからが、なにも人並以上におしゃべりといふわけぢや決してないんぢやがのう、杉家の御一族がみんな言葉数の少い御仁ばかりぢやから、さう見えるんですわい。——なあ、さうぢやらうが、文之進さあ。はッはッは」

と盃を文之進にさしたりした。

「しかし、全くの話が、このお家は不思議なお家でござるて、皆さんが揃ひも揃うて、おとなしくて、しとやかで、ものも聲高には言ひなさらぬ。それでゐて、家の中は、いつもかう暖うて楽しい。だから、わしはここへ来たくなるんぢや。來ると、しかし、つい尻が長うなる。尻が長うなるから、歸つてから女房にもイヤミを言はれる……といふわけですわい。はッはッは」

五郎左衛門は笑ひながら、つるりと頭をかいた。

みんなが笑つた。

大次郎も細い目を一さう細くして、ニコニコと笑つてゐたが、この五郎左衛門の高笑ひをしほに、そつと座敷をぬけ出し、縁端に出た。縁端から、ありあはせの下駄をつつかけると、ぐるりと家をまはつて、庭に出た。

庭は廣かつた。(尤も、父の百合之助が、この家に住むやうになつてから、あらたに建てたといふ納屋と厩が、おなじ庭の内にあつたから、さう特別に廣いと吹聴するほどのこともなかつたかも知れないが……)

しかし、この庭から眺めわたされる風景こそは、全く、少年の大次郎でなくとも、それはもう十分に誇るに足りるものであつた。

見よ、この庭から、毛利三十六萬九千石の萩の城下が一目に見える。

阿武川の流れば下流に近づいて、二つにわかれ、清冽な水をたたへて日本海の怒濤にそそぐ。その右に流れるのを松本川といひ、左に流れるのを橋本川、もしくは玉江川といふ。そして、この二つの川に抱かれて、ちやうど扇をひらいたやうな地形の上に建つのが、萩の城下だ。

左の方、海に突出する形のよい丸い山が、指月山しげつきん。そこに長州武士が朝に夕に讃仰の目をあげて仰ぎみるお城、指月城がそびえてゐる。

この山の兩側にひろがる白い砂、青い松原の海へは、左が西ノ濱、右が菊ガ濱。——晝ならば、さらに遠く野長谷のびさ、鯖島、青海島の翠巒すいれんをも指さすことが出来る。

杉家の庭のすみには、二本の年老ひた椎の巨木があつた。

大次郎は、その大木の幹に脊をもたせて、さうした眺めなれた城下の夜景を、ちつと喰ひ入るやうな眼で見つめてゐる。

けれども、たとひ目は景色を見てゐるにしても、少年の思ひは、いま、そこにはなかつた。

彼の頭の中は、いま、明日からあのお城のほとり近くで暮すであらう父と妹のことで一ぱいだつた。わけても幼い妹のことが思はれてならなかつた。



梅太郎と大次郎の兄弟仲のよいことは、親戚のあひだにも村中にも評判であつたが、大次郎はまた、妹の千代とも仲がよかつた。

だから、その千代が、——まだやつと十二の千代が、いよいよ明日から父と中間とを相手に、ひとり城下で暮すのかと思ふと、それが不憫に思へてならなかつた。

千代が明日の朝この家を出る時、自分は何と言つて勵まさう？

大次郎は、さつきからそのことばかり考へてゐたのである。

と、折も折、その千代が、

「大兄さま！」

と、いつのまに出来たのか、側に來てゐて、そつと聲をかけた。

「おゝ」

細長い目を、この時ばかりはバチクリさせて、大次郎はデツと妹の顔を見つめ

た。いまのいま、ちやうど、頭の中に描いてゐた、その妹が、ひよつこりとそこに姿を見せたことが、なんだか不思議なやうな気がしたのである。——が、やがて、妹の微笑にこたへて、つい自分もニッコリしながら、

「どうなされた、お千代さん？」

と、やさしく聲をかけた。

「わたくし、大兄さまのことが……」

「私のことが……？」

「ええ、氣になつて……」

「氣になる？……あゝ、どこへ行つたかと思つて、氣になつたといふのだらう？」

「いゝえ」

「いゝえ？」

大次郎は、千代が何を言はうとしてゐるのか、げしかねて、目をバチ／＼と

させながら、もう一度その顔を見つめた。

が、千代は、にこッと笑つて見せたかと思ふと、ついと顔をそむけて、それなり口をつぐんだ。

その瞬間の白い愛くるしい顔が、大次郎の目には、暗の中に、ほのかに咲いた白い夕顔の花を思はせた。

月夜であつた。——あつたとしよう。帷の梢をもれる青い月の光が、その時の千代の、うるんだ清らかな眼を、チラチラと光らせた。

大次郎はそれを見た。思はずゴクリと唾をのむやうにして、低い追つたやうな聲で、しづかにたづねた。

「のう、お千代さん、お前は一人で御城下へ行くのが、心細いのではないかのう？」

「あら、どうして一人？ お父さまと一しよですのに……」

「それはさうだが、——晝間はのう、やつぱり」

「ええ、ですから、お晝間は、きつと、たんと暇があると思ひますの、さういふ時、わたくし、お裁縫をしたり御本を読んだり、それから……」

千代は、いま、心にないことを言つてゐるのではなかつた。けれども、さつき言はうとしたことは、さういふことではなかつた。——千代の氣持はかうであつた。

千代も、むろん、この兄の大次郎が好きであつた。家族の中で自分が最も親しみやすい人として、なついてもゐたし、同時に、深く敬つてもゐた。

わづか六歳で山鹿流兵學師範の家を嗣ぎ、十一歳の時には、早くも藩主の前に「武教全書」を講じて、藩主慶親公をはじめ並ゐるお歴々の人々を、あつと驚嘆させたといふ兄の大次郎……。

さういふ方面の大次郎は、幼い千代などには、とても足もとにも寄りつけな

いほど高い世界の、立派な人に見えた。それはもう仰いでみても、さぶしい程であつた。

けれどまた、この大兄さまは、しつかり者の梅兄さまなどとは、まるで違つて、なにかしら足りないところがあるやうな気がする。さう言つてわるければ、どこか知ら、ぼろッとしたやうなところ、ひとりて歩かせては、なんだか危ッかしい幼児のやうなところ……。

理窟はともあれ、この幼い時から世話ずきで苦勞性の優しい妹には、さういふ氣持がするのであつた。大次郎思ひの千代にしてみれば、そこが心配でもあり、そこがまた好きなどころでもあつたが……。

けれど、けつきよく、千代は、その氣持を打明けることは出来なかつた。説明のしやうもなかつたが、時間もなかつた。その時、

「大さん。……大さん！」

と、兄の梅太郎が大次郎をさがしに來たからである。

「お、兄さま、御用ですか」

大次郎は兄の顔を見あげたが、梅太郎は、それには答へないで、

「お千代、おまへ明日から大事な編ぢや、夜露にぬれるのはよくない。お入り」と、まづ、おだやかに妹に命じた。

「はい、それでは兄さまがたも……」

千代が二人の兄に會釋をして、さきに歸ると、

「大さん、お前どこか氣分でもわるいのではないか」

「いゝえ。——どうしてですか」

「いや、なに、おまへが途中で、すつとゐなくなつたから、どうしたかのお思つ

ての。が、何でもなければよい。——さあ、家に入らう。お父さまがお呼びだ」  
兄は弟の肩に腕をまはした。

座敷にもどると、父ではなく叔父の文之進が、きげんよく兄弟に命じた。

「お、大次郎、さあ、梅兄さんと二人で元氣よく詩吟をやれ。なんでもよい、お父さまに教へていただいたのをやれ」

梅太郎と大次郎は聲をあはせて吟じはじめた。

海甸いづみの陰風、草木なまぐさくウ

史編特筆して姓名かんばし。

一腔の熱血……

文之進自身もそれに聲をあはせた。低聲ながら百合之助の聲も加はった。しまひには、もうかなり酔つてゐた五郎左衛門までが、その仲間に入った。

山の中の一軒屋……。老若五人の男は、楽しげに吟じ、吟じ、吟じつづけた。

女たちもまた楽しさうにそれを開い

と、とつぜん、茶の間の方から、詩吟の相の手をつとめるかのやうに　ぎゃ

と、元氣のよい聲が聞えて来た。

「あら、あら、お文さんが……」

あわてて千代が茶の間のぞきに行つた。

「お、お、こりや悪かつたのう」

百合之助も、文之進も、五郎左衛門も、思はず頭に手をやつた。

第二章 お因み會

行燈の灯の近くで、妹の文子に贈るつもり、よだれかけを縫つてゐた千代は、表の通りに下駄の音が聞えてきたので、ちよつと手を休めて、きき耳を立てた。

からッ、ころッ、からッ……。さえた下駄の音は次第に近づいて来たかと思ふと、たちまち家の前を通り越し、次第にまた遠のいて、やがて聞えなくなつた。「やつぱり違つた……」と思はずひとりごとを言つて、千代はまた、すぐにひとりで苦笑した。父の履き物のことに気がついたからである。

「お父さまは麻裏草履……。それに、お父さまならば、決してあんな風にはお歩きにならない」

さう思ひながら、それをしほに縫物をやめて、父のお膳の覆ひをとつてみた。

ガマスの潮燒、サトイモの煮つけ、大根の若葉の一夜漬……。

四八

お膳の上には、ささやかながら、父の好物ばかりが並んでゐる。とりわけ、このカマスは、よそからの戴きもので、この秋はじめて食膳にのぼすものだけに、よけい父の歸りが待たれてならない。

「遅いこと！ いつたい、どうなされたのか知らず？」

いろいろ考へてゐると、父の身の上までが氣づかはれてくる。

けれども、父の歸りが時として夜に入ること、なにも今日がはじめてのことではなかつた。

「きつと今日も何かお動向の御都合で……」

さう考へなほして、千代はまた針を手にとる。

と、どこかで、チチロ、チチロ……と、生き残りのコホロギが鳴いてゐる。それを聞くともなく聞いてゐると、おのづと頭の中には楽しい團子岩の家のことが

えがき出されてくる。

千代が、このお城に近い江向の假寓に移つて来て、父とともに暮すやうになつてから、もう一年以上になる。千代はもう十三歳である。そのあひだ、千代は、父の身のまはりの世話から家事一切を、小さい手ひとつにひきうけて、父にいささかの不自由もさせないやうに努めて来た。

日々、父と仲間の辨當もこさへて、送り出し、時には仲間の着物のつくろひも自分でしてやつて来た。

そのまめやかな働きぶりに、ほとほと感心した武骨者の仲間が、寒い朝など、氣の毒に思つて、お嬢さま、今日の炊事は私がおひきうけしませう、などと申し出ることもあつたが、その都度、千代は、

「いゝえ、それは女の私の仕事だから」と、ことはつて、

「さういふ暇、あつたら、お前はお父さまのお身のまはりに氣をくばつて、お動向に落度がないやう、よくお仕へして下さい」と、たしなめたものであつた。

さういふ健氣な、甲斐性者の千代ではあつたが、さて父と仲間を送り出して、ひっそりした家の中に一人ざりとなると、やはり淋しくなくはなかつた。よく團子岩の家のことを思ひ出した。そこが特別に暖い家庭であつただけに、ひとり離れてゐると、ひとしほ慕はれてならなかつた。

ふつくらとした母の白い顔、かはい、赤んぼの文子の顔……。

千代の目には、なんだか少し風変わりな娘のやうに思へる次の妹、壽子のこと。いかにも兄らしい兄の梅太郎のこと。

それから、大次郎のこと！ この二つ違ひの小さい兄のことを、千代は、母のことともに一番よく思ひ出した。それも幼い兵學家としての輝かしい方面より

は、もつと他愛ない子供っぽいことを。たとへば、庭のすみの椎の木の下で、この兄と二人で椎の實を拾つたこと。裏の山に松茸とりに行つて、すべつてころんでチガヤで指を切つたこと……。

と、その時、

「おかへりイ！」

玄關に聞きなれた仲間の聲がした。

「あ！」

とたんに夢からさめたやうに、千代は、いそいそと立ちあがつた。

「すぐお夕食になされますか、それとも……」

「まづ着更へよう」



「はい、それでは……」

千代は父のうしろに立ち、うしろから不断着を着せかけると、ぬがれた袴をたみ、羽織をひとまづ袖だたみにして、着物をひきよせた。と、ごとりッ、と何か袂に入つてゐるらしい手ごたへがして、畳の上に鈍い音がした。おや、と思つて、とり出してみると、紙にくるんだ何か石のやうな重いものであつた。

「お父さま、これは……？」

「う？——あ、それか、フブン」

謹嚴な百合之助の顔に微苦笑が泛んだ。

「ほしけりや、とらさう。石ころぢやよ、ただの。菊ヶ濱で拾つて来たんぢや」  
千代は、ひらいて見た。まさしく石ころであつた。ただの石ころであつた。千代は、ちよつと變な顔をした。まさか父が金鑲かダイヤモンド……いや、ダイヤモンドなどといふ名前のものは、まだその時代にはなかつたかも知れぬ、——

が、とにかく、まさか父が寶石を拾つてきたとは思はなかつた。たぶん、輕石のやうな双物のサビを落したり、砂石のやうなお釜の尻を磨いたりするための、石であらうと思つた。だから父の細かい心づかひに感謝しながら、

「ありがたうございます」

と、謹んで頂戴した。すると、父はまた「フフフ」と笑つた。

父と娘のおそい夕食がはじまつた。すこし離れて仲間も同じ部屋で食べた。

父は「遅くなつた」とも「待たしたのう」とも言はなかつた。それは今日に限つたことではない。まだ十三の小娘が、もう一人並の主婦みたいに、所帯のきりもりに苦勞をしてゐる、その苦勞のほども、十分に知つてはゐながら、それに對して、べつに勞はりの言葉も口にしなければ、ほめもしなかつた。そのかはり叱言もいはなかつた。千代が何か下手をやつたやうな時でも、かんとんに「お母さまはさうはされぬやうぢやの」といふだけであつた。

この「お母さまは」とか、「お母さまならば」とかは、よく父の口から出た。そして、それは母を愛し敬つてゐる娘にとつて、いろいろの意味で、効目の多い言葉であつた。千代は、母を忍ぶことによつて、幼稚な生活の工夫を積むことが出来たし、また、この言葉の裏に、父の母に対する氣持が讀めた。父が母を重んじてゐるといふ事實を知ることが、その両親を限りなく敬つてゐる子等にとつて、何と胸のふくらむ喜びであつたらう。

父が述べない勞はりの言葉を、よく仲間は口にした。

「今日は御用の筋で午すぎから菊ヶ濱へお廻りなされましたのでな、お嬢さまもお待ちなされたことでござりませう。かういふ時は、お父さまにも御免をかうむつて、おさきにお夕食もおすましなされようござりましたらうにのう。——しかしなア、かうして嬢さまの小さいお手でおこさへなすつたお御馳走を頂戴するかと思ふと、私……いえ、ほんとうでござります。旦那さまの前ではござります

が、ほんにこの嬢さまは、よう……」

「もうよ」

百合之助は止めた。そして、その仲間と言つた。

「それより、おんしがよう忠實に仕へてくれるで、わしも大きに助かる。——が、まア働いてくれ。——よい働きには、よい報ひもあらう。——疲れたぢやらう、さがつて手足を伸ばせい」

「ありがたうござります。それはもう、わたくし、旦那さまのおためならば……」  
仲間はひきさがつた。ほのかに行燈の灯のもとに父と娘だけが残つた。

「お千代、わしのおみやげ、よう見たかの？」

さう言はれて、千代も氣がつき、もう一度その石を行燈の灯の近くで見た。何べん見たところで、ただの石ころには違ひなかつた。しかし、すべすべとした形のよい石で、おまけに、よく見ると端の方に小さい孔があいてゐた。それも錐な

どで殊更にあけたものではなく、自然にうがたれた孔であつた。

「おや、こんな小さい孔が……」

「のう、面白いぢやらう。波がさうしたんぢやよ、波がのう、何百年……あるひは何千年の間に。——まさか床の間の置物にもなるまいが、お壽なんどのママゴト遊びの道具にはならう。こんど歸る時、おみやげにせう」

父は笑つた。しかし、その時、千代は、ふつと、よいことを思ひついた。

「ちよつとお待ちなされませ、お父さま！」

千代は、部屋のすみから小箱をもつて來て、かねて貯めておいた小ぎれをとり出し、その中から水いろの、——いまで言つたらリボンのやうな布ぎれを選んだ。その端に紙をつけてコヨリにし、石の孔に通した。ぎゅつと結んで、端はそのままヒラヒラと残した。

「お父さま、これ！」

「何ぢや、これは？」

「はい、大兄さまたちがお習字などなさる時の……」

「文鎮か！、うふッ、わしもそこまでは思ひつかなんだ！」

しばらく親子は笑ひつづけた。が、やがて百合之助は言つた。

「お千代、團子岩に歸りたうはないかの？」

「はい、それは歸りたうもござりますが、でも、お父さまがここにお出でなされるあひだは、わたくし……」

「ところが、わしも歸れさうなんぢや、近いうちに」

「えッ？」

千代は、まじまじと父の顔を見つめた。その目の色は、家に歸れる喜びよりも、もしか父の動向に……といふ心配の色の方が深かつた。父もすぐにその目の色を読んだ。

「心配すな、お動向も上々の首尾での、もう團子岩から通つても大事ないのちや。——のう、お千代、お前も一年あまりの所帯持で、よい修業をしたの、辛かつたか」

「いゝえ、少しも……」

「それならよい。もしお前が男の子ぢつたらのう、もつと苦勞をしなければならんやうな時もあるのぢやぞ。その男の苦しみを、内から助けて勵ましてやるのが、女子の務なんぢや。——まア、よい修業ぢやつたと思ふて、この經驗を無駄にしないことぢやな。そしたらお前も、いまにお母さまのやうなお母さまになれるぢやらう。——わしは楽しみにしてゐるんぢや、お前の將來をのう」

一年あまりの江向の生活で、父が娘にあたへた、それがあとにもさきにも唯一度の訓戒であり、おほめの言葉であつた。

千代は、しかし、一年あまりの苦勞をへんに忘れほどに喜びを感じた。おま

への將來を楽しみにしてゐるぞといふ、その父の一語に……。

百合之助と千代は、この年の暮に、團子岩の家に歸つた。

——その頃にはもう、年號も弘化と變つてゐた。

百合之助と千代が城下に移る時、送別の宴をひらいた親戚の人々は、年が明けから、こんどはまた歓迎の宴を、やはり狭い杉家の客間にひらいた。

大體この前と同じ顔ぶれであつたが、高須の従姉は既に他家へ縁づいてゐて、こんどは來なかつた。そのかはり、こんどは兒玉太兵衛といふ老人がやつて來て、謹嚴な百合之助を恐縮させた。それから、この前の時は茶の間に寢かされてゐて、最後に「ぎやア……」と詩吟の相の手をつとめただけの女子も、この時は

もう、片言もしやべれば、よちよち歩きもして、立派に一員に加はつた。  
ついでに見玉太兵衛のことを述べよう。

この見玉家といふのは、岸田氏の一族で、杉家とは深い縁のつながりがあつた。第一に、百合之助の妻、澁子は、太兵衛の養女であつた。——澁子は、實際は村田右中といふ人の娘で、その家は富裕であつたが、身分が低かつたので、家格のつりあひ上、ちやうど吉田久満子の場合と同様に、杉家と同格の藩士見玉太兵衛の養女となつて、百合之助に嫁して來たわけである。つぎに、百合之助・文之進兄弟の母——岸田氏は、この太兵衛の姉にあたつてゐたし、更に、文之進の妻、辰子は、太兵衛の妹にあたつてゐた。

ところで、この太兵衛老人は、有名な氣むづかし屋で、親戚中のウルサ型であり、カミナリオヤヂであつた。邪惡だといふのではなく、それどころか、曲つたことが嫌ひで、邪惡をにくむことダカツのごとく、それゆゑにこそその氣むづか

し屋であつた。と言へるかも知れない。

それはとにかくとして、さういふ老人が一枚加はつたせゐでもあらうか、はじめのうちしばらく、こんどの會は、この前ほどには陽氣でなかつた。

が、まもなく久保五郎左衛門が、この幾らか堅苦しい空氣をやはらげた。あひかはらず彼は高らかに語り、高らかに笑つた。——といふと、いかにもこの男が道化役のやうに聞えるかも知れぬが、それは違ふ。のちにわかるやうに、彼もまた、杉一族の名にそむかぬ相當の學者であり、人格者であつた。どこか風變りな、飄逸味のある男ではあつたが……。さて、はじめのうちしばらく、叔母たちの話題はといへば、ほとんど千代のことばかりであつた。幼い身空でよく家事の面倒をみて來た千代に對する、稱讚の言葉であつた。——で、五郎左衛門の話も、それをキツカケにしてはじめられた。

「全く、お千代さんは感心な嬢さまぢやが、お千代さんに限らず、わしはこの杉

御一統の御婦人たちには、いつも感心してゐますがのう。元來この女子おんなといふものは、——それ、女といふ字を三つあはせて姦かんしいと讀ませてゐるくらゐぢやから、おしやべりなもの、うるさいもの、大事を語るに足りぬもの、といふ風に、昔から相場がきまつてゐたと見えますがのう。——それがその、この杉御一統の場合は、ちと當てはまりませんわい。この御一統には、くだらん無駄話に時をつぶしたり、人さまの蔭口かげぐちたたい面白がつたりするやうな、はしたない御婦人は、一人もおありなさらん。みんながみんな、その……」

「いや……」と文之助が言葉を挿んだ。「そのお言葉では御婦人連も痛み入らうが、しかし、この兄はですな、久保の叔父さま、よく言つてゐますよ、暇があつたら女も本を讀めとね、本を讀まなくては話の種も盡きるものぢや、種が盡きるから、それ、いまの叔父さまのお話ぢやないが、くだらん無駄話をする、人の蔭口をきく、井戸端會談とやらをやらかす……」

「全く、全く」と、五郎左衛門は大きく肯うなづいた。「全く、益のない話ぢや。いや、益のないどころか、大きに害のあることぢや。蔭口たたい傷やぶけられるのは、される方ではなうて、する方ぢやからのう。——暇があつたら本を讀めか。よい訓しへぢや。書物といふものは有難いものでのう、自分がその氣になりさへすれば、いくらでも知慧と一しよに話の種も授けてくれますぢや」

「ぢやが、その氣になることがのう、なかなかその……」

「うむ、それがのう」

「でござりますからなア、叔父さまがた」と、この時はじめて瀧子が口をひらいた。「かうして集まりました折など、せめて叔父さまがたが爲めになるお話を女子どもに聞かして下さいますと、私たち……」

「うむ、なるほど」と、ひとり肯うなづいてゐた文之進が、だしぬけに五郎左衛門に言た。

「久保の叔父さま！ どうでせうな。いまの嫂の話で思ひつきましたが、われわれの親戚内で、婦人を中心にした修養會のやうなものをつくりましては？」

「お、それぢや！」

五郎左衛門は膝を叩いた。それから、くるりと太兵衛老人の方に向き直つて言つた。

「どうでござりませうな、見玉のおと、さま、われわれ親戚のうちで婦人の修養會をつくりましては？」

「女子の會をのう、なるほど、結構でござらうのう」

太兵衛老人の調子は、いかにも皮肉げに開えたので、人のよい五郎左衛門は、しばらくキョトンとしなが、やがて百合之助の方に顔を向けた。

「百合之助さま、あなたはどうお思ひで？」

「結構でござりますな。わしも婦人の修養といふことについては、かねがね考へ

てをりました。お壽やお女がもうすこし大きくなつたら、せめて家だけででも、さういふことをやつてみようかと、お澁ともよく話してゐたこととでござりますが……昔から、どのやうな思臣も、孝子も、みな、女子が生んで、女子が育てたのでござりますでう。——女子の修養は大切でござります」

それで話はきまつた。多くの場合、ひとの半分も口敷をきかず、しかも、多くの場合、最後の決着をつけるのは百合之助の一語であつた。

この時の集まりが機縁となつて、杉一族には、ごく打ちけた家庭的な集ひの中に、一族の親睦と修養と向上を計らうといふことを目的にした婦人會が生れた。その會は、——たとひ色々の事情から多少の断續はあつたにしても、それ以來、月に一回ぐらゐの割で、かれこれ三十幾年ものあひだ、ずつとつづけられた。そ

して、この會を、いつ、だれが名づけたか、いつからとはなしに「お因み會」と呼ぶやうになつた。

しかし、それは後日のこととして、やがてお因み會の中心となるであらう杉家の三人姉妹——千代も、壽子も、文子も、いまはまだ幼なすぎた。

明けて七つの春を迎へたばかりの壽子は、この時刻にはもう、吉田の叔母（久満子）にもたれかかつて、コクリコクリと、ゐねむりをはじめてゐた。

反對に、三つになつた文子は、この時分になつて、ぼつちりと目をさまし、なんと思つたか、名づけ親の文之進のところへ、よちよちと歩いて行つて、

「おゝ來たか、どら、どら、おゝ、大さうなつたぞ。重い、重い！」  
と、謹嚴剛直の叔父に抱きあげられて、きやッきやッと笑つてゐた。

しかし、まもなくその叔父の手をすりぬけると、こんどはまた、人もあらうに、一族きつてのウルサ型、太兵衛老人のところへ、よッち、よッち……と歩い

て行つて、あやうくそこで尻餅をつかうとした。一同が思はずはッとしたが、

「おゝ、ござれ」

太兵衛老人は、その武骨な手で、小さい孫を、こわれものでも掴むやうな恰好で抱きあげてゐた。

「おぢぢい、おぢぢ……」

文子は、手首がくびれるほど、まるまると肥つた可愛い手で、太兵衛老人の皺くちやの顔を撫でまはしはじめた。老人、くすぐつたさうな珍妙な顔をしてゐたが、まんざらでもなささうだつた。が、そこへ千代がよつて來て、

「さあ、お文さん、お文さん！」

と上手に抱きとつて、茶の間の奥へつれて行つてしまつた。

太兵衛老人、内心ちよつと不満だつたが、やがて幼児に用をたさせる千代の聲をかすかに耳にすると、ひそかに、



「フム、よく氣のつく娘ぢや」

と、感心した。しかし、さういふ氣持はオクビにも出さず、あひかはらず（世の中は一向に面白くも何ともない）といふやうな、しぶい顔をしてゐた。

反對に、叔父の玉本文之進は、

「さあ、梅太郎！ 大次郎！ 詩吟をやれ、詩吟を！」

と、上きげんで、自慢の愛弟子である二人の甥に命じた。

——文之進は、この數年前から自宅に松下村塾をひらき、梅太郎も大次郎も、その教へを受けてゐた。殊に大次郎は、この時代には文之進宅に泊りこみで指導をうけてゐたのである。

詩吟がはじまつた。

杉家は平和であつた。

そこで、われわれも、ここで幾年かを一度に飛越すことにしよう。

時は、天保から、弘化—嘉永—安政—と移つて、安政三年には、もはや女子も十四歳であつた。

そのあひだに、長姉の千代は、あの親戚中の氣むづかし屋、兒玉太兵衛を舅として、その息の兒玉初之進（祐之）に嫁ぎ、すでに子供があつた。

次姉の壽子は、篤學の儒者、小田村伊之助に嫁し、これまた一兒の母であつた。

長兄の梅太郎修道は、父とともに藩廳に仕へ、謹嚴温厚の若侍として、朋友間に重きをなしてゐた。

次兄の大次郎矩方は、この時二十七歳、すでに吉田松陰として、その名やうやく天下に高かつた。

文子にはまだ、二つ違ひの弟があつた。弟の敏三郎は、氣の毒に、生れながらの腫であつた。

この年の前年、——萩の城下に蜜柑の花かをる初夏の夕べであつた。母の瀧子は、まだねんねしばかり思つてゐた末娘の文子のために、お赤飯を祝ひ、父の百合之助は、娘が一生の身の守りとすべき懐剣をあたへた。娘の成長をことほぐ場合の、萩地方の慣習であつた。

一方、久坂秀三郎の方には、その後、べつに變つたこともなかつた。兩親や兄の、いよいよ深い愛情の中に、すすくと生ひ立つて、幸福な幼年の日から少年の日へと移つて行つた。

秀三郎は、萬事におつとりとして、いかにも鷹揚な少年であつた。尖つたもの、鋭いもの、あるひは、閃くやうなもの、——たとへば、さういつたやうな、いはゆる天才的なものや、英雄的なもの芽生えは、まだどこにも見えてゐなかつた。そのかはり、あくまで少年らしい、純な、まぢりけのない優しさ、素直さを、多分にもつてゐた。

すんなりと伸びた四肢も、色の白い面長の顔も、氣品があり魅力があつた。とりわけ、その清らかに澄んだ黒い大きな目は、何かしら人をひきつけるものがある。

つた。——尤も、その片方の目が少し眇すかであつて、そのことを母の富子はひどく氣にしてゐたけれども、それとても、この美しい少年の顔を傷けるほどのものではなかつた。

さいはひ、頭もよかつた。

はじめ吉松淳三の吉松塾に學び、のちに藩費——明倫館に入つたが、どちらにいても秀才のほまれが高かつた。

兩親や兄の喜びや満足も、ひとしほ大きかつたわけで、父や兄は、一層それに力を得て、忙しい中にも暇をぬすんでは大いに勉學を助けてくれた。

つまるるところ、少年の日の久坂秀三郎は、満ち足りた愛情の中に、のびのびと生ひ立つた、あどけない少年だつた。それはのちに彼自身が、

青年何心徒颯然

鳩車竹馬送流年

秋林木脱貧梨棗

春野風和放紙鳶

云々。

と詩の中にも歌つてゐるやうに、秋には梨や棗ダイダイの果をちぎり、春にはタコをあげ、——ちやうど、今日われわれが毎日まはりに見てゐる多くの子供等とおなじやうに、それ、お祭だ、お正月だ、セミだ、トンボだ、スズムシだ……と遊びまはり飛びまはる、無邪氣な少年の一人だつたのである。

ただ、運命は、この無邪氣で可憐な少年をも、さう長く甘やかしてはおかなかつた。

やがて、不幸の日が來た。

嘉永六年……といへば、われわれはすぐにアメリカの黒船騒ぎを思ひ出す。

が、十四歳の少年の胸をおそつた衝撃は、それではなかつた。

少年自身にとつては、もつと切實な目の前の問題であつた。母の富子が病を得て、死んだのである。この年の八月四日のことであつた。少年の悲しみは大きかつた。

「秀さん」

うしろから兄の玄機が呼んだ。

佛間で、しよんぼりと母の位牌を見つめてゐた秀三郎は、返事のかはりに、ふりかへつて、おつと兄の顔を見あげた。その黒い大きな目は、うるんでゐた。

「のう、秀三郎さん、氣持のよい秋晴れた、家にデッとしてゐるのは惜しいよ、ちと街でも歩かうか」

いま出先から歸つてきて、やつと袴をぬいだけばかりの兄が、どうしてまた外を歩きたいなどといふのか、それは秀三郎にもよくわかつてゐた

兄の暖い心づかひを無にしてはいけないと思つて、だまつてコックリをした。

兄弟は平安古本町こほんまちの家を出た。

門から通りへ出ると、玄機は、さて、といふやうに、ちよつと立ちどまつて、右の方を見たり、左の方を見たりしてゐたが、すぐ、

「どこへ行かうな、秀さん？」

と、弟の顔を見た。

玄機は、袴をぬいだけばは、外出そとでの時のままだつたから、糸入縞の袷に黒紬三絞の羽織を着て、蠟色鞆の大小をおびてゐた。醫者のことゆえ、むろん、坊主あたまであつた。

秀三郎は、目のあらい木綿縞の着物に、羽織なしで、袴をつけてゐたが、その

袴はもう、つんつるてんで、白い長い二本の脚がむき出しに見えてゐた。この秋には仕立直して上げよう、と母が言つてゐた袴であつた。

二人とも麻裏の草履をはいてゐた。

兄弟さうして並んで立つと、秀三郎も丈はもうすぐ兄に追いつきさうだつたが、肩幅の廣い兄に比べて、まだヒョロリとした秀三郎は、誰の目にも兄弟とは見えず、まるで親子のやうであつた。

その時、秀三郎は、兄が立ちどまつたので自分もそこに足を止めて、片方の足で軽く地べたに輪を描くやうなことをしてゐたが、兄に聞かれて、

「わたくし、どこでも……」

と、煮えきらない返事をした。

「どこでも……か、は、は、。ちやア、とにかく、こつちへ行かう」

と右の方へ歩きだした。

ぶらぶらと並んで歩きながら、しばらくはどちらも黙りこんでゐたが、そのうち、秀三郎が、そつと兄の横顔を見あげて、おづおづしたやうな調子でたづねた。

「兄さま御用がおありぢやないのですか」

「御用か、それはもう、山ほど、くさくさするくらゐ……。だから、たまにはチトのんびり歩いてもみたいのさ。——どこでもいい、秀んの好きなところへ行かう」

「保福寺へ……」と言ひかけて、すぐ「保福寺では遠すぎますか」

「保福寺？」

驚いたやうに、こんどは兄が弟の顔を見やつた。

「だつて、保福寺へは秀さん今朝も一人でお参りしたんぢやないか」  
弟は顔をそむけた。

保福寺には久坂家の墓があり、母の富子はそこに葬られてゐた。返事がないので、兄がつづけた。

「そりや保福寺へお参りしてもいいが……」

「いゝえ、保福寺でなくともいいのです、僕は」

「秀さん」

弟の調子がひどく切口上だつたので、玄機はちよつと改まつた聲で呼びかけたが、すぐ氣づいて、笑ひながら、おだやかにたづねた。

「はゝい。秀さん、おまへ何か勘違ひしてゐるんぢやないかね？」

「何がですか」

「それ、その口調。……いや、兄さんはね、秀さんが誰に言ひつけられるでもないのに、ひまさへあれば一人でよく保福寺へ行くことを、ちやんと知つてゐるので。そして實をいふと、感心してゐるのです。だから、それはよい。だがね、秀

さん、——いや、そりや秀さんの氣持は兄さんにもようわかる、もう四十にもなつた兄さんでさへ、お母さまのことを思ふと、全く、たまらない氣持になるからう。だから決して無理とは思はぬが、しかし、そこをひとつ考へてもらはなくちや、のう、秀さん。秀さんがどんなに悲しんでも亡くなられたお母さまは……」

「わかつてゐますツ、そ、そんなこと！」

鋭い一ツ聲を撥ねかへしたかと思ふと、秀三郎は、いきなり、いつさんに駈けだしてゐた。

反對に、玄機の方は、びつくりして思はず、そこに立ちどまつてしまつた。が、すぐに氣がついて、

「待て、秀さん！……秀三郎！」

と、呼びとめたが、もう少年の姿は向ふの横丁のかけに消えてゐた。

玄機は思はず「ちえツ」と舌を鳴らしたが、すぐに首をひねつて考へこんだ。

「はて、どうしたものかのう、あの子を今後どう導いたらよいものか……？」  
一方、われを忘れて兄の側から駆けだした秀三郎は、一散に走つて、最初の横丁を左へ曲ると、そこで足をゆるめ、あたりを見まはして、誰も人が通つてゐないのを確かめると、大急ぎで兩方の隘せまをこすつた。それから、なに食はぬ顔をして、こんどはゆつくりとまた歩きだした。つぎの横丁の角へくると、こんどは右に折れた。わかれ路に來さへすれば、右か左か、どちらかへ必ず曲つた。さうして幾つか曲りまがつて、やがて菊屋横丁の通りへさしかかると、いきなり、

「久坂君」

と元氣のよい聲で呼びとめられた。

びつくりして顔をあげると、それは高杉晋作であつた。

自分では氣がつかずにゐたが、ちやうど、高杉晋作の家の前を通りかかつてゐたのである。

「久坂君、どこへ行く？」

晋作もこれからどこかへ出かけるらしく、ちやうど自分の家の門を出てきたところだつたが、秀三郎の妻を見かけると、なれなれしく近よつて來て、ニコニコと聲をかけた。

晋作もまた、眉秀で目もと涼しい少年であつた。

秀三郎よりは一つ年上の十五であつたが、二人は吉松塾で一緒のことがあつたから、顔みしりの間であつた。

しかし、晋作は、彼自身の本名そっくり、それこそ「春風」を切つて走る若駒のやうに元氣のよい、小豪傑型の少年で、どこに行つても萬事に威勢がよく、いつも同輩の上に立つてゐた。



一方、秀三郎はといへば、これは既に述べたとほり、萬事におつとりと鷹揚な方で、みづから進んで人の上に出ようとするやうな氣ぶりなど、まだどこにも見えなかつた。だから、たとひ心のうちでは、なにを晋作づれが……と思ひはしても、かうして途中でばつたり顔があつたりすると、つい、こちらがさきに目をそらしてしまふ……といった風であつた。

それに、おなじ長州藩士の子弟ではあつても、高杉と久坂では、いくらか身分のひらきもあつた。

晋作は、祿高二百石を食む高杉小忠太の長男であり、一人息子であつた。

尤も、さうは言つても、晋作の方では、いままでも秀三郎に對して特別の好意や敬意こそ見せなかつたが、同時に、輕蔑したり馬鹿にしたりするやうな風もなかつた。

ところで、いま、その晋作は自分の方から近よつて來て、いかにも人なつツこ

くニコニコと話しかけてゐる。そして、さういふ時の晋作は、いかにも良家の坊ちやんらしく、上品で、おほらかで、親しみやすいものがあつた。

で、秀三郎の方でも、つい、ニコニコしながら、

「ウン、ぼく……」

と、答へかけたが、あとがつづかなかつた。なにしろ、自分自身が、どこへ行くといふあてもなく、ぶらぶら歩きをしてゐたのだつたから……。

「ぼく、その、ただ……歩いてゐるんだよ、腹こなしさ」

「腹こなし？ フーン、そいつはちやうど都合がいゝぞ。ねえ、久坂君、ぼくと

一しよに行かないか」

「一しよにつて、どこなの？」

「周布さんのところだ」

「周布さん？ 周布攻之助さまのことか」

「さうだよ、周布先生のところに、ぼく、これから遊びに行くんだ。君も行かないか、面白いぞ」

「周布さまが君や僕と遊んで下さるのか」

「遊ぶつたつて、ぞりやコマを廻したりなんかして遊ぶわけではないさ、お話を聞くんだよ、天下のこと、それから外國……外國の情勢なんかをな」

「……」

秀三郎は、まぢまぢと晋作の顔を見た。

しかし、晋作の方では、さういふことには一切おかまひなしで、瘦せた小さい肩をそびやかして、あとをつづけた。

「なあ久坂君、僕たち、まだ若いからちうて、決して油断はならぬぞ。世界は、どんどん動いて行く。君と僕とが今かうして話をしてゐるあびだにも、どんどん動いて行くんぢやからのう。君！メリケンの黒船がゐるばかりくさつて、浦賀に乘込

んで來よつたのは、今年の六月だぞ、僕たち、このことを忘れてよからうか？

ならぬぞ、斷じて忘れてはならぬのだ。ぼく、さういふことを考へるとな、よる寝ても眠れないんだ。胸がブルブルとしてくるんだ、腕がムズムズするんだ！」

「……」

秀三郎は、自分自身が非常に美しい聲の持主であつたが、晋作のさういふ時の甲高い聲を、まるでかう美しい音楽をでも聞くかのやうに、うつとりと聞いているた。

二人は、いつどちらからともなく、肩を並べて歩いてゐたのであつたが、この時、秀三郎は、ふと、われにかへつたやうに、きつぱりとした聲で言つた。

「高杉君！残念だが、ぼく、これで今日は失禮する。家に黙つて出て來たんだし、お父さまも、もう歸られる頃ぢやから……」

「さうか、それは残念だが、仕方がない、ぢや——」

「失敬」

と、別れかけたが、

「久坂君」

とまた普作が呼びとめた。ふりかへると、いきなり、ひづと秀三郎の手を握つて、

「僕な、久坂君、いまままで君とあまり話したことはなかつたが、ほんとうをいふと、君が好きなんだ、尊敬してゐるんだ。これからは仲よくして、大いに談じようぢやないか、さつき僕が言つたやうなことをな。——ちや、失敬！」

ぎゅつと手に力をこめたかと思ふと、こんどはその手で、ボンと秀三郎の肩を叩いて、高杉普作は、くるりと廻れ右をした。

秀三郎は、まだ立ちどまつたまゝ、そつと自分の手を見た。ぎゅつと普作に握られた自分の手を……。

さて彼もまた歩きだした。いま、彼の足は非常にのろかつた。しかし、反対に、その頭の中では、非常な速さで、つぎのやうなことを考へはじめてゐた。高杉普作は、年だつて僕より、たつた一つ上でしかないのに、あいつはもう、あんなことを考へちよる、だのに、この僕は……)

天下、國家、外國、メリケンの黒船……。さういつた言葉が、いま、秀三郎の頭の中でも、ぐるぐる廻りをはじめてゐた。

さういふ言葉は、秀三郎にしたつて、實は決して初めて聞く言葉ではなかつた。なにしろ、兄の玄機は、優れた蘭醫で、人々にも尊敬される洋學者で、海防論者で、勤皇家だ。そして、弟の教育に熱心な彼は、さうした自分の識見なり思想なりを、弟に分ちあたへることを決して惜しみはしなかつた。

また、兄の盟友には、中村道太郎とか、土屋蕭海とか、それから、海防僧として名高い月性上人とか、時勢に目ざめた人々が幾らもゐた。さういふ人々

が兄と語つてゐるのを聞いたこともあるし、その人たちが直接に碎いて秀三郎に話して聞かせてくれることもあつた。

けれども、いままでの秀三郎には、そのやうな話は、よしんば話としては、どうなりかうなりわかつたとしても、いま現に自分がかうして立つてゐる、この大地の上の、生なまの問題としては、まだまだピンとは胸に響いて來てゐなかつた。

いまは少し違ふ。

いま、少年の頭の中には、同年輩の俊敏な友の顔がゑがき出されてゐる。

(いかん、いかん、ぼくはあいつに負けてゐる！)

追ひつかなくてはならんと思つた。

と同時に、彼はまた、その友が最後にいつた言葉を心の中でくりかへしてみた。

ぼくは君が好きだ。尊敬してゐる……。

(さうだ、さういへば、ぼくだつて、あいつが好きだつたんだ、ほんとうは！)

そこに氣がついたことも嬉しかつたが、その好きな友に認められ、尊敬されてゐるといふ事實は、少年の心を更に喜ばせ、勵ましてくれた。

晋作が去つた方とは反對の、わが家の方に向つて、秀三郎の足は、いま非常に早くなつた。

家に歸ると、すでに父の良迪も歸つて來てゐた。父に挨拶をし、兄のそばに行つて、さきの無禮をわびた。兄は笑つた。

「は、とんだイタヅラ小僧だのう、おぬしは！ が、まアよい、それより早く風呂にでも入りなさい。おと、さまは、さら湯はおきらひで、あとになさるさうぢやから」

「兄さまは？」

「ウン、わしもあとにしよう、ちよつと調べものがある」

秀三郎が答へないうちに、父もそこにやつて来て、笑ひながら言った。

「さうせい、さうせい、秀三郎。おぬし、この頃ぶしやうをやりをと見えて、頭がホコリだらけぢや。わしがゴシゴシ洗つてやるから、早くせい」

この時の秀三郎は、私はもう、そんな赤子ではありませぬ、と言ひたい氣持であつた。けれども、皺に刻まれた父の笑顔を見てゐると、やつぱり、素直に風呂場に行くほかはなかつた。すると、父はほんとにそこまでついて来て、ほんとにゴシゴシと頭を洗つてくれた。

「ほう、いくらか身が入つたやうぢやのう」

などと、上々のごさげんで、いと念入りに脊中も流してくれた。それから、手も足も……。

父と兄との愛情は限りなかつた。

秀三郎は、しんぢつ、それをありがたいと思つた。涙が出るほどありがたかつた。しかも、それでゐて、少年の胸の中には、八月四日以来、ぼつかりと大きな穴があいてゐた。満たす術もない大きな空虚であつた。それにまた、これまでの秀三郎はといへば、それを強ひて自分から満たさうなどは考へてもゐなかつたのだ。

しかし、これではならぬ、なんとかしなくては……と、いまは思ひはじめてゐた。

「のう、秀三郎」

ゴシゴシと脊をこすつてくれながら、父が言った。

「來年、——さうぢや、來年の秋、お母さまの喪でも明けたらこのう、いよいよお前の元服ぢやぞ。ええか、さうなると秀三郎も、もう立派に一人並の武士ぢや。

忘るなよ」

「……」

「その時、わしはの、秀三郎、お前に立派な大小をとらさうと思ふて、いまから心がけてゐるんぢや。武士の魂をな！」

「……」

「また、その時はぢや、のう、秀三郎、兄さまはお前に、お前が一生お手本としてよいやうな偉い方々のお話をして下さるはずぢや。——おお、それから、秀三郎、その時、わしはの、おぬしに切腹の仕方を教へてつかはずぞ、切腹の仕方をな！」

「……」

「兄さまの時にもさうしたんぢや。それから、わしの時にも、——わしの元服の時ぢやぞ、はッはッは、こりやもう遠い昔の話ぢやよ。しかし、その時にも、や

はりのう、わしのお父さまが、わしに教へて下されたのぢや。昔から武士の家では皆さうして來たんぢや、すくなくも、この長州武士の家ではのう」

「……」

「武士といふものは、時と場合で、われからわが腹を切らんけりやならん時がある。さういふ時に、立派に腹が切れんやうでは、まことの武士とはいはれぬぞ」

「……」

ぼつかりと自分の胸にあいてゐる空虚を、みづから何とかして満たさなくてはといふ欲求は、やうやく日を追うて切實なものとなつて來た。そして、その必死の努力が、おのづと少年にその道を教へてくれた。

學ぶことであつた。

練ることであつた。

鍛へることであつた。

學問を、武道を、精神を、身體を……。

彼はさうした、さう努力した。

日本の歴史に一つの大きな線をひくべき嘉永六年は去つて行つた。

嘉永七年——安政と改元されたのは、この年の十一月であつたから、まだ嘉永と呼ぼう——嘉永七年二月二十七日。

秀三郎には、さらにまた一つの不幸がおとづれて來た。

兄——玄機の病死がそれであつた。

しかし、この場合は、秀三郎の不幸もさることながら、老父の悲嘆こそ、目もあてられなかつた。

良迪は泣かなかつた。泣くにはあまりに大き過ぎる打撃であつた。彼は長男の新しい位牌をデツと見まもつたまゝ、ひねもすよもすがら、そこを動かかなかつた。

人々は、さうした餘りにも深刻な落膽が、やがてはこの老人の命をもちぢめる

であらうことを恐れて、よく秀三郎を良迪の側にひきつけておいては、苦言をこころみた。

「御老人！ お嘆きは道理ぢや、お察しする。したがのう、御老人、よくこのお子をごらんぜい、このお子をのう。秀三郎どのは、いま十五、これからさきこそ、男の子には杖も柱も必要でござらうぞ。のう、御老人、そのやうにお力を落されて、尊公に萬一があつたら、いつたい、このお子はどうなられる、このお子は！」

良迪は、もとよりそれを知つてゐた。

それゆゑにこそ、膝の上に握りこぶしを固め、ギリギリと齒を食ひしばつて、心の中に絶叫しつづけてゐた。

「お、よ、妻も死ぬ、忬も死ぬ、このおれは死なぬ、死なぬぞ。……死なぬぞ！ 死んでたまるかッ。おれは生きて生きて、生きぬいて、秀、秀、秀三郎を……」

心中の血みどろの苦闘は数日つづいた。

つひに勝てなかつた。

玄機の位牌の前で線香に火をつけようとしてゐた良迪は、とつぜん、ウームと呻いたかと思ふと、ばつたりと、そのまゝ前のめりに俯伏してしまつた。

秀三郎が驚いて側に駆けより、かかへおこすと、わなわなとふるふる枯木のやうな手で、むづと秀三郎の手首をつかみ、

「秀……」

と、たつたひとこと。あとは、びくッ、びくッ、と唇をひきつらせただけで、つひに言葉にはならなかつた。

みるみる老の兩眼に涙があふれた。が、たちまち、その目も糸のやうに細くなり、愛して止まなかつた末ッ子の手首をつかんだ手の力も萎えて、がくりと首を前に垂れなかと思ふと、息絶えてゐた。

兄の玄機を葬つて、わづかに數日、三月四日、父の良迪もまた世を去つて行つ

た。

秀三郎、十五歳、天涯の孤兒となる。

六月九日、秀三郎は、久坂良迪の嫡子として、家業相續を許され、家祿二十五石高を給せられることになつた。

玄瑞と名を法體に改めることを許されたのは、その月の晦日であつた。と同時に、少年の黒髪を落して法體となつた。醫家は剃髪するの掟に従つたのである。



第四章 青年への旅

わづか数日のあひだに父と兄とを失つて、文字どほりの天涯の孤兒となつた少年玄瑞の痛手は、もとより察するにあまりあるものがあつたらう。

けれども、この時の彼は、もう、母を失つた時のやうに、さうした傷心の姿を、あらはには表に見せなかつた。すくなくも見せまいと努めてゐるやうであつた。表にあらはすかはりに、内にひそめて、それを詩に變じ歌に化し、文武の道への精進に轉じ、さうすることによつて自分自身を育てようとする必死の努力がはじめられたのであつた。

「おれは武士の子だ、久坂家の唯ひとりの人間だ！」

さうした自覺が、ともすればよろめかうとする少年の心の、いまでは唯一の鞭むちとなり、杖となつた。

彼は努めた、文武の道に少年の日の精根をかたむけつくした。亡兄の友である中村道太郎が、そのやうな少年のために、よい指導者となつてくれた。

また、おなじく亡兄の盟友で、海防僧として聞えた傑僧、月性も、たえず熱烈な指導と鞭撻を惜しまなかつた。

かうしてもともと恵まれてゐた少年のよい素質は、やうやく生々と芽を吹き、美しく花を咲かせはじめた。——彼が藩費明倫館において、秀才の名をほしいままにしたのも、この頃である。

何の苦勞もない暖い巢の中から、いきなり嵐の中にはふり出された小鳥のやうな、この少年は、かうしてほかの少年の五年分にも六年分にも、あるひは十年分にも相當するやうな、中味のある二ヶ年を過して、やがて十七歳となつた。

そのあひだに、めつきりと脊丈が伸び、肉がつき、かはいく美しいと言はれて

ゐた聲が、のぶとい暖れた聲に變り、それが更に變つて、やがて友人たちに「鐘のやうな」と形容される、音量のある、よい聲となつた。……すべてが少年から青年への變貌であり、生長であつて、不思議はなかつたが、ただ、玄瑞の場合には、それが非常に急速度になされたのであつた。いはゆる早熟の少年であつた。

この頃から彼はまた、なんとも自分にも得體のつかめぬ奇妙な憂鬱と空虚感におそはれて、ひとり苦しみはじめた。

たぶん、それが生長の一つの段階を終つて、つぎの段階への緒をつかまうとする暗中摸索の焦燥であり、空虚感であつたらうといふことを、この早熟な少年も、さすがにまだ自分では気がつかないであつた。それゆえにこそ、苦しみは一段と大きかつた。

さいはひ、彼のよい指導者がそれに気がついてくれた。

「ねえ、秀さん」

中村道太郎は、亡友の幼い弟を、どうかすると、うつかりして、かう幼時の名で呼ぶことがあつた。

「ねえ、秀さん、君、しばらくどこかを遊歴でもしてみないか」

「ユーレキ？ 旅行ですか」

「さうだよ。さういふ氣はないかね？」

「いゝえ。旅行なんて、まるで今まで考へたこともないですが、——妙だな、あなたにさう言はれると、なんだか急に出かけてみたくなつた」

「ぢや、ひとつ考へてみるんだな、君がその氣なら藩廳の方は僕から何とか交渉してみ上げていゝから」

たよりにする先輩にさう言はれてみると、たちまち、その氣になつて、玄瑞は、その日から旅のことばかり考へはじめた。

萩に生れ、萩に育ち、萩の外には一歩も出たことのない少年にとつて、知らぬ

他國へ足を踏み出すことは、もはやおさへやうのない強い魅力となり、あこがれとなつた。

玄瑞の遊志は雲のやうに動いた。

さいはひ、ことは順調に運んで、ほどなく九州遊歴の許可があり、いよいよ萩を立つたのは、玄瑞十七歳の春——安政三年三月五日であつた。

はじめ同役の醫——半井成質と同行の約束であつたが、半井が故あつて中止したので、ひとりで出發した。萩、秋吉臺、河原、小月、清末……と行をつづけて、赤間關（下關）から海をわたり小倉についた。いよいよ九州への第一歩であつた。

九州では、まづ豊前の稗田に詩人——村上佛山の門を叩き、おなじく豊前の横武村に、儒者——恒遠醒窓を訪ふた。

知名の先人たちの門を叩くのと同時に、その地その地の名勝舊跡をさぐることに

も忘れず、たとへば、中津では、そこから足を伸ばして耶馬溪に避んだ。

時は春、旅情は十七歳の旅人の詩囊をゆすぶつて、おのづと幾つかの名篇を生きました。

が、この九州の旅において、最も大きな收穫は、肥後の熊本に知名の志士、宮部鼎藏を訪ふて、終生の知己を得たことと、長崎に異國の香を吸つたことであつた。

宮部鼎藏は、年の頃三十七八、あから顔の、ぶつてりと肥つた男で、さすがに尊攘派の錚々たる人物だけの賞祿を十分に見せてゐた。

けれども、自分より二十も年の若い玄瑞に對しても、べつに尊大ぶるやうなところは、みじんもなかつた。

玄瑞が一通り初對面の挨拶をすまして、

「實は内心ひそかに心配しながらまゐりました、宮部さんは、この節、一さい人との交はりを絶つてゐられるといふやうな、お噂を耳にしたものですから」と、正直に言ふと、

「いや、それは噂だけではなく、この一兩年來、實はさういふことにしてゐるのです。本來ならば、あなたにもおことはりしたいところだつたのですが、長州の御仁だと伺つたものだから、つい……」

さう言ひかけて、宮部は、すらりと話をそらした。

「萩の御城下と言はれましたな、ぢや、むろん、吉田はござんじでござらうな、吉田松陰は？」

「はあ、お名前は……」

「名前だけですか」

「はあ、實はまだ……」

「それはまた迂闊な……。は、は、。燈臺もと暗しといふわけですか、つまり。さうでせう、久坂君、はるばる何も九州くんだりまで來られて、この宮部ごときを訪ねられなくとも、お膝もとに吉田松陰のやうな人物がゐるぢやござらぬか」

「すると、あなたはやはり、吉田氏を當今第一流の人物をもつて推されるわけですかね？」

「當今第一流どころか、僕をして言はしむれば、かれ松陰吉田義卿のごときは、まさに百年にして初めて見るの傑物です。僕、かつて彼のことを有志者間に吹聴してよく言つたものです。曰く、彼は人中の虎なり、わが黨の寶石なり……」

宮部の顔にも、聲にも、やうやく熱意がみなぎつて來た。玄瑞も思はず緊張して、心のうちで「人中の虎、わが黨の寶石……」とくりかへしてみながら、つぎの言葉を待つた。

が 宮部はそれなり口をつぐみ、端然と両手を膝について、しづかに兩眼を閉ぢた。そして、そのまゝの姿勢で、やがて彼は靜かに語りだした。

「義卿が——吉田義卿が、はじめて拙者を訪ねてくれたのは、——さやう、いまから六年前の、忘れもせぬ嘉永三年十二月のことでございます。その時、拙者が三十一、ちやうど十歳ちがひの松陰は、まだ二十一でござつた」

山鹿流兵學の師範たる叔父、吉田大助の跡をついで、幼より兵學師範家たるべく運命づけられた吉田松陰は、その家學の研鑽を更に深めるために、肥前平戸、松浦藩の山鹿萬介や葉山左内の門を叩くことを、主要な目的に、この年、藩許を得て、はじめて九州遊學の途に上つた。

萩を發足したのが八月二十五日、小倉、佐賀、大村、長崎を経て、目的地の平戸に着き、滞在五十餘日、十一月六日には平戸を立つて、再び長崎に向つたが、この時に松陰は、洋兵學者高島秋帆の門下——松部啓太を訪ひ、池部の口から初

めて宮部鼎藏のことを知った。

多少とも、ついて學ぶに足る人あり、と知れば、百里の道も遠しとせぬ松陰は、長崎から、更に、天草、島原、熊本……と足を伸ばして、ついに宮部の家をおとづれたのであつた。

「そこで、その時の僕だが……」と宮部はつづけた。「……どうも自分のことを口にするのは、いまの僕には甚だ好ましくないが、實をいふと僕の生家は、久坂君とおなじやうに醫家でごつた。だから本来ならば僕も今頃は醫者になつてゐなけりやならんかつたかも知れんのおやが」

文政二年、肥後上益城郡田代村に、世々醫を業とする家に生れた宮部鼎藏は、幼少より大志あり、學問を好み、家業をつぐことを欲しなかつた。で、伯父の宮部増美について、山鹿流の兵學を修め、のちには、その養子となつた。

三十歳の時、熊本藩に召出されたが、しばしの暇を乞うて諸國を遊歴し、やが

て藩に仕へた。——松陰がおとづれて來たのは、この時代であつた。

「だから僕と松陰とのつきあひは、まづ、おなじ山鹿の流れを汲む兵法學者として相知つたわけだが、しかも、一旦さうして相知つた後の僕等は、あらゆる點で友となり、同志となつたわけです」

「——で、その時、吉田氏は、どのくらゐ御滞在でしたらう、この熊本には？」

「なあに、その折は、ホンの數日に過ぎんかつた。しかし、その後、われわれは思ひがけない好機會に恵まれてな、——といふのが、松陰の訪問をうけて幾ばくもせず、僕は當藩の老臣有吉頼母に隨行してな、江戸に上つたのです」

「あゝ、江戸で……？」

「さうよ、江戸でな、われわれはまた再會が出来たんぢや。嘉永四年の春だつたが、ちやうどその頃、松陰も藩命で、軍學研究のために江戸に出てをつたんでのう」

江戸に出た吉田松陰は、安積良齋、古賀茶溪、山鹿素水、佐久間象山、その他について學び、また、宮部鼎藏をはじめ烏山確齋、長原武、齋藤新太郎等と交はつて、いよいよ文武の業に勵んだ。

「ずいぶん廣く學ばれたのですね、吉田さんは？」

「いや、よく頑張つたね、松陰は！ 僕も相當に頑張つたつもりだが、とても松陰の眞剣な切磋琢磨ぶりに敵はなかつた。まさに僕のいふ、かれは人中の虎、わが黨の寶石だつたんぢや。實際、かれは常にわれわれの中心だつたからな」

宮部は、さう言つて、しづかに部屋の中を見まはした。暗くなりかけてゐることに氣がついたからである。

春の日もやうやく傾きかけたと見えて、さつきまで縁側の白い障子に、なごやかに寫つてゐた庭の木立の陰影も、いつのまにか消えて、その木立の梢で鳴いてゐた小鳴の聲も、もう聞えなくなつてゐた。

と、その時、部屋の襖の外に、しのびやかな足音が近づき、宮部夫人が、酒肴の支度をととのへて入つて來た。

「お、これは思はぬ長座をいたしまして……」

玄瑞は俄かにゐずまゐを直した。

「まあまあ、おいそぎの旅でもござるまい、寛がれい。ありあはせの田舎料理、ご遠慮にも及ばぬ。——まづ、行かう。さあ」

宮部は、夫人の手から銚子をとり、自分で玄瑞に酌をした。

部屋には灯がともされた。

盃が重ねられるにつれて、宮部鼎藏の重々しい口も、やうやく軽くなつて行つた。



彼の話は決して巧くはなかつた。むしろ、吃々としてゐた。それでゐて熱があり、力があり、誠實味があつた。吃々たる雄辯といはうか、なにかしら若い玄瑞の胸を打つものがあつた。

話題は、やはり憂ふべき天下の情勢論からはじまつて、尊皇論、外交問題、アメリカのこと、ロシアのこと、イギリスのこと、印度のこと、アヘン戦争のこと……と盡きるところがなかつた。が、けつきよく、宮部の話は吉田松陰のことに落ちて行き、彼は嘉永四年の夏に松陰と相州から房州へ海岸の踏査に出かけた時の話をした。

それで玄瑞が何の氣なしに、

「あゝ、すると、やはりその年ですか、吉田さんが宮部さんと東北を巡歴するために藩邸を亡命されたといふのは？」

と、聞くと、いまままで熱心に殆んど一人で話しつづけてゐた宮部が、急に口を

つぐみ、返事のかはりに大きく背いて、腕組みをしたかと思ふと、再びまた、しづかに兩眼を閉ぢた。

しかし、兩眼を閉ぢたまま、暖れたやうな聲で、彼はまた話をつづけた。

「……つまり、正直者の松陰は、僕との約を守つて、出発の日どりを違へないために、藩の過所(旅行の時の身分証明書)の下るのも待たないで、僕とともに江戸を立つたわけだな」

「なるほど」

「あとでそれを知つて、僕も心ないことをさせたものだ、ひそかに悔ひもしたが、その時は知るはずもなく、ともどもに勇躍して江戸を立ち、北邊の守りを案じながら東北の旅をつづけたわけだつた。暮の十四日に出て、あくる嘉永五年の四月に江戸に戻つたのだから、ほとんど半歳に近い旅だな。いま思ひかへしてみても實に意義の深い、楽しい旅だつたよ。しかし……」

江戸に歸つた松陰には、亡命の罪が待つてゐた。彼は歸國を命ぜられ、萩に歸つた。土籍をけづり、世祿を奪はれ、父一杉百合之助の「育み」となつた。父の家にお預けの身となつたのである。尤も、松陰の亡命を惜しむ藩主は、特に彼に今後十年間の自費による諸國遊學を許したが……。

一方、松陰と別れて熊本に歸つた宮部は、その後いよいよ兵學を修め、皇朝の古典を講究し、もつぱら思想を練つてゐたが、さうするうちに嘉永六年となつた。

この年六月四日、米國使節ベリ、軍艦をひきゐて浦賀にあらはる！

外警やうやく多事。鼎殿、憂憤やるかたなく、書籍を投じて立ちあがる。藩主細川齋護に請うて、再び江上に上る。……

「しかも、こんどは初めから松陰と同行なんだ。——なあ、久坂君、ここで僕等は三度び手をたづさへて、いよいよ皇國のために奔走することになつたのぢや。その頃には同志の數も殖えてゐた、みな諸藩の有志等だ。ことごとく熱烈な尊皇

攘夷論者だ！　そして、その中心は、やはり吉田松陰ぢやつた。——ところが、なあ、久坂君！」

宮部は、つと腕ぐみをとぎ、かつと目を見ひらいて、まつすぐに玄瑞の方を見た。

「その吉田がだ、その誰よりも熱烈だつた攘夷論者の吉田松陰がだ、一足飛びにわれらを飛び越して、米艦に投じようといふのだ、米艦に投じて海外に渡航しようといふのだ！　僕は反對した、彼を最もよく知る僕が最も強く反對した」

「しかし、けつきよく、あなたも……」

「ウム、けつきよく、吾輩も賛成した。泣いて彼を送つた。吉田といふ人間を知つてゐるからだ」

そこで宮部鼎藏の「吉田松陰論」がはじまつた。

その時、宮部夫人が新しいお銘子をもつて來た。そして、

「あなた、大助さんがおいでなはりました」

と、うつかりと出た熊本辯で、そつと宮部に知らせた。

「お、來よつたか、ここへ通せ。い、機會ぢや、久坂君にもお見知すおき願はう」  
まもなく一人の青年があらはれた。大助であつた。

大助は、のちの宮部春藏で、鼎藏の弟であつた。しかし、鼎藏とは十九も年が  
違つてゐて、この時まだ十八歳、玄瑞よりは一歳の年長……。若い二人は、たち  
まち、意氣投合した。

玄瑞は、この夜、宮部兄弟と夜更けまで飲み、且つ語つた。  
滞在數日、熊本を去つた。

熊本から、川尻、宇土を過ぎ、松橋から天草灘をわたつて、陽春三月末、玄瑞

は長崎についた。

異國の香り漂ふ街、長崎！　そこで若い玄瑞は何を見、なにを考へたか。……

路は長崎に到つて意氣豪なり

青山斷ずるところ、これ鯨濤

慨然、眼を放つて孤劍を枕とす

海に横はるの蟹船百尺高し

玄瑞は、當時の長崎街道の順路、すなはち、長崎、彼杵、俵坂、嬉野、佐賀……  
といふ普通の順路によらず、武雄から北行して唐津に出た。

わが國の外蕃に接した地は、古代においては唐津であり、つぎに博多に移り、  
更に平戸に移つたが、この當時は長崎であつた。玄瑞は今その長崎を見、つぎに

唐津に志したわけである。

唐津から四里のところ、豊臣秀吉が征韓の本營をおいた名護屋がある。玄瑞はそこへも足を伸ばした。

海は玄洋に接して狂浪驚く

松林雨を帯びて綠烟横はる

偶々漁父に逢うて行々相語る

指點す豊公築城するところを

玄海灘に沿うて歸路につく。姪濱、鳥飼、福岡、博多、千代の松原……。行くところ、ひとつとして蒙古襲來の跡ならぬはなく、箱崎八幡宮に詣でては、龜山上皇の「敵國降伏」の御額みづかみに感泣し、相模太郎の勇斷を忍んだ。

三月にわたる九州の旅はをはった。

この旅によつて玄瑞は實に多くのものを得たが、ひとくちに言へば、それは正に少年から青年への生長の旅であつた。

萩に歸つて、まつさきに考へたことは、吉田松陰のことであつた。

松陰について學べといふ忠告は、宮部鼎藏が最初ではなく、すでに中村道太郎からも、僧の月性からも、土屋蕭海からも、すすめられてゐた。けれども、いよいよその氣になつたのは、この時からであつた。

玄瑞は熱情をこめた書面を松陰に送つた。すぐに返事が來た。また書面を送つた。また返事が來た。かうして二人の書面の往復は、三度くりかへされた。

「ようし、明日こそ松陰をおとづれよう」

彼がさう決心したのは、この年——安政三年の八月の半なかばであつた。

第五章 最初の對面

「頼まう！」

門口に人のおとなふ聲がした。若々しい男の聲であつた。

文子は、たしかにその聲を耳にした。

けれども、文子は、いま、それどころではない。文子の目は、鏡にうつる自分の後姿にそそがれてゐる。文子の關心は、いま、その帯のぐあひにのみ集まつてゐるのである。

その帯は、母か文子のためにお赤飯を祝つてくれた日の夕べ、二人の姉、一人の嫂、それから幾人かの叔母たち、さうした親戚の女の人たちが、心をこめて贈つてくれた夏の帯であつた。それを贈られたのは去年の夏のはじめであつたが、實際に使ふのは實は今日がはじめてであつた。

今日は、八月十五日、藩主毛利家の氏神、宮崎八幡宮の祭禮の日。文子も父や母や弟と一しよに、これから出かけるのである。

さういふ話がかきまつた今朝がた、母に、

「よい折だから、お詣りの時に、あの帯を締めて行きなせう」

と言はれた時、文子は何かしら胸がどきッとした。

むろん、うれしかつたからである。そして今日は朝から夕方になるのが待ちどほしいほどであつた。ところが、その夕方となり、いつもよりは早い目に夕飯もお風呂もすまして、嫂（梅太郎の妻）の龜子に手つだつてもらひながら、かうして外出の身支度を一通りととのへた今となつてみると、急にわけもなく胸が切なくなつて來た。むろん、きツちりと締めつけられた帯の苦しさのためばかりではなかつた。

かうした大人ッぽい晴がましい姿で、これから人中（ひとなか）に出てゆくのだと思ふと、

一方では何か心のはづむものがありながら、他の一方では、なんとも面はゆく、まぶしい思ひで、いつそ、億劫（億劫）な氣持にさへなつてくるのである。

「たのまう。……たのまう！……おゆるしなされませ」

門口の聲はつづいた。聲も次第に高くなつた。

「おや、誰も氣がつかないのか知ら」

文子も、やうやく氣になつて來た。

母は父の居間で、父や弟の着更へを手つだひながら、自分も支度をしてゐるにちがひない。いましてがたまでここにゐて、帯を結ぶ手つだひをしてゐてくれた嫂は、娘の豊子が文子たちの後を慕つて泣いたりしないやうにと、戶外（かき）へつれ出して遊ばしたりしてゐるのかも知れない。

が、それにしても、女中は？ 下僕は……？

「たのまう。たのまう！……お留守でござりまするかッ、杉さま！」

もはや聞き流しは出来なかつた。

とりつきに出るものが、ほかにゐないとすれば、いまは文子が自分で出るほかはなかつた。

文子が出た。

訪問者は、その聲でも想像されたとほり、みるからに若々しい十七八の青年であつた。白緋の單衣に小倉の袴をつけ、蠟鞘の大小を前半にたばさんだ、みづみづしい姿であつたが、頭は青々とした坊主あたまであつた。

その青年は、とりつぎの者が、外出の身なりをととのへた、美しい若い娘であつたことを、ちよつと意外に感じたやうであつたが、それでも、すぐに、

「杉さまの嬢さまでゐられますか」

と、まつすぐに文子の顔を見つめたままたづねた。

「はい」と肯いたまま、文子は思はず相手の視線から目をそらしたが、相手はか

まはずさきをつづけた。

「拙者は久坂玄瑞と申すものですが、實は吉田先生に……松陰先生に、お目通りが願ひたくて、不躰けながら、かうして罷り出ました。拙者のことは、かねて中谷正亮氏からも、おそらく先生にお話があつてゐることと思ひますが、——どうかよろしく、おとりつぎを願ひます」

ひどく改まつた言葉づかひながら、いかにもキビキビとして、爽かな聲であつた。

文子は、いささか壓されぎみで、

「はい、あの、せつかくではございますが、兄は、あの、たゞ今……」  
氣の毒さうに、ことはりを述べようとしかけると、

「いや、御謹慎中のことはよく承知してをります。だが……」  
青年……久坂玄瑞は、いちはやく文子の言葉をおさへた。



「だが、そこをひとつ、どうか曲げてお願いいたします。——實は私から差上げました最初の書面の御返書にも、はつきりと、幽囚中の身ゆえ面會はならぬ、とございました。だから私もこれまで強ひてお邪魔をせず、くりかへし書面を差上げ、先生からもまた再三お返しの書面を忝ういたしたのですが、——しかし、實を申しますと、私はもう書面の往復だけでは、がまんが出来なくなりました。この上は直接お目にかかつて、——いや決して長くはお邪魔いたしません、ホンのしばらく、嬢さま！ どうか……」

文子は、相手の熱心な態度に壓された。そして考へた。

米艦に投じて海外に渡航しようとした吉田松陰は、志の成らざるにおよんで、みづから縛につき、江戸傳馬町の獄に送られた。

在獄、半歳。幕府は、その罪を斷じて、松陰、並びに、その従僕にして同志たる金子重輔を、自落に幽閉することを命じた。

二人は、江戸から萩へ、幾百里の道を、罪人として檻輿で送られた。

萩につくと、藩府は、松陰を野山の獄に投じ、金子を岩倉獄に投じた。

金子はつひに獄中に病死したが、松陰は獄にゐること一年餘。藩府は、昨年（安政二年）の暮、松陰を實父—杉百合之助の家に預けた。

暮の十五日、松陰は野山の獄から父の家に歸つて來た。そして、いま、かうして文子と玄瑞が對面してゐる玄關からは、最も遠い南のすみの狭苦しい三疊の一室を幽室として、いまもいま、そこで謹慎の生活をつづけてゐるのである。

——この頃の杉家は、もう團子岩の山屋敷ではない。

嘉永元年、文子が六歳の時、杉一家は、七人の子を生み一人の子を亡くした思ひ出の深い團子岩を下りて、おなじく松本村ではあるが、いままでよりは幾らか

城下に近い清水口に移った。清水口にある親族の高淵家に、しばらく同居したのである。それから、更に嘉永六年の春、そこから程遠からぬ新道に一戸を求めて、そこに移った。勤儉力行の人、杉百合之助が、よく父祖以来の借財をかたづけ、いくからの貯へもなして、その家を買ひとつたのである。買ひとつてから更に手を入れ、いくらか建てましましたので、かなり広い家である。

(この家は今も保存されてゐるので、作者は、家のまはりぐるぐるとまはつて數へてみたのであるが、それによると、八疊の間が四つ。六疊の間一つ。四疊半——これが松陰の幽室であるが、のちに述べるやうな事情で實際は僅かに三疊——が一つ。玄關の三疊のほかにも、三疊か四疊半ぐらゐの小部屋が一つ、もしくはは二つ。——なにしろ、内に上つて調べてみなければ、正確は期しがたいが、これより廣くはあつても狭くはないと思ふ。それから、このほかに物置や納屋もあつた。)

さて、松陰は、さうして謹慎の日を送つてゐるが、そこで絶対に人に逢はないわけでもなかつた。松陰自身は逢ふまいと思つてゐても、親戚の若者たちは、——いや、若い者だけではなかつた、現に叔父や年上の従兄たちまでが、松陰に教を受けようとして、幽室をおとづれてくる。それに、この頃では近隣の子供等までが来るやうになつた。學問を愛し道を求めてやまない松陰としては、さうしておとづれて来る人々を、無下にすることは出来なかつた。

けれども、それはあくまで親戚か近隣の人々で、それもみな、人目につかぬやうにと、ひそかに忍ぶやうにして、裏の方から幽室をおとづれるのである。

この人のやうに——この久坂玄瑞といふ人のやうに、はじめての人で、日もまだ暮れてしまつてゐないのに、おほッびらに玄關から名乗りを上げてくる人はなかつた。

文子は、相手の眞剣な態度に打たれ、逢はして上げたいとは思ひながら、どう

したものと、まだ迷つてゐた。

「嬢さま！」

玄瑞は、しかし、かまはずつづけた。

「どうかお願いします、先生におとりつき下さい。今日は侍ひ宮崎八幡宮の御祭禮、その方の賑はひに人目も奪はれてをります。それにまた、御迷惑になるやうに長くはお邪魔いたしませぬ」

「はい、それでは……」

文子は、とうとう答へてしまつた。

「それでは、しばらくそれにて……」

いくつかの部屋を通つて、文子は、松陰の幽囚室の前に行つた。入口の障子の前に坐ると、しづかに、

「兄さま！」

と聲をかけて、返事を待つた。返事はなかつた。

「兄さま！」

すこし聲を高めてみた。やはり返事は聞かれなかつた。

ひねもす、読み、書き、考へ、疲るれば、端然と坐したままでも、しばらくまどろみをとつて疲れを休める松陰のくせを知つてゐる文子は、あるひは今も……と思ひながら、

「兄さま。……大兄さま！」

と、つい、幼い時の呼び名で呼んで、しづかに障子を開けた。

松陰は決して眠つてはゐなかつた。

窓ぎはの小机によつて、なにか一心に書き物をしてゐた。いくらか右の肩を怒

らせて、左の手で軽くタテヨコの青野紙をおさへてゐたが、右手の筆は、その野紙の上を、非常な速さですべりつつづけてゐた。

文子は、さうした兄の横向の姿を、しばらく黙つて見まもつてゐた。と、そのうち松陰は、ふと書く手を休めた。

筆を持ったまま、机に肘をつき、その手の甲の上に尖つた鬚を戴せた。そして、ものうげに見える細長い糸のやうな眼を、ちつと窓の外に向けた。

窓の外のサルスベリの花は、ほのかな薄暗の中にも、ひときは赤く見えた。

松陰の目は、しかし、その花の色を見てゐるやうでもなかつた。

なにかを考へてゐるのである。想を練る、といふのであらう。

文子は、この兄のさうした姿を、もう幾度となく見て來た。妨げてはならぬと思つて、ちつと窓の外を見つめてゐる松陰の横顔を、文子はまた、ちつと見まもりつつづけた。

それから、しづかに目を轉じて、狭苦しい幽閉室の中を、それとなく見まはしてみた。

この幽閉室といふのは、普通の家の場合では、佛間にあたる部屋で、元來は四疊半であつたが、西側の一疊半を三分して、南を吉田家の祖先の神位安置所とし、中位に杉家の先祖のうち神道によつて祭らるべき人々の神位を安置し、北位に杉家の佛壇がおかれてあつた。したがつて、松陰が五尺の軀をおけるところは、わづかに三枚の疊の上だけだつたのである。

——ついでに記さう。

ここに吉田家の先祖の神位が安置されてあるわけは、松陰が吉田家の當主であり、その吉田家は山鹿流軍學の家筋で、學祖の山鹿素行が神道を重んじてゐたところから、その流れを汲むものは、多く神道に屬してゐたことによるのである。

また、實家の杉家は、信仰の自由が行はれた家で、一家の中に神道のものもあ

れば、佛教に歸依するものもある、といふやうなぐあひであつた。しかも、その區々に見える信仰も、根づよい皇室中心精神によつて統一されてゐたので、一家のあひだに矛盾も衝突もなく、常に和合が保たれてきたのであつた。

さて、本筋に歸らう。

文子は、兄がいつまでもこちらを向いてくれないので、仕方なく、もう一度こちらから聲をかけようとした。

と、その時、なにかまたよい考が泛んだのであらう。松陰は急に机に向ひ、右手を走らせはじめた。見てゐるこちらが氣ぜはしくなるなほど、せつかちな速さで、二行か三行、一氣に書きつづけたかと思ふと、はじめて文子の方に顔を向けた。

「おゝ、お文か…」

ぼそぼそとした聲であつた。しまひの「か」は殆んど聞きとれなかつた。しか

し、口だけは語尾の形のまを聞いて、ほう！ といふやうな目で、よそゆき姿の文子を見つめた。

「綺麗だのう」

「まあ……」

文子は思はず頬をあからめながらも、兄を睨むやうにして笑つた。珍らしや、この兄が私をからかつてゐる、と思つたからである。しかし、松陰は笑ひもせず、なほヂツと見つめてゐるので、文子も、つい眞顔になつて、

「これからお詣りにまゐりますの」

と、いひわけめいた説明をした。

「おゝさうさう、今日は……。さうだつたのう、さつきお母さまもさうお話しなされてゐた。ちや、よくお詣りしてくるがよい、この兄の分もな」

さう言つて松陰は、はじめて目もとに微笑を泛べた。笑ふと、背の少しつりあ

がつた細長い目が、一さう糸のやうに細くなつたが、さうした微笑は、この兄を半分は恐れ半分に慕はしく思つてゐる末の妹に、しんから親しみをおぼえさせるものであつた。で、文子も笑つて背いてから、

「あの、兄さま」

と、はじめて用件を述べた。

「なにッ、久坂君が……？」 久坂君が見えられたといふのか」

松陰の目の色も、聲の調子も、あきらかにその人の來訪に心を動かされてゐるやうであつた。そのくせ、逢ふとも逢はないとも答へないで、

「さうか、久坂君が……」

と、もう一度おなじことをくりかへした。

「あのウ、お玄關にお待たせしてゐるんですけれど……？」

「あゝさう」

「何ですか、これまでも幾度かお手紙を兄さまに……」

「うむ、もらつた」

「どうお答へしたら……？」

「うむ。……お通ししてくれ、これへ」

「はッ」

と、そと文子は兄の幽室を出た。

玄關には、いつのまにか母の瀧子が出て、玄瑞を相手に、初對面同志の人とは思へない打ちとけた様子で、談笑を交してゐた。文子の足音に氣がつくと、二人は同時に、返答は如何にといふやうに、文子の顔を見あげたが、

「兄さまは何とおつしやつてでしたか」

と母の方がさきに問ふた。

お逢ひする由を答へると、母もともどもに喜んで、

「さあさ、それではどうぞ」

愛想よく玄瑞を招じ入れ、文子に案内を命じた。

玄瑞を兄の幽四室に案内して、文子が茶の間の八疊へ来てみると、そこでは母が早くも茶の支度をしてゐた。女中も嫂も家の中に姿が見えない以上、自分がそれをしなければなるまいと思つて来たことなので、

「お母さま、おしげはどうしたんですの？」

と、女中のことをたづねた。

「ああ、あれは一寸お使ひに出しました。ほら、お文さん」

瀧子はお茶の盆を文子の手になたした。

文子は、それをかかへて三度び兄の幽室の前に立つた。

内からは玄瑞の聲だけが聞えた。すつと脊筋が涼しくなるやうな、涼しい綺麗な聲であつた。そのくせ、その調子は、ひどく熱烈で、まるで激しい議論でもし

てゐるかのやうであつた。いや、實際に、文子は玄瑞が何か兄と激論をしてゐるのだと思つた。だから、しばらくのあひだ、どうしたものかと迷つて、お茶を捧げたまま、障子の外に立ちすくんでゐた。

玄瑞の話は、なかなか盡きなかつた。アメリカとかハリスだとかいふ言葉が、つきつきに出た。

文子は困つて、お茶は母に出してもらはうかと思つた。しかし、さうすると、それだから末ッ子は……などと言はれさうで、それもイヤだつた。末ッ子は敏三郎であるはずだつたが、のちに述べるやうな事情から、文子は杉一族のあひだで、いはゆる「末ッ子の甘えんぼう」として可愛がられて育つて来たのであつた。それは自分でも認めてゐるので、ふだんは何とからかはれても平氣だつたが、今日の氣持は少し違つてゐた。といふのも、おそらく大人の衣裳を身につけてゐるからであらう。と自分勝手に解釋し、自分で苦笑しながら、とうとう思ひきつ

て、

「兄さま！」

と障子の外から聲をかけてみた。

兄の答は聞かれなかつたが、同時に、玄瑞の聲もビタリと止んだ。

文子は、お茶を傍らにおいて、しづかに障子を開けた。

松陰は机の横に、入口の方を向いて端然と坐し、両手を軽く膝の上において、黙々と玄瑞の話に耳を傾けてゐた。

玄瑞は、これは入口の方に脊中を向けて、これも膝の上に両手をつき、まつすぐに松陰の顔を見つめてゐた。

文子は、しとやかに一禮して、お茶をすすめた。

「おそれ入ります」

玄瑞も、いんぎんに會釋を返した。

「では、どうぞ、ごゆるりとあそばして……」

玄瑞にはさう挨拶をして、立つ前に、文子はチラと兄の顔を見た。松陰は何とも答へなかつた。松陰の顔いろから、いま、その氣持を讀みとることは、ちよつと、むづかしさうであつた。文子は、もう一度、二人のどちらにともなく會釋をして、その部屋を去つた。

父と母と文子と敏三郎は、やがて、つれ立つて家を出た。

もう夜であつた。月が出てゐた。街は祭禮の宵らしく浮き立つてゐた。



第六章  
こほろぎ

…久坂玄瑞の妻…

使ひに出てゐた女中が歸つて來て、もう殆んど眞暗になつてゐる幽囚室に、行燈に灯を入れて來た。

狭い部屋の中は一時に明るくなつた。

松陰と玄瑞は、あひかはらず端然と向ひあつたまま、話をつづけてゐた。

話手は多く若い玄瑞であつた。けれども、その話ぶりは、もう、はじめの頃のやうに、激烈ではなかつた。しづかに相手の顔を見まもりながら、おだやかな口調で玄瑞はたづねた。

「では先生もやつぱり長崎で、むろん、彼等の様子をごらんになりましたでせう？」

「見ました」

「その時の御感想は？」

「……………」

「僕は長崎の市中の繁華なものにも驚きましたが、それよりも、店といふ店に紅毛の品が商つてあり、到るところに紅毛人や支那人が往來してゐるのを見て、いつたい、おれは今どこにゐるのだ……といふやうな疑ひをさへ起しました」

「……………」

「長崎の人々は、彼等とさうして雜居してゐても、なんら怪まなればかりか、オランダ人をオランダさんと呼び、支那人をアチャさんなどと呼んで、馴れ親しんでをります」

「……………」

「をんな子供までが疊語を語り、奴等もまた片言ぐらゐには日本語など使つて、まるで自分の國にゐるかのやうに大きな顔をして、のさばつてをります。僕の長

友の口羽把山は、それをしも、皇徳四海萬邦におよぶの證しるしとするのですが、僕はさう見ませぬ。僕は……………」

「いや、それは僕もあなたに御同感です。あなたのその九州旅行のお話で思ひ出しましたが、僕も九州遊歴で平戸に滞在中、かの地の葉山左内どのから、いろいろの御本を拜借して讀みましたが、その中には、支那のアヘン戦争に關するものや、印度に關するものが、幾冊もありました。いづれも、イギリスが如何に恐るべき奸手段によつて、印度を侵し支那を屈したかを語つてゐるものでした。僕はまことに慄然としました」

「さうです、そうです、先生！ だから僕は申すのですが、日本、いまにして立たずば、昨日の支那の運命が明日は……………」

「お待ちなさい、久坂君、そのところは、あなたにせよ、僕にせよ、意見は同じなのです。その精神に關するかぎり、あなたから僕が聞くところもなければ、

また僕からあなたに加へるところもないのです。しかしのう、久坂君、問題は……」  
はじめて松陰は自分の方から進んで口をひらいた。アベタをきざんだ彼の蒼白い顔も、やうやく緒らみ、細長い糸のやうな目も、いまは炯々と光を放つて来た。

話はつづいた。

紅毛人の行きかふ長崎において、急に蠻奴警戒すべしとの感を深くした玄瑞が、それから唐津に出て、そこに遠い時代の外國との接衝の地の状況をさぐつたり、北九州の海岸に蒙古襲來の跡を忍んだりして、やがて萩に歸つたことは、

もうすでに述べた。

若い玄瑞の關心は、それ以來、やうやく外國に對する問題に傾いて行つた。

さうした折も折、米國使節ハリスが下田に上陸して、その飛報が、いくらかのヲやヒレまでつけて、たちまち、天下に飛び散つたのである。

幕府は、最初、ハリスの上陸も、旅館を定めることも、ことはつたのであるが、ハリスは、

「余は先年の米國使節ペリー提督と幕府との條約にもとづき、米國の代表者として日本をおとづれたのである。當然、米國の代表者として待遇され、保護されるべきものである。もし余に指一本でも觸れてみるがよい、それはとりもなほさず、米國大統領に指を觸るるものであるからして、——覺悟せられよ、時と場合によつては、日米ここに戦端をひらくことにもなるであらうぞ」と、おどしつけた。

ちやうどその頃、大阪・堺・兵庫などに、ものすごい大雨が降り、三百數ヶ所に雷が落ちた。つづいて、江戸をはじめ、その近國一體に、大暴風雨がおこり、洪水が出て死傷者も十萬餘におよぶといふ慘害があつた。

人々は、この天災地變を直ちに米國の使節と結びつけて考へた。

「見よ、神國を夷狄にけがさせた天罰、かくのごとし」

人心は恟々として、まことに唯ならぬものがあつた。

この知らせは、むろん、萩にも飛んだ。

「天下の武士は何をしてゐるのだ、なぜハリスをゐばらしておくのだ！」

若い玄瑞の胸は憤りに煮えくりかへつた。

「斬れ、ハリスを斬れ！」

ハリスを斬らなくては、日本の國難は救へぬ、と彼は考へた。

「よし、斬らう、おれが斬らう！」

そこで彼は、さつそく、自分のその意見を烈々たる文字に綴つて、それを吉田松陰に送つた。彼は松陰が自分の説に賛同してくれることを信じて疑はなかつた。

「來れ、大いに談じよう」

さういふ返事をすら期待してゐた。

返事は來た。

しかし、それは「來れ、談じよう」といふやうな簡單なものではなかつた。松陰の返書は、玄瑞が書き送つた文章と殆んど同じぐらゐに長く、同じやうに熱意のこもつたものであつた。玄瑞は、若輩の自分に對する松陰のさうした誠意と好意に、まづ感謝し、さすがに立派な人だなと敬服もした。けれども、松陰の書面の内容は、玄瑞の期待と、あまりにも違ひすぎてゐた。

議論浮泛にして、思慮粗淺、至誠中よりするの言にあらず。世の慷慨を裝ひ

氣節を扮ひて、もつて名利を要むる者と、何ぞ異ならん。僕、深くこの種の文を惡み、最もこの種の人を惡む。

松陰の文章は、のつけから、さういふ手きびしい言葉をもつて綴られてゐた。玄瑞は、いきなり鐵の棒でグワンと眉間をやられたやうな氣がして、くわツと血が頭に上つた。けれども、それをおさへて、さきを讀んだ。

僕、請ふ、ほぼこれを言はん。兄、さいはひに精思せよ。およそ國勢を論ずるものは、上は神后、下は豊公にて可なり。時宗は季世に生れ、急變をおもんばかり、一着たまたま中る。臣よりまた一時の傑なり。然れども、もつて國勢を論ずるに足らず。

使を斬るの舉は、これを發丑（嘉永六年）に施せば可なり。これを申寅（安政元年）に施すは晚し。然れども尙ほ或は及ぶべし。乙卯（安政二年）を過ぎて今日に至れば、晚きのまた晚きなり。たいてい事機の去來は、影の

ごとく響のごとし。往昔の死例をとりて今日の活變を制せんと欲す、難きかな。いふところの思慮の粗淺とはこれなり。

天下なすべからざるの地なく、爲すべからざるの身なし。ただ事を論ずるには己れの地、己れの身より見を起すべし。すなはち着實たらん。故に、身、將軍の地にをらば、將軍より起すべし。身、大名の地にをらば、大名より起すべし。百姓は百姓より起し、乞食は乞食より起せ。豈に地を離れ身を離れて之を論ぜんや。

いま吾兄（玄瑞）は醫者なり、まさに醫者より起すべし。寅二（松陰）は囚徒なり、まさに囚徒より起すべし。必ずや利害心に絶ち、死生念に忘れ、國のみ、君のみ、父のみ。家と身を忘れ、然るのち家族これに化し、朋友これに化し、郷黨これに化し、上は君に孚とせられ、下は民に信ぜらる。ここにおいてか、將軍なすべきなり、大名なすべきなり、百姓乞食もなすべきなり

り、すなはち醫者四人に至るまで、なすべからざるものあるなし。これを論ぜず、傲然天下の大計をもつて言をなす、口焦れ唇爛るとも、われその裨益あるを知らざるなり。いふところの議論の浮泛とはこれなり。

且つ、兄が身の任とするところ、弓馬なるか、刀槍なるか、舟船なるか、銃砲なるか。そもそも將たらんか使たらんか。神后の時にはば、よく武内たらんか。豊公の時にはば、よく孝高たらんか、清正たらんか。家族朋友郷黨の兄に従つて節に死せんと欲するもの、計幾人ありや。兄を助けて財を輸さんとするもの、計幾人ありや。

聖賢の貴ぶところは、議論にあらずして、事業にあり。多言を費すことなく、積誠これを蓄へよ。

けつきよく、これは、

いたづらに自己の立場を忘れて、天下國家を何の實質的な計畫もなく大言壯語

するな」

と、戒めたものであつた。

しかし、玄瑞は、これに承服することができなかつた。

彼は松陰から「いつたい、お前は何者だ、よく反省して出直して来い！」と、どなりつけられてゐるやうな気がして、それにも反撥したい気持はあつたが、それ以上に、

「北條時宗が蒙古の使を斬つたやうなやり方は、もはや安政以後では遅い」

といふ松陰の説に對しては、絶対に賛成できなかつた。彼は再び筆とり、激しい調子で、

「遅しとなさず」

と反駁した。

それに對して松陰から返書が来る。こちらからもまた書く。かうして書面の往

復は三度くりかへされた——といふことは、すでに前にも述べたが、この三度目の時には、實は、さすがの松陰も首をかしげて、ちよつと考へこんだのである。

十七歳の青年の猛烈な反撃に對して、松陰は、いくらか感心すると同時に、すくなくならず辟易を感じたわけであつた。そこで彼もまた三度び筆をとつて、

●君を大言壯行の輩と見なしたのは、僕の過であつた。君の考へがそれ程よいと思ふなら斷然實行するがよからう。

實は自分にも以前ペリーを斬らうとして失敗した苦い経験がある。

もし君が實行したら、あるひは天下萬民の幸福となるかも知れない。もし實行できなかつたら、それこそ空言裝扮の徒となるであらう。

と、さういふ意味の書面を返したのであつた。

松陰は、おそらく玄瑞から四度目の書面はもう来るまいと思つた。そのくせ、心のどこかには、あるひはもう一度ぐらゐ、といふ氣持もあつた。

けつきよく、書面はもう來なかつた。

書面のかはりに、いま、玄瑞自身が、かうして松陰の前に坐つてゐる。

けれども、ここで玄瑞自身の口から述べられたことはといへば、けつきよく、三度の書面のくりかへしに過ぎなかつた。それを更に詳しく、更に熱意をこめて語つたに過ぎなかつた。

だから、多くの場合、松陰は殆んど聞手であつた。

松陰は、——彼自身が、痛々しいほど眞剣な、血みどろの眞實の探求者であつたから、どういふ場合にも、また、どういふ相手に對しても、さうするが正しいと信じた以上、その信ずる道を説いてやまない人であつた。決して相手によつて精神を變へることはなかつた。そのかはり、その説き方、説く順序、さういふ方



法については、相手によつて手かげんをした。それこそ、仁を見て法を説く人であつた。決して相手の見さかひもなく、いつでも同じ調子の笛を吹くやうな人ではなかつた。

彼は、すでに若い久坂玄瑞の文章を読んでゐる。それは前後三篇も読んでゐる。相當の學識の持主であることも、文章家であることも認めた。また、純真な熱情家であることも、意氣さかんな青年であることも、疑はなかつた。その上に、いまはかうして、その本人が自分の目の前に坐つてゐる。逢つて語つてみると、書面の上で感じてゐた以上に、しつかりしてゐて、たのもしく見どころのある青年であることがわかつた。

松陰は、自分がこれまでに知つた年少の友の中に、これほどの青年が果してゐたか、どうか、とさへ考へてみたくらゐである。

にもかゝらず、彼——玄瑞の意見も論策も、なんとしても若すぎた。どこか

青い匂ひがした。それも單なる思ひつきや、ぼつと燃えあがる熱情から出ただけのものなら、それは青年にありがちなこととして、その意氣だけを汲みもし、勵ましてもやればよい。しかし、この男——この久坂玄瑞のやうに、ひたむきに、一徹に、自分の意見に囚はれて、動じようともしない場合、いつたい、どう動かしてやつたらよいか？ さすがの松陰も、いさゝかタデタデのかたちであつた。この青年もまた、かつて自分が踏み迷つた棘の道に、いま、足を踏み入れようとしてゐる、と松陰は見た。忠告してやるべきだ、と思つた。けれども、この才能ある青年が、自身でその意見を反省してみようとする謙讓さと、おちつきとを、とりもどさないかぎり、いまは論じても無駄だと考へた。——松陰が多く聞手の役にまわつた所以である。

ところで、いまは少し違つて來た。

ひととほり語りたいただけ語り論ずるだけ論じた玄瑞は、やうやく、松陰の言葉

に耳をかたむけようとする、おちつきや、ゆとりを見せて来たのである。

「しかしのう、久坂君、問題は……」と、その時、松陰は言ひかけて、ふと、話の順序を變へた。

「さうさう、あなたは宮部鼎藏に逢はれて、彼から僕の話を聞いたと言はれたのう、さつき？」

「はあ、實をいふと、宮部さんのお話は、ほとんど先生に關することに盡されてゐたからなんですから」

「うむ、では、むろん、僕が彼とペリーを斬ることを約して、つひに果し得なかつた前後の話もお聞きでしたらう？」

「いや、それは……。それは、しかし、先生御自身の二度目の御書面によりまして……」

「さうです、あの書面にも書いたやうに、僕自身がペリーを斬らうとしたのです、わづか二年前のことだが……。しかも、その二年前と現在とは、のう、久坂君、すつかり事情も變つてをりますので。いまは既にアメリカともロシアとも和親條約がむすばれてゐるが、あの時はまだ折衝中のごさつた。ペリーが日本を脅迫してゐる時のごさつた」

「しかし、ハリスとても脅迫してゐるではござりませぬか！」

「それはさうだが、しかし……」

「しかし、その條約をむすんだからこそ、國難にも陥つてゐるのです、ハリスを斬る理由は十分……十二分と僕は考へます」

「ハリスを斬る、それはよい、が、その不法を詰つて彼が——アメリカが、奇禍おくべしとなして、より以上の不法を申し出たら……？」

「斬ります。第二のハリスが來たら、第二のハリス斬るべし。第三の……」

「久坂君、あなたは國と國との約束——條約といふものを、どう考へておいでだらうか？ 前にも言ふやうに、また手紙にも書いたやうに、幕府は既に二處と和親條約をむすんでをりませぬ。その條約を道を踏んで破棄しないかぎり、こちらから絶すべきではありません。われから絶すれば、みづから信義を失ふことになります。肝要なことは、力です、國力です。幕府とても——僕は決して幕府を辯護するものではないが、幕府とても決して進んで和親したのではないのです。強ひられたのです。なぜ拒絶することが出来なかつたか、力です、力にものを言はされたのです。むろん、幕府の弱腰は無念の上もないが……。しかしのう、久坂君、だから、われわれは、いま、一人のハリスを斬るより、のう、もつと力を、國の力を、蓄へることに思ひをいたさなくてはならぬ。北に備へて、蝦夷を拓き、南に備へて、琉球を收め、アジャはアジャで、しつかり固め、アジャの美しい清らかな精神が、蠻奴の汚すところとならないやうに、朝鮮、滿洲を拉し、

支那を守り、印度に臨み、もつて進取の勢を張り、もつて退守の基を固くしなければなりません。……僕が米艦に投じて、海外へ航しようとしたのも、精神はやはり、彼を知つて彼の上に出たいからだつたに過ぎませぬ」

「先生！ 僕は決して、先生の御高説を否定するものではありません。さりながら、いま、日本が直面してゐる當面の苦難は、米使を如何にするかの問題であります」

「だから、それは……」

「それは幕府の考へることで、青書生の論すべきことではない、と言はれるのですか。お前は分相應に醫者の勉強でもしろ、と言はれるのですか。先生！ 僕は、僕は醫者になることを潔しとしてゐないのです。なる氣もありませぬ。僕は、いま……」

「久坂君！」

「はあ？ いや、脱線いたしました。本論に歸りませう。とにかく、彼が——米國使節ハリスが、我に難題を吹ッかけるのも、これは先生のお言葉どほり、力であつて、つまるところは、彼が我を——日本を、くみしやすしと見てゐるからのことです。それゆえに、僕は、ここで神州に男兒あることを知らせることが絶対に必要だと信ずるのです。彼に知らせるだけではない、我みづからにも知らせる必要があります。たとひ醫者の卵の青書生にもせよ、神州のために起つて虜使を斬つたと知れば、日本の武士であるからには、必ずや天下の武士が決然として奮起するに違ひないと信ずるのです。——先生！ 僕はもう、この問題に關してこれ以上お邪魔をする氣はありませんね」

「……もう動かね決心だと言はれるのだな、それが？」

「どうです」

「……さうですか」

松陰は、その一言を溜息とともに答へて、ちやうど自分より十歳ちがひの若々しい青年の顔を、おつと見つめた。

玄瑞もまた、まづすぐに松陰の顔を見つめた。興奮のためか、つひに松陰の賛同をうる事が出来なかつた口惜しさのためか、その黒い大きな目は潤んでゐた。

しばらくの沈黙がつづいた。

せまい幽囚室のどこかで、り、り、り、り、り……と、こほろぎが鳴いてゐた。

一方、文子たちは、城内にある宮崎八幡宮におまわりをすまして、歸途につきかけてゐた。

家を出る時には親子四人であつたが、いざは一行五人であつた。おなじ小野道に住み、ふだん親しくしてゐる大野たつといふ娘を、晝間からの約束にもとづいて、文子が行きがけに誘つたからである。

さて五人は歸りかけた。

父の百合之助と弟の敏三郎が並んでさきに立ち、女三人は、文子を中心に、そのあとにつづいた。母を中にする方がよかつたのだが、自分が文子とおしやべりをするの都合がよいやうに、大野の娘がさういふ並び方にしてゐるのである。

ところが、今夜の文子は、たつに話しかけられても、ただ「ええ」とか「いえ」とかの返事をするだけで、自分の方から話しかけるやうなことは殆んどなかつた。平素も決しておしやべりの方ではないが、同時に決して無口といふ程でもなかつた。

今夜のお文さん、何だかをかしい、と大野の娘は行きがけから感づいてゐた。

さう感じてゐるのは、たつだけではなかつた。

睡の敏三郎は、十二になつても、祭の夜の笛の音も太鼓の音も聞くことは出来なかつたが、父や母や、それから、とりわけ自分の好きな末の姉と一しよに、かうして遠くへ出かけるだけでも嬉しいのに、道には人があふれてをり、街にはあかあかと灯がともつて、華かに店がひろげられてあるのを見て、嬉しくてたまらず、ふだんは幾らか陰気にも見える淋しい顔を、やはり十二の少年らしく生々と輝かしてゐた。そして、なにか變つたものや珍らしいものを見つけたことに、くると後をふりむいて、ニコニコと文子に笑ひかけるのであつた。

文子もまた、それに気がつきさへすれば、すぐニッと笑つて背きかへすのであつたが、實はそれに気がつかないことの方が多かつた。

文子は、べつに悲しい顔をしてゐるのでもなければ、憂鬱さうだといふのでもないが、なにかしら、ぼんやりとして、多くの場合、自分の足もとよりは少し先

の方をデッと見つめるやうにして、黙々と歩いてゐるのであつた。

さうした文子の様子は、陞の弟にも、ふだんとは何だか變つてゐるやうに見えた。いまままで自分とおなじに子供だとはばかり思つてゐたこの姉が、今夜は美しい着物を着て、たいへん美しくも見え、大人めいても見えたが、さうした感じだけではなく、なにかもつと變つてゐるやうな気がした。

「お文さん！」

と、とうとう大野たつが、茶目ツ子みたいな笑顔で、それを口に出した。

もしも大野たつが昭和十年頃の女學生だつたら、

「どうなすつたのよッ、文子さん、や、あにセンチな顔をして！」

と、ドンと文子の丸い肩を叩いたところであつたらう。

大野たつは文子よりは三つ四つ年上で、近所でも評判の快活な娘ではあつたが、もちろん、さういふ聞き方はしなかつた。

「お文さん？ どうなされましたの、なんだか浮かない顔をして！」

すると、文子もチラと友だちの方を見て、いゝえ、何でも……といふやうに、かぶりを振つて、ニッと笑つて見せた。ふつくらとした豊かな頬に、ぼくツとエクボが浮き、白い前歯が街の灯の光をうけて、チラチラと光つた。さういふ時の文子の顔は、なんとも愛くるしく印象ぶかいものがあつた。

母の瀧子も文子の様子には、むろん、氣づいてゐた。母は娘が十四であることも、この頃めつきりと大人めいて來たことも、ちゃんと知つてゐた。けれども、いまはまだ、そおつと見まもつてゐてやるだけでよい、と思つてゐた。

父が氣づいてゐるかどうかは、わからなかつた。父はただ、歸りには幾らか氣輕な調子で話をした。神詣の時には、途中で知人に逢つても言葉もかはさないほどの敬神家の父であつたが、いまはお詣りもすましたことだし、殊に今日はお祭の夜で子供づれのこともあつたから、さういふ氣にもなつたのであらう。彼

は歩きながら、宮崎八幡宮の祭禮のことと、その夜になされる毛利藩獨特の旨意による月見のことについて、その由来を、文子とたつに語つて聞かせた。

その月見の話は、この小説でも述べるがよい性質のものではあるが、いまは別の機会を待つとして、さて五人は話をしながら歩きつづけた。長い萩の幾つかの町筋もやうやく盡きて、やがて五人は川のほとりに出た。松本川である。この川と、もうひとつの橋本川とに抱かれた、扇をひらいたやうな地形の町が、萩の城下であることは、すでに述べたが、この二つの川の内を川内といひ、外を川外といふ。五人は、いま、川内から川外に出るべく、大きな橋を通りかかった。松本橋である。

と、おなじ橋の向ふ側から、若い一人の武士がやつて來た。敏三郎がそれに気がつき、うしろを振向いて、母と姉とに目顔で知らせた。が、その頃には、先方でも気がつき、すたすたと足を早めて來て、

「いまお歸りでござりますか、お留守中お邪魔を仕りました」と、いんぎんに挨拶をした。

「まあ、久坂さん、もうお歸りでござりますか、もう少しごゆるりとなさればようござりましたにのう」

澁子が挨拶を返した。

まもなく五人と玄瑞は會釋をかはして、別れた。

その玄瑞について、二言三言、大野たつが噂をしたのを、キツカケにして、人の噂などしたことのない百合之助が、珍らしく自分の方から話した。

「玄瑞君の方は、なんでも明倫館の大へんな秀才だといふ噂を聞いてゐるだけで、逢ふのは今がはじめてぢやが、父御の良迪どのは、なかなかの人物ぢやつた。それから長男の玄機さんといふのがのう、これがまた、實に優れた人物で、青木周弼君などと一しよに、この長州に瘡瘡を植えることを奨励した人ぢや

が、さういふお醫者の方の仕事ばかりでなく、この人は……」  
それに受け答へをするのは、大野たつで、文子は黙つて聞いてゐた。

松陰は、机に片肘つき、目をつむつて、ひとり黙然としてゐた。

その頭の中には、つひに自分の手でひきとめることが出来ず、ここを立ち去つて行つた青年の、若々しい妻が、ちらついてゐた。

「おそらく彼はもう二度とここに来ることはあるまい」

さう思ふと、ひどく寂しかった。だが、それも仕方がないと思つた。

「彼の情熱の中には、少くも偽りや私心はなかつた。それは認めてやらなくてはならぬ。……彼もまた、彼なりの道によつて、至誠をつらぬかうといふのだらう。それもよい」

さう思ふしりから、

「彼は、しかし、私 গতとひ彼の意見には賛成しないにしても、彼の才能や人柄を愛してゐる、といふことに気がついてくれただらうか」

と思ふと、そこに未練も残つた。

しかし、すぐ肘杖をとき、さうした一切の想念をはらふやうに、かぶりを振つて、耳をすました。

こほろぎがまだ鳴いてゐた。

「いま、この部屋にゐるのは、あのこほろぎと、おれだけか」

彼は苦笑した。

こほろぎの聲のほかは、家の中は、ひっそりと静まつてゐる。

父や母たちはゐないにしても、兄はどうしてゐるだらう。嫂は……？

松陰は、早く父たちが歸つて來ないかなア、と思つたり、いやいや、せめてか



ういふ時になり、お父さまもお母さまも、ゆつくり街を歩かれて、この不孝息子  
のことなども忘れていたださいたい、と思つたりした。

松陰は、ひどく人なつツこい性分で、たいへんな寂しがり屋であつた。

「たゞ今」

玄關の格子が開いた。母の聲がした。

ふツと松陰の陰が熱くなつた。

第七章 小春日に

十月半の、なごやかな陽が、ぼかぼかと照つてゐる茶の間の縁側で、母の瀧子は、ひとり日向ぼつこを楽しみながら、松陰の冬の裕をほどいてゐた。

バチツ、バチツ……と、古糸を切る自分の鋏の音と、庭の木立に來て鳴く小鳥の聲のほかには、物音ひとつ聞えぬ、ひっそりと静かな午下りであつた。

瀧子の顔には、さうした静けさの中に身をおいて、寂しさを感ずるよりは、むしろ、それをひそかに楽しんでゐるといふやうな風が見えてゐた。もはや頭には白髪をまぢへた彼女の、ふつくらとした屈託のない丸い顔には、ほのかな微笑さへうかんでゐた。

瀧子は、いま、ひとりさまさまの思ひにふけつてゐるのである。

百合之助に嫁して三十年、息つくまもなく家事と育児に追はれて、つひぞかう

してひとりの思ひを樂しむひまとして持てなかつた瀧子であつた。むろん、五十歳の現在でも、まだ、さうした女の務から解放されてゐるわけではなかつたが、いはば、さうした仕事に、やつとひとしきりついて、ちよつと中休みをしてゐるといふ形であつた。

けれども、瀧子の思ひといへば、いつの場合にも、七人の子供と夫のこと以外にはなかつた。それが彼女の凡てであつた。それが彼女の生きる世界であつた。いまもいも、瀧子の頭の中には、七人の子供が動いてゐる。七人のうちの一人は、すでに十四年の昔に亡くなつてゐたが、母の頭の中には、いまなほ、あとの六人と變りなく生きて動いてゐるのである。

が、その子のことは、もう、いまは思ふまい。その頑是ない子の無心の眠りを妨げないためにも……。

それよりも、あはれなのは、暁の末の子、敏三郎であつた。この子のために、

母の瀧子は、どれほど精神を傾けつくしたとか。母の白髪しろがみの幾筋かは、おそろく、この子に物を言はせようとして苦勞した日々の記録ともいへよう。醫者や藥はいふにおよばず、神もうで、お寺まゐり、加持祈禱、そのほか、よいと聞くほどの木の根、草の實……。ありとある手段の限りはつくした。

けれど、これも前世の約束ごと。人の力のおよぶところでないとするれば、いまはあきらめよう。

とすれば、いま、この母親の心がかかりは、やはり、次男の松陰と、末娘の女子のこと、その二つにかかつてゐた。

長男の梅太郎は、これはまづ、心配がなかつた。自分たち二親ふたごの死水しづかをとつてくれる杉家の後継息子として、母の欲目かも知らないが、瀧子には、ほとんど申分なく見えた。

他家から迎へた嫁の龜子も、さいはひ、夫婦仲むつまじく、早くも杉氏の家風

になじんで、親兄弟ともよく和合してゐた。

つぎに、兒王家に嫁にやつた姉嬢の千代については、舅の太兵衛が名うての一人國者のことゆえ、千代の氣苦勞も一通りではあるまいと案ぜられはしたが、しかし母としては、この娘の氣性や人柄を信じて、それに期待をかけてゐた。

「まあ、お千代ならば、なんとか丸く家を治めてゆけるぢやらう。よく氣がつく質だし、がまん強い女ぢやから……」

瀧子はさう信じてゐた。

「それに、お千代は、三人の娘の中でも一番この杉家の氣風を身につけてゐたから……」

瀧子は、この杉氏の家風といふものを、こよないものに思つてゐた。

「だから、足りないところは、まごころと努力で、しつかり補つてゆくぢやらう」

娘自身のことよりは、むしろ、娘の子供等が、丈夫に幸福に育てかしと、いまはそれを祈るだけである。

小田村に嫁いだ仲嬢の壽子についても、べつに案ずることはなささうだつた。

小田村伊之助と壽子が結婚したのは、小田村が二十五歳、ちやうど十歳ちがひの壽子が十五歳の時であつたが、この小田村は、温厚篤實な學者で、壽子に對しても至つて優しかつた。母の瀧子は、それを何よりのことに思つてゐた。小田村の家が、自分が百合之助に嫁いで來た頃の杉家同様、いや、あるひはそれ以上に、貧しいことなどは、まるで彼女の念頭になかつた。

「財産よりも身分よりも、かんぢんかなめめなのは、人間ぢやでうら！」

彼女は堅くさう信じてゐる。そして、自分の娘が、財産も身分も實家よりは上の人に嫁に行つて、慣れぬ家風に人知れぬ苦勞をするよりも、將來の見こみのある夫を助けて、二人でこれから築きあげる苦勞をすることをこそ、心から祈つて

ゐた。

「さうしてこそ、夫婦の味も情愛もまた格別ぢや」

壽子はそこに氣がついてゐるだらう、と母は思つた。

「あの子は、小さい時から、すこし片よつた氣性の子ではあつたが、それだけに勝氣で伶俐な娘ぢやつたから……」

さういふ風に考へてくると、それらの子供等については、もう何も氣にすることはなかつた。

「ああ、大次郎……」

母の思ひは、けつきよく、そこに落ちてゆく。

瀧子の頭の中には、いま、六歳の日の、わが子、松陰の幼い妻が、ちらついて

ゐる。

六歳にして山鹿流兵學師範の家をついだ松陰……。

「わしは武士の子ぢや、そして兵學の師範家たるべき人間ぢや。——卑怯な眞似をしてはならぬ。どのやうな苦勞にもうち克たねばならぬ！」

この自覺は、すでに六歳の童兒の全精神を支配した。そして、その精神は、一生を通じてつらぬかれた。

松陰の學問の緒は、父百合之助自身によつて手ほどきされた。それは非常に風變りな方法によつてであつた。武士とは名のみで、自ら耕し、自ら蒔き、自ら野に草を刈り、自ら山に薪を拾ふ、さういふ勤勞の生活をつづけてゐた百合之助は、その田に畠に山に野に、常に二人の幼い息子を伴ふた。そして、耕しながら、蒔きながら、刈りながら、拾ひながら、そのひまひまに書が講ぜられ、光輝ある皇國の歴史が説かれた。

勤勞に、勉學に、疲るれば、親子三人は、聲をあはせて朗々と詩を吟じた。頼山陽の楠公墓下の作をはじめ、すべてが勤皇の精神を誦つた詩にかざられてゐた。

また、文政十年の詔や、玉田永教の神國由來記などは、少年の頭に勤皇の大精神を培ふものとして、日夜暗誦を命ぜられた。

文政十年、將軍徳川家齊は、太政大臣といふ武臣として最上の榮官に任ぜられ、あまつさへ優渥この上もない詔書を、仁孝天皇よりたまはつたのである。然るに家齊は、この詔書を、江戸城にゐながらにして拜し、わづかに世臣を入京させて謝するにとどまつたのである。

當時、江戸では、

「參内もせずに太政大臣は、これを無精（武將）の始めなりけり」とか、

「無精とも又ふしやう（不肖）とも言へば言へ、食ひ（位）過ぎては動かれもせず」

などと、辛辣な落首が貼られたくらゐであつたが、百合之助は、徳川氏のこの無禮をつたへ聞くと、沐浴して衣服をあらため、はるかに京都を拜し泣いて、

「王室の式微、武臣の跋扈、つひにここに至れるか」

と慨嘆したのであつた。

彼は、この詔書を清書して松陰兄弟にあたへ、日夜暗誦させたわけであつた。

松陰、幼少につき家學の方は、藩命により、家學の高弟たる林真人・玉木文之進・石津半七等をもつて家學教授を代理せしめられたが、松陰十歳の時、代理教授をやめ、更に林真人・石津半七・山田宇右衛門をもつて後見せしめられ、これは松陰が十九歳で獨立の師家となる日までつづけられた。

松陰はさういふ人々について學んだわけであるが、なかんづく、少年松陰の薫

陶に最も力をそそいだのは、叔父の玉木文之進であつた。のちの乃木將軍をも教育したこの文之進は、元來が謹嚴剛直の人ではあつたが、松陰の教育に熱心なあまり、その教授の殿しいことは、時に言語に絶するものがあつた。

松陰は、この叔父から鐵の火箸で叩かれたり、縁端から蹴落されたりすることも珍らしくはなかつた。

さういふ時、さすがに母の瀧子は、

（大次郎は何をぐづぐづしてゐるんぢやらう、あんな時は早く逃げだすか、せめて身をかはしてもすればよいものを……）

と、女ごころから目には涙さへうかべて、はらはらしてゐるのであつたが、松陰は、逃げだすどころか、みづから頭を叔父の拳の前にさしのべて、ただただ、叔父の教にそむかざらんことを努めるといふ風であつた。

松陰はまた、十七歳の時、家學後見人の一人たる林真人の家に身をよせて、教

を受けたことがあるが、この折に、師家が火事にあつたことがあつた。すると松陰は、師の家の持物を焼かせまいとして、自分自身の持物は一物をも残さず焼かれてしまつた。

學問の方面における松陰は、その眞劍なること、おほよそ、かくの如くであつた。

だからこそ、十歳の時には、早くも藩命によつて、藩費―明倫館に家學の教授をすることも出來たのである。

十歳にして多くの門人たちから師とあふがれた松陰、彼はまた、家庭においては善良な……あまりにも善良な、息子であつた。

母の瀧子は、この子が母の意にさからつたことの思ひ出を、ただの一つも持つてはゐなかつた。

もしあるとすれば……

松陰は兄の梅太郎と仲がよかつた。家學の勉強のために離れてゐる時のほかに、この兄のゐるところには、必ずこの弟がをり、この弟の行くところには、必ずこの兄もまた行つた。

夜も一つの臥床ふしどに寝た。

この弟が、この兄にさからふ場合が、ただ一つあつた。それは一しよに勉強をしてゐて、さきに疲れた兄の梅太郎が、

「大さん、もう止とさうか」

と、いひだす時であつた。さういふ時、弟は、「はい」と返事はするが、すぐその後につづけて、

「でも、兄さま、もう少しやりませうよ、今日おぼえられるのを明日に延ばすのは惜あはしうござりますから」

と答へた。すると、兄は兄で、

「さうだのう、ぢや、さうしよいか、大さんが勉強するのに、兄のわしが忘れてはわるい」

と、あつさりカブトをぬいで、また勉強をつづけたものであつた。

また、食事の時、母の方では、いつの場合でも、ちやんと兄弟それぞれにお膳を供へてやるのであつたが、松陰は必ず自分のお椀やお皿を兄のお膳に移して、兄と頭と頭をくつつけるやうにして食べた。さうしなければ、せつかくの食事もおいしくないといふ風であつた。

だから、もし松陰に母の意にさからふやうなことがあつたとすれば、このお膳のことぐらゐのものであつたらう。

けれども、さうして一つお膳で物を食べてゐる幼い兄弟の姿を思ひうかべると、母の老ひた眼には、うつすらと暖い涙さへにじんできるのである。

「あゝあ、さういふ大次郎……いや、寅次郎が……」



と、瀧子は思ふのである。

さういふ優しい善良な寅次郎——松陰が、さきには藩の掟を破つて、士籍を  
けづられ、家祿を召しあげられ、その罪もゆるされないうちに、こんどはまた、  
こともあらうに幕府の大典を犯して、いま現に幽囚の日を送つてゐるのである。  
ときものをする母の手は、いつか膝の上で動かなくなり、その手に持たれた  
鉄の刃さきだけが、空しく秋の午後の日にならたらと光つてゐた。

瀧子は、しかし、わが子、松陰を信じてゐた。

「あゝいふ子が、——あゝいふ正しい道理を愛し、私心といふものをツユほど  
も持たない、まッ正直な人間が、邪よこしまなことをするはずがない」  
彼女は深くさう思ひこんでゐた。

實家の村田家は、家格こそ、さう高いとはいへなかつたが、富裕で、瀧子も多  
少の讀書は授けられてゐたし、根が向上心に富む女であたから、杉家に来てから  
も、暇さへあれば、夫や息子たちが書を講ずるのを傍らかたわらで聞いて、せめて耳學問  
でもして修養を怠るまいと、これは五十の今でも變りなく努めてゐた。さういふ  
風であつたから、いま天下の情勢がどういふ風にはしくなつてゐるかといふこ  
とも、おほよそは見當がつくのであつた。

むろん、松陰がどうして亡命してまでも東北の巡歴をしなければならなかつた  
のか、さらにまた、どうして恐ろしい海外渡航をまで企てなければならなかつた  
のか。さういふところの細かい理窟は、——これは相當の識見もあるはずの藩士  
たちにさへ理解されてゐなかつたくらゐだから、女の瀧子に、はつきりと呑みこ  
めやうはずもなかつた。

彼女はただ一途にわが子を信じたのである。

「松陰にかぎつて、邪な私心からそんな大それたことを企てるはずがない。それには何か正しい道理ありと信じてやつたことであらう」と。

だから、母としては、誰が何と言はうと、どこどこまでも、この子を守りとはしてやらなくては、と堅く思ひこんでゐたのである。

「——したが、考へてみれば、ほんにをかきな悴よなア、ふだんはあのとほり、ものもよう聲高には言はないやうな、おとなしい男ぢやのに、さて胸の奥には、恐ろしい火の玉のやうなものが燃えてゐるでう」

瀧子は、わが子の氣性を、さういふ風に考へ、その火の玉のやうなものを尊いものに思ひながら、同時にまた、それをこの上もなく恐れてゐるのであつた。何とかして、その火の玉のやうなものを、しづめてやらなくてはと思つてゐた。それには、せめて幽囚の身の松陰に、寒い思ひや寂しい思ひをさせず、ふんはり

暖い家庭の空氣でつつんで、慰めてやらうと思つた。

「さういへば、いゝあんばいに、あの子も、この節は、いくらか落着いて來たやうぢや」

母の瀧子には、それが何より嬉しいことであつた。

去年の暮の十五日に、野山の獄を出てきた松陰は、父や兄にすゝめられて、二日後の十七日から、幽囚室で孟子の講義をはじめた。

集まる弟子の顔ぶれは、父の百合之助や兄の梅太郎のほか、久保五郎左衛門、文之進の一人息子である彦介、高洲爲之進、佐々木龜之助・梅三郎・謙藏の兄弟、會橋直之進、そのほか近親の人々ばかりであつた。お咎めの身ゆえ、親戚の者だけを集めたわけであつたが、實際には、もうこの頃から、松陰の講義があると聞いて、近所の子供や青年たちで、ひそかに來り學ぶものも次第に多くなつて來てゐた。

この時五十三歳になつてゐた例の久保五郎左衛門は、變り者の本性を發揮して、まだ働きざかりの四十一の時には、早くも家督を當時まだやつと十三歳であつた長男の清太郎にゆづり、自分は隱居の身となつて、自宅に塾をひらき、玉木文之進がはじめた松下村塾の名をうけついで、近隣の子弟を教へてゐた。その塾には、のちの吉田稔麿や伊藤博文のやうな、優秀な少年たちもゐたが、久保家と杉家はいまでは裏庭から往き來のできる近所だつたので、久保塾の少年たちで、松陰のところへ學びに來るものも少くなかつた。

松陰の孟子の講義は、今年の六月までつづいたが、さうして書を講ずる時の松陰の態度は、いかにも熱烈ではあつたが、また、いかにも平和に幸福さうに見えた。

どうぞ、その状態がつづきますやうに、と母は願つた。

「さうして學問のお講義に身を入れて、おとなしうしてをれば、やがてはお上の

お答めもとけようほどに……」

母はさう思つた。そして、さう思ふと、何だかその願ひは叶へられさうな氣がして來た。

とすると、松陰についても、もはや大して案ずることはなささうであつた。

「あとはお文の身を固めさせることだけ……」

やうやく年頃に近づきかけてゐる娘が、時にどうかすると、この世の悲しみをひとりりで集めたかのやうに、ひどく深刻な顔をしてゐるかと思ふと、いつかまた、秋晴れの朝の小鳥のやうに、飛んだりはねたりしかねないほど、生々とした妻になつたりしたからとて、細心な母親は、べつに驚いたりあわてたりはしないものである。

彼女はただ遠くから優しい慈しみの眼をもつて、そおつとそれを見まもつてゐるのである。自分の忠言なり助けなりが、いまこそ娘に必要なだと思はれる時が来るまで。

そのかはり、さういふ母親は、あわてたり騒いだりするひまに、むしろ、娘がその幼い心にもてあましてゐるやうな思ひがあるならば、それを程よく、また正しい方向へ、流させてやるための溝を掘る。娘のために、同時にまた、自分自身の安心のためにも……。

瀧子もさういふ母親の一人であつた。

瀧子は、娘の文子が、あの祭禮の夜に、いくらか平素と様子が變つてゐたからとて、べつだん驚きはしなかつた。まして、それをその日おとづれて来た若い久坂玄瑞と結びつけて考へるやうなことはしなかつた。それは嫉けのとどいた杉家の娘でなくても、かりにも健全な武士の家庭に育つた娘で、偶然とりつきに出て

顔をあはせただけの男に對して、どうのかうのといふことが、あり得るはずのものではなかつたのである。

さういふ氣づかひは全然なかつた。

事實、文子は、その翌日から數日のあひだは、ひっそりと靜かに暮してゐたが、その期間を過ぎると、すつかりまた元のやうな娘に還つた。さういふ期間は、女の子ならば、時にありがちのこと。なんでもないことであつた。

母の憂ひは、ほかにあつた。

・「お文さん。……お文さん！」

瀧子は、とうとう、茶の間と隣りあふ六疊の間に向つて、縁端から聲をかけた。

すぐに返事が聞えて、やがて、

「御用でござりますか、お母さま？」

と、文子も縁側の方から出て来て、すぐに母の近くに坐つた。

紺緋の着物に、桃いろの半幅帯。祭禮の夜の、あてやかに大人めいた妻とは違つて、今日はまた、いかにもまだ子供じみた不遜着であつた。それが一層この末の娘を末の娘らしく思はせて、母の目には、かへつて、好ましく、いぢらしく見えた。

しかし、瀧子は、さうした身なりのことより、ニコニコと微笑をうかべて自分の顔を見てゐる文子の、その顔を、自分もまた、ものやさしい眼差で見やつたのであつた。

ふつくらとした桃いろの頬、うるほひのある大きな黒い目……。

特別に美しいとは言へないにしても、まるで憎氣といふものがない、いかにも人好きのする顔だちである。

それに、この子は、六人の子の誰よりも生々とした表情をしてゐる。言葉数が

少いかはりに、その黒い大きな眸や、笑ふたびにチラと光る白い前歯や、ぼくっとうかぶ頬のエクボが、なんと豊に物を言つてゐることであらう。

しがも、この子は、一番おとなしく、素直であつた。

(べつに非の打ちどころはない)

母はさう思ふ。けれども、母の目は、その文子の顔の、やは肌、かすかながらも疱疹の痕のあることを見のがすわけには行かなかつた。

(あゝ、この子は、この頃これを氣にしてゐる！)

母の胸は、たちまち、いぢらしさで一ぱいになる。

(のう、お文や、心配おしでないよ、お前の疱疹の痕は、決してお前が氣にしてゐるほどのものではなく、ちよつとのお化粧でかくせるぐらゐのものだからね。

……それにねえ、お文や、ほんとに頼りになれ男といふものは、妻の顔のわづかのきづなどよりは、心の美しさをこそ望んでゐるのだからね！)

さう罰<sup>ばち</sup>へてやりたく、そのためにこそ、ここに呼びもしたのであつたが、瀧子は、やはり、あらはにさういふことを、娘のために、かへつて恐れた。それで、「のう、お文さん、もうかれこれ八つ時ぢやで、お茶でも入れて、寅<sup>とら</sup>兄<sup>にい</sup>さまのところで一しよに載かうかのう」

と、まるで別の<sup>べつ</sup>ことを言つた。

すると、文子は、たちまち、はればれとした顔をして、

「はい。寅<sup>とら</sup>兄<sup>にい</sup>さまは今日もしかお暇が出来たら、私に斑<sup>いん</sup>氏<sup>し</sup>専<sup>せん</sup>心<sup>しん</sup>篇<sup>ぺん</sup>を講議してやらうとおつしやつてでした」

と言つた。

「お、お、それでは私も一しよに聞かせていただきませう」

母と娘は、二人がかりで、ときものをかたづけ、いそいそとお茶の支度にかかつた。

杉家にとつて、安政三年は、案外、平和のうちに暮れて行つた。

安政四年、松陰は幽囚室で二十八歳の春を迎へ、文子は十五歳となつた。

この年の四月、しばらく江戸に遊學中だつた久保五郎左衛門の長子——清太郎と、相州宮田陣屋番手として相模の海岸警衛の任にあたつてゐた壽子の夫——小田村伊之助とが、前後して萩に歸つて來た。

この人たちは、單に一族といふだけではなく、それぞれ有爲の立派な人物で、學識もある人たちだつたから、松陰の喜びも大きかつた。

それに、この二人は、年もほぼ松陰に近かつた。松陰の義弟にあたる小田村伊之助は、實際は松陰より一つ年上だつたが、久保清太郎の方は、松陰より二つ年下だつた。

この頃は、松陰の幽四室における教學も、いよいよ盛になり、五郎左衛門の松下村塾の子弟たちで、ひそかに松陰のもとに來り學ぶものも數も次第に多くなつてゐた。

やうやく松陰自身の情熱もまた、さうした青少年を導かうといふ方にこそがれて來た。彼が久保五郎左衛門に頼まれて、のちに有名となつた「松下村塾記」を書いたのは、去年の九月四日のことであつた。それは五郎左衛門の松下村塾のために書いたものではあつたが、同時に、彼自身の教育の理想と抱負を述べたものであつた。

松陰の情熱が、さうした教學の方面にとどまつてゐるかぎり、杉家もまた、平和であり安泰であつた。

母の瀧子は、むろんのこと、自身が隱健な人物で、隱健なことを好む父や兄も、それを深く喜んだ。そして彼等は、子であり弟である松陰について、自分等

も學び、また、ひたすら松陰の心の靜穩ならんことを祈つて、なにくれともなく松陰を勉はり庇つた。

青少年等が、ひそかに松陰の門を叩くことを、藩府もまた、見て見ぬふりをしてゐるかのやうであつた。

弟子は次第に殖えて行つた。

前年（安政三年）から、この年にかけて、増野徳民、吉田榮太郎、松浦松洞、馬島甫仙、佐世八十郎、前原一誠、品川彌二郎、伊藤利助、博文、尾寺新之丞、冷泉雅次郎、天野御民、妻木壽之進、中谷正亮、國司仙吉、飯田俊徳……そのほか、多くの俊秀たちが、ぞくぞくと松陰の門に入つた。

だが、何といつても、この年の松陰の最も大きな喜びは、久坂玄瑞と高杉晋作を得たことであつた。



萩に夏みかんが多いのは、明治以後、その栽培を奨励したからであるが、それ以前にもあるにはあつた。そして萩の夏は、この香ぐはしい夏みかんの花の匂ひに乗つて、毎年おとづれて来た。

安政四年の五月の半すぎ、ちやうどさういふ季節の頃であつた、久坂玄瑞が再び松陰の幽囚室をおとづれて来たのは。

「先生！ 僕は先生にお叱りを受けにまわりました。どうぞお笑ひ下さい」  
再會の挨拶がすむと、玄瑞は、すぐ両手を膝につき、面を伏せて、さう言つた。

「笑へとは……？」

「はい、僕は、實はまだ……ハリスを斬つてをりませぬ」

「あゝ、そのこと……」

松陰は思はず微笑をもらした。しかし、玄瑞は前とおなじ調子でつづけた。

「さうです、きやつを斬るまでは、再びお伺ひしないつもりでゐたのですが……」

「フム、それで、その斬らなかつたと言はれるのは、斬れなかつたのか、それとも斬るを不可……」

「いえ、不可だとは思ひません、いまなほ僕の意見はハリス斬るべしです。……斬れなかつたのです。僕は萩にをる、彼は江戸……乃至は下田にをる。ここからそこまで行くことでさへ、現在の僕には簡単でありません。むろん、先生も當時すでにそれを指適なされました。さういふ點では、僕は確かに世間知らずの若造であり、先生のいはれる空言装扮の徒でございました。笑つていただきたいのは、その點であります」

「いや、その點ならば、僕はあなたを笑ふ氣は毛頭ないし、それに、あなたの虜

使を斬つて、神州に男兒あることを内外に知らせようとする精神も、わかるのだが……」

「いや、先生！ その精神ですが、ハリスを斬れとなす考へは今も變りありません、それはさきに申した通りです。ですが、その精神は、現在の僕は單に神州男兒の意氣を内外に示すだけでなく、もつと大きな政策的なことをも考へてをります。さういふ意味からも、僕はハリスを斬れとなします」

「と言はれると……？」

「いや、それより、先生！ 先生は幕府をどうお考へになりませうか？」

「幕府のう、そりや幕府の政策には僕も實に苦々しく思ふことが多々あります」

「いゝえ、僕が申しますのは、單にさうした二三の政策のことではなく、幕府そのものの存立の意味です」

「幕府の存立？」

松陰は、ちよつと驚いたやうに、相手の顔を見かへした。

「さうです、幕府の存在を、つまり、肯定するか、否か……」

「それはあなた、幕府は、天朝の」と、そこで、恭しく頭をさげて、「……天朝の御委任をかたづけなうして、日本を治めてゐるのではありませんか、而して各藩は……」

「さあ、そこですが……」

さう言ひかけて、玄瑞は、ふつと口をつぐんだ。

その時、女中でも文子でも嫂の龜子でもなく、母の瀧子が自身で、二人のためにお茶を出してくれたからである。

玄瑞は、ひどく恐縮したが、瀧子は、ものやはらかな氣さくな調子で、しばらく玄瑞とも世間話をしたのち、そこを去つた。そのあとで玄瑞は、

「さ、御母堂さまですなあ」

と、しみじみとした調子で言つた。

「不肖の子の僕には、全く、過ぎた母です」

「お羨ましいですなア」

「お、さうさう、さういへば、あなたは御両親も兄さまも……」

そこで、しばらく二人のあひだには、さうした家庭的な話がつづいた。すると、それまでの緊張した——あまりにも緊張して、氣づまりであつた空気がとれて、すつかり二人は打ちとけた氣持で語りあつた。そして、そのあひだに、二人の氣持は、ぐんぐんと近よつて來た。

最後に玄瑞は、

「では、先生！ 意見は意見としまして、僕は、この一年ちかくのあひだに、先生が僕に下さいました最初の御書面にありました——聖賢の貴ぶところは議論にあらずして、事業にあり。多言を費すことなく積誠これを蓄へよ、といふ御訓戒

を、幾度かくりかへして反省いたしました。どうか今後は僕を先生の門人として、よろしく御指導を賜はりたうございます」

と、形を正して願ひ出た。

「いや、久坂君と度々お逢ひできるのは、僕も嬉しいです。師だの弟子だのといふ氣は抜きにして、ひとつ今後は共に大いに研究しようぢやありませんか」

「ありがたうございます、是非どうか……」

その日は、玄瑞もそれで歸つた。

しかし、それからは足しげく松陰をおとづれて來て、父や兄や母とも話して行くやうになつた。時には瀧子にすすめられて、夕食の御馳走になつて歸ることもあつた。

杉家の人々のあひだで、玄瑞は、なかなか評判がよかつた。

「なかなかどうして、しつかりしてお出でぢや、まだやうやう十八ぢやとお言ひ

「おやにのう」

と、まつさきに感心したのは、母の瀧子であつた。

「それに年よりなんかにも、よう気がつかれて……」

「はあ、それに、あの男、嘸鳴文社ふなうみぶんしゃあたりでも評判はよいやうでござりますな」

兄の梅太郎は答へた。——嘸鳴文社といふのは、周布政之助や口羽把山の提唱で、藩の有志たちがつくつてゐる詩文の雅會であつたが、その頃、玄瑞も梅太郎も、その會合に顔を出してゐたのである。

「それに、立居振舞たちゐりぶりまひも立派ぢやし……」

梅太郎の妻が褒めれば、容易に人の噂などしない父の百合之助までが言葉をはさんだ。

「とにかく、なかなかよう勉強するのう」

多くの場合、文子だけが黙つてそれを聞いてゐた。

高杉晋作が松陰をおとづれて來たは、杉家の庭に萩の花が咲きかける頃であつた。そして、それは夜であつた。

「夜分にお邪魔をいたしましたしては、失禮と存じましたが、なにぶんその、父が厳きんしいことを申しますので……」

十九歳の高杉晋作は、初對面の挨拶がをはると、すぐさう言つて自分で苦笑した。

高杉晋作を快男兒一方の男と思つてゐる人は、あるひは彼が家庭では親孝行であることを見おとしてゐるかも知れない。彼は無類の孝行息子であつた。そして父の小忠太は、松陰が囚徒であることを忌み、晋作がそこに出入りすることを禁じてゐたのである。

これは晋作の場合ばかりではなかつた。多くの父兄が——殆んど全部の父兄が、松陰を天下のお咎め者として、子弟の彼に接することを禁じてゐたのである。すでに入門してゐるものも、多くは、松陰と政治向の話をせず、ただ彼から學問の講釋を聞くだけだ、といふことを條件にして、家の許しを受けてゐたのである。

それから、中にはまた、べつに松陰の徳を慕ふとか、學問を敬ふとかの氣持からではなく、天下の大法を犯して外國なんかに渡らうとしたゴークツは、いたい、どんな顔をしてゐるか、いつちやう見に行つてやれ、といふ程の氣持から押しかけて來た少年だつて決してなくはなかつた。ただ、それらの少年たちも、一度さうして松陰の門を叩くと、たちまち、彼の人柄にひきつけられて、それからは絶ちがたい子弟のきづなにながれて行つたのである。

さて松陰は晋作に答へた。

「いや、あなたのお噂は中谷正亮君あたりからよく伺つてゐました。僕の方は御承知のとほり、四人のことで、夜も晝もないが、——お困りですな、お父さまが御反對では」

「はあ、全く父を偽るのは心苦しいのですが、僕、實を申しますと、どうにも明倫館の現状にあきたりないものですから、中谷さんに勧められたのを倅ひ、實は先生に御指導を仰ぎたいと思ひまして……」

「しかし、あなたは久坂君なんかとともに、館では大いに期待されてゐるんぢやないのですか」

「いや、いけませんッ、明倫館は！ だらしがなさすぎます！」

晋作は思はずムキになつて、さう言ひきつたが、自分でもすぐそれに氣がついて、くすつと笑つた。そして、あとはおだやかに、

「いや、實際なつちやゐないんです。たとへば、この頃、館でも生徒に時局問題

についで、討論をやらせませんが、これなど全く先生にもお目にかけたいくらゐで  
す」

「時局問題についてね！ うむ、それは面白いでせう。——で、それはどういふ  
問題について？」

「どういふもかういふも、どだい、そいつがお話にならんのです。なにしろ、指  
導者に確固たる信念をもつた人がゐないんですから、生徒の方だつて、ただも  
う、ギャ／＼ワヤ／＼さはぎ立てるばかりで、——で、けつきよく、最後は最も  
大きな聲で唖鳴つた奴が勝といふことになるわけです」

「それはひどい」

「しかし、ほんとうなんです」

そこで二人は思はず苦笑ひをした。

かうした二人の對話を聞いてゐると、いつたい、どちらが師やら弟子やら、わ

からないやうであつたが、それは松陰が後輩に對しても鄭重だつたからのこと  
で、晋作としても決して武士の作法を知らぬ男ではなかつた。それどころか、彼  
なんぞ最も武士らしい武士の躰けをうけて育つた青年であつた。彼は松陰に弟子  
の禮をとり、今後の指導を願つて、この夜はやがて歸つて行つた。そして、それ  
からは、よく三町の夜道を踏んで松陰のもとに通つた。

久坂玄瑞と高杉晋作を得た松陰は、自分自身の身のうちに何か若々しい血がみ  
なぎつてくるやうな、力づよさと喜びを感じた。そして彼は、この性格の相反す  
る二人の青年の、どちらにも自分自身の姿を見た。實際、松陰の性格には、久坂  
玄瑞的なものと高杉晋作的なものがあつた。

ところで、その性格の相反する當人同志はといへば、これはまた、大いに競争  
し、激勵し、肝膽を照らしあつて、たがひに得がたい友となつた。

かうして二人の俊才を迎へた松門は、いよいよ盛大に赴いて、もはや三疊の幽

四室では多くの弟子を入れることが出来なくなつた。尤も、いままでも大ぜいの弟子が一時に來たやうな時には、幽四室に近い八疊の間を使つたのであるが、それでは杉家でも來客の折など、差支へることも多かつたので、どうしても他に塾舎を設けなければならなくなつた。

この現在の杉家は、もと瀬能といふ藩士が住んでゐたのであつたが、その瀬能時代には厩舎であつたといふ小屋が、いままも畠の中に残つてゐた。床板が張つてあるだけで、戸も障子もなかつたが、これに手を入れて八疊一室を得た。これが新しい塾舎となつた。安政四年十一月五日であつた。

この日以来、久保五郎左衛門の松下村塾もここに合體して、表面の塾主はなほ五郎左衛門であつたが、事實は松陰がこれを主宰することになつた。——史上に不朽の名を残した吉田松陰の松下村塾が、ここに輝かしく出發したわけである。

明けて安政五年になると、前記の弟子たちのほかに、新に寺島忠三郎（この頃はまだ作間忠三郎と言つた）をはじめ、入江杉藏、野村和作の兄弟、岡部富太郎、山田市之允、天野清三郎、有吉熊太郎……そのほか、いよいよ門人は多くなつて行つた。

が、それは後のこととして、話は再び安政四年に戻る。

松陰の最初の考へでは、江戸と相模にある久保清太郎と小田村伊之助とが歸つて來たら、この二人に大いに協力してもらふつもりであつた。しかし、清太郎は、歸つて來るとすぐ藩に仕へることになり、小田村もまた、藩費明倫館の助講（助教授）に擧げられて、どちらも公務が忙しかつたので、精神的な應援は別として、實際にはさう力を借すことが出来なかつた。

そこで松陰は、野山獄時代の同囚の友である富永有隣のために、免獄請願に盡力し、それが成功して、富永が獄を出ると、さつそく招いて塾の師とした。七月二十五日（安政三年）のことであつたが、富永有隣は、それから杉家に寄寓し、前記の八疊一室の塾舎が出来ると、そこに移つて住んだ。

杉家の人たちは、それでその塾舎のことを富永部屋と呼んだ。

富永部屋が出来あがつて間もない十一月上旬の、ある夕方のこと。

小田村伊之助が、妻の壽子や子供の篤太郎をつれて、ひよつこり杉家をおとづれて来た。そして彼は意外な話を持ち出した。

第九章 二人の結婚



小田村伊之助は、おなじ松本村の中ノ會といふところに住んでゐた。  
そこは新道の杉家とは——さう大した道のりでもないが、ちよつと離れてゐた。

それで壽子も夫の不在中には、よく實家をおとづれた……といふより、實は子供もろとも實家の世話になつてゐることの方が多かつたのであるが、夫が歸つて來て、忙しい公職につくと、さう度々お里がへりするわけにも行かなかつた。

それが今かうして珍らしく一家三人づれで、おとづれて來たのである。  
父も母も兄夫婦も、文子も、大よろこびで三人を迎へた。

とりわけ文子は、赤んぼうの時から論語入りの子守唄で自分をかはいがつてくれた、この四つ違ひの姉を、一族中でも特に親しみのもてる人として、一番に好

いてゐた。だから、つい、口も平素よりは軽くなつて、

「お壽姉さま、お夕飯は？——まだでござりませう？」

と、さつそく、もてなし方を考へはじめた。

「いゝえ、今日はもうすましてまゐりましたの」

「あらア」

「だつて、とつぜんでせう？ お文さんたちを騒がせてはいけないと思つて——といふのは、實はうそ、ほんとうを言ひますと、お夕食のあとでね、急に話が出て、一家總勢で出てまゐりましたの。今日は案外お歸りが早うございましたのね！」

壽子はさう言つて、屈託なくニッコリとした。

いまは十九歳の人妻であり、四つになる男の子の若い母である壽子は、——あの論語入りの子守唄を文子のために歌つた つの幼い頃からすると、ずっと面長

になつて、どちらかといふと瘦せた方であつた。父や兄たちの方に似た體質なのであらう。色は、ここちもち青みをおびて、ちやうど夏みかんの花のやうに白かつた。さういへば、感じそのものが壽子は夏みかんの花のやうであつた。あでやかでも派手でもないが、ほのかに匂ふやうな品があつて、なにかしら人をひきつけるものがあつた。

つりこまれて、つい、自分もニッコリしながら、

「せつかくならば、もう少し早くからお出かけになればようございしましたのね！」

と、何の氣もなく文子は言つたが、母の瀧子の方では、娘夫婦の不意のおとづれを喜びながらも、時刻が時刻なので、すぐ一方では氣を廻して、

「それはようおいでたのう、篤太郎さん。したが、お壽さん、もしや何か……」  
と不安氣に聞きかけると、

「いえ、いえ、ほんとに何にも……ただ急に皆さまのお顔も見たくなりましたので、お父さま（小田村）が寅伯父さま（松陰）に何か藝のことでお話があるといふのを、さいはひにね！ 篤と二人でお供しましたの」

壽子は、こともなげに笑つて答へ、

「ぢや、篤太さん、お祖母ちやまや叔母ちやまには、あとでゆつくりお話を聞かしていただくとして、私たちもお祖父ちやまや伯父ちやまがたに御挨拶してまゐりませう」

と、子供の手をひいて、茶の間を出て行つた。

しかし、文子がまだ母や嫂とお茶を出す支度をしてゐるところに、まもなく壽子は戻つて来て、

「お母さま、ちよつと、お父さまが……」

と、瀧子に目くばせをし、

「さあ、篤太さん、あなたはしばらくお文叔母ちやまと……」

と子供を文子の方におしやつて、自分はずぐにまた出て行つた。

あとを追つて母が出てゆく。さあ、と文子は幼い甥に両手をさし伸べる。お茶を出しには嫂が立つた。

父の居間には――

父と梅太郎と小田村伊之助とが、火鉢を中にして鼎座してゐた。

そこも八疊敷であつたが、つぎの八疊とのさかひの襖が、その時しづかに開いた。三人がふりむくと、壽子が敷居ぎはに両手をつき、うしろに母の瀧子が控へてゐた。

「おゝ、お母さま、まづ！」

と、すぐに小田村が少し身をひくやうにして、自分と梅太郎とのあひだに、片手で瀧子を招じた。

瀧子が示された位置よりは少し離れて、一禮して座につくと、まだ敷居ぎはに控へてゐた壽子が、夫の小田村に目向けて、

「わたくしは……？」

と、たづねた。

それに答へる前に、小田村は百合之助の方を見たので、

「よからう、お壽も聞いてゐなかつた」

と、百合之助が答へた。

壽子も座についた。が、そこへ龜子がお茶を出しに來たので、自分もそれを手つだひながら、

「嫂さまは……？」

と、母の方を見た。母よりさきに梅太郎が答へた。

「龜には、わしがあとで話さう。——しばらく誰もよこさないやうに。よいな？」

「はい。かしこまりました」

嫂は出て行つた。

そのあと、ちよつと沈黙がつづいた。

この部屋の次の間が客間で、もう一方の隣りが文子が居間にしてゐる六疊であつた。その客間と六疊とにかこまれる位置に、松陰の幽囚室があつた。だから、この父の居間と幽囚室とは對線角の位置にあつた。特別に大きな聲をしない限り、よしんば聲は聞えたにしても、話の内容までは、おたがひに通じなかつた。

いま、しかし、幽囚室からは何か議論をしてゐるらしい甲高い聲が聞えて來た。それは確かに高杉晋作の聲であつた。それよりは低く時をり久坂玄瑞の聲もまぢつた。……松陰の聲は聞えなかつた。

「ときに、何のお話でござりませう？」

きはめて控へめに、瀧子が沈黙を破つた。

「うむ、實は……」

重々しく百合之助が答へた。

「實はのう、いま、伊之さんの方から話が出たんぢやが……」

「はう」

「文子のことぢやよ、お文の縁談ぢや」

「おや、それは……。はい、そして？」

「相手か」

「はう」

「それは唯こちらの話だけぢやよ、伊之さんもただ自分の思ひよりを述べただけぢやからな」

「はい、それはようござりますが、それで？」

「ほれ、あれぢやよ」

「はあ？」

瀧子は解しかねて、まぢまぢと夫の顔を見た。

ちやうどその頃、幽囚室の方では、晋作の聲のかはりに、玄瑞の「鉦を叩くやうな」聲が聞えてゐた。晋作との論戦に、どうやら勢ひをもちかへしたらしい。

はッと氣がついて、瀧子は思はず膝を乗り出すやうにした。いや、實際に少し膝を進めた。そしてデッと夫の顔を見つめたまゝ、聲を呑むやうにしてたづねた。……壽子はひとりニッコリした。

「では、お父さま！ あの人、あの人でござりますか」

「ウム、しかし、それは今もいふとほり、こちらだけの氣持ぢやぞ、先方は知らぬことぢや」

「はい。……はい。それはわかつてをりますが……」

「で、そこはどうぢや、異存があるか」

「ござりませぬ！ わたくしも、幾度かそれを考へたことがござりました。でござりますが……」

「ござりますが、何ぢや？」

「ただ、先方が……」

「だから、それは先方の意向を聞かなくちやわからん。いまはただ、こちらの氣持を話してゐるんぢや」

「はい。それではお父さまは、どうお考へでござりますか」

「わしか、わしにも異存はない。實をいふと、わしもお前とおなじやうに、これはひとりて幾度も考へてみたことなんぢや。ありていに言へば、わしはあの男が好きぢや」

「私も賛成でござります」と梅太郎が口をひらいた。

「すると、こちらは誰も同じ肚といふわけだのう？」

「ですが、かんぢんのお文さんは、どうでござりませうな？」

さう言つて、小田村は瀧子の方を見た。

「はい、それはもう、きつと私が……」

霜月だといふのに、瀧子の額はデットリと汗ばんでゐた。

個人の都合よりも「家國」の存續と繁榮を無上に重んじた時代にあつては、結婚も、當事者同志の都合や氣持よりも、家を代表する父なり、やがてその家をつぐべき兄なりの意志が、より強く重んぜられた。時には君父の命によつて、當事者同志が全然あづかり知らぬまに、婚約がとりきめられる場合も、少くはなかつた。それも度を越しては、幾多の弊害や悲劇をも生んだであらうが、家の代表者が眞に「家」の名と繁榮をはかる所以たりうるか否かに思ひをいたし、親身に當

事者の幸福を考へるかぎりにおいては、そこにはまた大きな道理があつた。

けれども、いま、母の瀧子が「きつと私が……」と確信ありげに答へたのは、さうした結婚觀を鵜呑みにして、「きつと私がイヤもオウもなく承知させる」といふ氣持では全然なかつた。

彼女は、娘の文子が——あの素直で鷹揚で無邪氣な末娘の文子が、いま現に年若い久坂玄瑞に思ひをよせてゐようなどとは考へなかつた。けれども、いま、母の口から、この結婚の幸福なる所以を説けば——いや、それを説くまでもなく、單に父や兄や母が賛成であることを告げただけでも、一も二もなく文子はその氣になるであらう、と見ぬいてゐたのであつた。

「すると、問題は……」と梅太郎が父に言つた。「問題は、先方にどう切り出すかでございますが、どういふことになりませう？ やはり然るべき人に仲に立つてもらひまして……」

「いや、それはあとでよい、こんどの場合、わしは世間の例と逆に行きたい」

「といはれすと……？」

「直接にのう、話してみるんぢや、わしが」

「えッ、お父さまが……？」

「わしがぢや、わしはお文の父親ぢやが、同時に相手の父親にもなつたつもりで、ぶちまけてみるつもりぢや」

「なるほど」

「しかし、どうぢやらう？」

「至極でございますな」

小田村が最初に答へ、つづいて一同が賛成した。

「しかし、それは、いつでござります、お父さま？」

「今日ぢや、今夜ぢや」

「えッ」

「梅、そちは小田村と一しよに寅二の部屋に行つて、しばらく玄瑞君をこちらへよこしてくれ。それから、おかゝさまもお壽も、如才はあるまいが、お文にはまだ……」

「はい、まだ何も話しはいたしませぬ」

百合之助を一人そこに残して、梅太郎と小田村は幽囚室に、母と壽子は茶の間へ、座をはづした。この場では一語も發言しなかつた壽子は、立ちしなに會釋をして父の方に微笑を送つた。ふだんは無口で控へめすぎる父の、見せるべき時には見せる斷々乎たる態度に對する、信頼と感謝の微笑であつた。

玄瑞と晋作は、つれ立つて杉家を出た。

かなり夜は更けてゐた。空の中程に十日近くの月が、白々と冴えた光を放つてゐた。

村は寢しづまつて、二人の下駄の音が、不氣味に響きわたつた。

瘦せた晋作は、ぶるんと身をふるはせたが、すぐ持前の元氣のよい聲で、

「のう、久坂」

と、さつきから黙りこくつてゐる連れに話しかけた。

「さつきの論戦のつづきぢやがのう、それ、おんしの王を尊び夷を攘ふの論ぢや、王を尊ぶは固より異論のあらうはずは誰にもない、夷を攘ふも、問題はそれを攘ふ根據ぢやが、それも一應よしとせう、だがぢや、——おい、どうした？」

晋作は、ふと口をつぐんで、しげしげと玄瑞の横顔を見つめた。

玄瑞は、うつむきかげんに、もくもくと歩いてゐた。ふさぎこんでゐる様子が見えた。



「おんし、なにを考へとらんぢや？」

「うむ、いや……。べつに何も考へてはをらんがのう」

「はつきりせい、さういふ調子ぢや王を尊ぶも夷を攘ふもないぞ」

「うむ」

「ちえッ、なつちよらん！」

晋作は舌を鳴らしたが、しかし、それ以上は彼も追究しなかつた。しばらく黙りこんだまゝ、肩を並べて歩いた。が、やがてまた晋作が口をひらいた。

「のう、久坂、おんし、さつき大先生のところに呼ばれたやうぢやの、なんぞ變つた話でもあつたのか」

「……」

玄瑞は、ちよつと返事に迷つた。かういふことを、いつたい、他人にうちあけてよいものか、どうか、と考へた。かういふことを自分ひとりで處理できないこ

と恥ぢる、といふ氣持ではない。それも多少ないではなかつたが、それよりも、この問題を他人にうちあけることによつて、もう自分の答が當然どちらかへ決定さるべきだと見たので、それを恐れたのである。それも右か左かのどちらへでもといふのではなく、おのづと方向も一方にきまるわけだ。たとひ高杉晋作が口の堅い男にせよ、自分がこの縁談を辭退すれば、杉家の娘の一人は、少くも二人の男に對して、氣まりのわるい思ひをするだらう。さういふことはおたがひ人間同志の思ひやりとして、避けられるものならば避けるべきだ。と玄瑞は考へた。だから、この縁談に自分が氣が進んでゐない以上、あくまで自分ひとりの胸につつんでおくべきだと思つた。

「のう、久坂」

晋作がつづけた。いままでの調子とは變つた誠實みのあふれた聲であつた。

「もしか先生のお身の上に関したお話ぢやなかつたのか」

「それだつたら君にもお話があるはずぢや」

「それはさうだが、——しかし、君の方が早く出入りをしてをるからな、あそこには」

「いや、そんな話ぢやない」

と答へて、玄瑞は、ここまで話したからには、あとを誤問化すわけには行かぬと思つた。

玄瑞は、晋作の人物を知つてゐた。おほよそ、この男ぐらゐ、表にあらはれるものと實際とが、うらはらになつてゐる人間は少い。軽率のやうに見えてゐて、その實、慎重だつた。粗放のやうに見えてゐて、頭は緻密だつた。師友にも冷淡のやうに振舞ふが、人情は厚かつた。玄瑞は、彼と火花を散らして競争したり、反撥しあつたりしながら、彼を敬愛し、信じてゐた。

玄瑞のさつきの考へは一瞬に變つた。

「實はのう、高杉、君だから話すんぢやが……」

「おれだから話すのか、よし、そのつもりで聞かう。——何だ？」

「實は杉の大先生からのう、意外なお話があつたんぢや。といふのが、ほれ、あの先生のお姉さんな、まだ家にをられる——」

「お文さんか」

「うむ。そのお文さんをのう、もらつてくれと言はれるんぢや、おれの嫁に」

「なに、お文さんを君の……？ なるほど、そいつあ……。フム、フム、それで？」

「それで實は困つてゐるんぢや」

「しかし、困ることはないぢやないか」

晋作は自分の方から足をゆるめてゐたが、この時またもとの速さにもどつて、こともなげに答へた。

「ぢや、高杉、君ならどうする？」

「およそ久坂らしくもない愚問だのう、よいか、もらつてくれと言はれたのは、おんして、おれではないぞ」

「だから假にぢや、假に君が……」

「いや、おれは假定の上に立つて物を考へることはせん。——が、まア、いへといふなら言はう。おれだつたらう、さういふ場合、好きだつたらもらふ、嫌ひだつたら、ことはる」

「きまりきつたことをいふな」

「ぢや、なぜ、おんしや、そのきまりきつたことに迷ふんぢや？」

「うむ、ぢや、話さう。おれがのう、高杉、去年はじめて先生を訪問した時、偶

然とりつきに出られたのが、お文さんぢや」

「うむ、なるほど、で、その時おんしどう思つた？ 最初の感じは？ 案外こいつは大切だぞ、この場合」

「その時おれはいゝ嬢さまだと思ふた、おとなしくて優しくて、さすがに松陰先生の妹さんだと思ふた」

「おい、文句はないぢやないか」

「さう先まほりをするな。——なあ、高杉、君には妹があるな？」

「うん、男の兄弟はゐないが、女郎は二人をる」

「で、どんな氣がするかのう、その妹といふものは？ さだめしよいものぢやらう？」

「なにがよいものか、うるさいばかりぢや」

「それは貴公が暖い家庭といふもの慣れきつてゐるから、さういふことが言へる

んぢや。そこにゆくと、このおれは、なにしろ、十五の年から、ひとりぼつちぢやからのう。家庭といふものに餓えてゐるんぢや。——のう、高杉、いまだから言ふが、おれは最初のうち松陰先生に對して、大いに尊敬もしたが、同時に心のどこかには何かかう反撥する氣持もあつたんぢや。いまは違ふがのう。——ところが、あそこの家には最初ツから文句なしにひきつけられてゐたんぢや、あの家庭の空氣といふか何といふか：靜かであつて、いつも暖い氣持の流れてゐる、あれぢや。——で、おれはさういふ家の一人としてお文さんも嫌ひではなかつたんぢや。——だから、夫婦になるなんてことは、夢にも考へたことがないんぢや」

「ぢや、どうだ、玄瑞、いつそ、おんしの好きな、さういふ家庭を、ひとつお文さんとつくのたら、——さういふ氣にはならぬか？」

「だがのう、晋作、おれたち、おたがひに明日の知れぬ身だといふことを忘れてはならぬぞ。いつ天下のために一命を投げ出さんけりやならんか、わからぬ體ぢ

や。さういふ人間が今から妻だの子だの……」

「しかし、それはかうも考へられるぞ。おんしにせよ、おれにせよ、たしかに何時なんどき天下のために一命を投げ出さんけりやならんかわからぬ體ぢや。だから早く家庭をととのへておかなげやならんぢや。妻子がゐては、いざといふ場合の足手まといになる、さういふ考へ方もある。しかし大丈夫といふものは、う、久坂、さういふ苦難には、うち克つて進むんぢや。それよりは、いざといふ場合のために、家をととのへ、子孫を遺す工夫をしておくんぢや。——どうだ、さうぢやらうが？」

自分自身はまだ結婚を三年後に控へてゐた高杉晋作は、この時さう言つて、月下の村道に大見得を切つた。しかし、玄瑞は、晋作の言にも道理ありと見た。彼はふと足を止めて、空を仰いだ。月を見た。一瞬、なんとといふことはなしに悲壯な感慨が湧いた。だが、彼はすぐそれを振りはらふやうに首を振つて、それから

晋作に言つた。

「のう、高杉、いまの話、絶対に人には話してくれぬなよ、おれのためにぢやない、先生のお家に対して悪いからだ」

「なにをいふか、玄瑞！ おれはまだ他人が女房をもらふ話をふれてまはらけやならんほど、話の種にはことかいちやをらんぞ」

「いや、こいつあ悪かつた！」

二人の若者は、高らかな笑ひを唐人山とうじんやまの彼方にこだまさせながら、深夜の道を歸つて行つた。

それから數日、玄瑞は、杉家にも塾舎にも姿を見せなかつた。

晋作も玄瑞がどこへ行つたかは知らなかつた。

當時、玄瑞は、父や兄たちとともに住んでゐた平安古本町の家をひきはらひ、とある寺院の一室を借りて、そこで自炊同様の生活をしてゐたので、晋作は、そ

の寺へも行つてみたが、そこにもゐなかつた。住持の話では、旅へでも出たのぢやあるまいかとのことだつた。

「尤も、なんの支度もなしに出て行かれたやうぢやから、どうせ遠いところでもござるまいがのう」

と、その住寺は言つた。

だが、案ずることはなかつた。數日すると、玄瑞は再び松下村塾に姿を見せた。そして、ふだんと何の變りもない様子で、百合之助の居間を訪ふた。

ひそかに思ひあぐねてゐた彼は、このあひだに、唯ひとりの血縁の伯父である大谷忠兵衛を、生雲なぐものその家に訪ふてゐたのであつた。

玄瑞の母、富子は、中井氏の女といふことになつてゐたが、それは瀧子や吉田久満子の場合と同様に、家格のつりあひ上の名儀だけのもので、實際は、生雲なぐもの大庄屋―大谷忠兵衛門の娘であつた。そして忠兵衛は、その兄であつた。

玄瑞から相談を受けた忠兵衛は、

「それは願ふでもない話ぢやないかの」

と、かなり乗氣になつて答へた。

「なんせ、久坂家に生き残つてゐるのは、あとにもさきにも、おんし一人ぢやで  
のう、わしも賛成ぢや、おんしが早く身を固めることは。——それに松陰先生のお  
妹なら、きつと立派なお娘御ぢやらう、また、杉さまと久坂なら身分も似合ひ  
のところぢやからのう。もらふたがよい、もらうたがよい」

文子は、自分の居間にあててゐる六疊の間で、ひとり羽子板にきりつけをして  
ゐた。

きりつけといふのは、たとへば、いま文子がしてゐるやうに、羽子板などに布

を貼りつけて、繪や模様をつける手藝で、この時代の娘がよくやつた手藝の一つ  
だつた。

文子は、それを正月までに仕上げ、梅太郎の娘の豊子へお年玉にするつもり  
であつた。豊子はまだ自分で羽根をつけるやうな年ではなかつたが、きつと、持  
つて喜ぶだらうと思つた。

そこへ母の澁子が入つて来て、

「おやおや、えらうヒツソリしと思ふたら、ええものが出来よるのう」

などと笑ひながら、そこに坐りこんで、とりとめもない世間話をはじめた。

たしかに、とりとめもない話であつた。だから文子も話に相槌を打ちながら、  
手藝をつづけた。けれども、話が飛びに飛んで、ひよつこりと——しかし實際に  
は、きはめて自然に、かんぢんな點に觸れて行つた時、文子の手は、たちまち、  
動かなくなつた。すつかり頂垂れてしまつて、白い襟首まで赤くしてゐた。

母は、一瞬、はッとした。千代も、壽子も、かうではなかつた、と思つた。すくなくも壽子の場合には、かうではなかつたやうだが……と思つた。いくらかあわてぎみに、なだめるやうに母は言ひ足した。

「だがのう、お文さん、これは何も今のことに今、どうかうといふ話ではありませんでのう。ただ、お父さまや兄さまや、それから母さまも……」

「いえ、お母さま！」

文子は思はず顔を上げて、母を見た。しかし、すぐにまた頂垂れて、しかも案外はつきりとした聲で答へた。

「わたくし、お父さまやお母さまや、兄さまが、行けとおつしやるのでしたら、あの、どこへでも……」

まもなく母は娘の部屋を出た。

娘は、そのあと、かなり長いあひだ、疊の一ヶ所をデツと見つめてゐたが、そ

のうちまた、羽子板を手にとつて、そんなに念を入れなくてもよささうにと思はれるほど、ゆつくり、ゆつくり、手藝をはじめた。

久坂玄瑞と杉文子の結婚式は、ささやかに杉家の座敷で挙げられた。

安政四年十二月五日。

玄瑞は十八歳、文子は十五歳であつた。

第十章  
劍



夢のやうな……といふ言葉は、あるひは、この頃の文子のために用意された言葉だつたかも知れない。

文子は、全く、ふはりと雲の上に浮いてゐるやうな氣持であつた。現實ごととは思へなかつた。楽しい長い夢をみてゐるやうであつた。そして、夢ならばさめるなと願つた。その願ひをゆるされるためにも、心から女の道を守り、力のかぎり「よい生き方」をしようと思つた。

この雛鳥のやうな若夫婦は、結婚後も杉家に同居して、文子の居間の六疊を、とりあへず新婚の巢とした。

若い妻は、若い夫を明倫館に送り出すと、毎日、母や嫂を助けて、あるひは教へられつつ、一生懸命、家事にいそしんだ。家事ひととほりは心得てゐるつもり

であつたが、さて人の妻となつてみると、實は知らないことの方が多すぎて、な  
んとも心細い氣持がした。

文子は、つつましい氣持になつて、それを母に聞き、嫂に聞き、女中にさへも  
教へを受けた。

また、結婚に際して、父や母や兄や姉や、それから叔母たちが、自分にあたへ  
てくれた戒めの言葉や忠告を思ひうかべ、それを靜かに頭の中に刻みつけようと  
した。

幽囚室で松陰にあたへられた教訓は、忘れようとしても忘れることが出来な  
かつた。——そして、その言葉は、つひに文子の一生を支配するものとさへなつ  
た。

玄瑞との結婚の話が本きまりとなつた日の午後であつた、文子は、母と一しよ  
に茶の間におて、縫物をしてゐたが、そこへ弟子の増野徳民が来て、ちよつと幽

囚室まで来るやうにとの松陰の言葉をつたへた。

行つてみると、そこには松陰が一人ゐた。

「お、お文！ そちは今なんぞ御用をしてゐるのか」

「いゝえ、べつに……」

「さう、ぢや、そこに坐るといゝ。話さう。……が、しかし、まづおめでたう！」

「はい。……」と頭はさげたが、さて、そのあと（ありがたうございます）と言  
つたものか、（おかげさまで……）と言つたものか、とつさの場合、ちよつとま  
ごつて——といふより、ありやうは氣まわりわるさ半分で、うつむいてゐると、  
松陰は珍らしく寛いだ調子で最初は話をはじめた。

「とにかく、よかつたのう。お父さまをはじめ皆さま御満足のやうぢやが、この  
兄も喜んでゐるぞ。——だがのう、お文、しつかりせいよ。久坂は、防長年少第  
一流の人物ぢや。天下の英才ぢや。正直な話、お前には過ぎた人物ぢやぞ」

「はい、それはもう……」

「はい、よい、よい、それを自覚してをれば、心配することもあるまい。勤むんぢや、その英才の妻たるにふさはしいやうにのう。みづから勵まし、みづから勤めれば、なんで出来ないことがあらう。出来んのぢやない、でかさうと努めないんぢや、多くの人がのう。婦道などといふものも、決して別にむつかしいものではない。ただ多くの人が爲さうと努めないのぢや。——のう、わかるか」

「はう」

「わしは知つてのとほり幽囚の身で、お父さまお母さまをはじめ、兄さまにも、そちたちにも、迷惑をかけ、難儀をかけるばかりで、そちの一生の慶びごとを聞いても、なにひとつ祝ふてやることも出来ぬ、まことに不甲斐ない兄ぢやが、ゆるしてくれよ。心では、せめてそちに、ああ、わたしは松陰の妹ぢや、と、それを誇らせるやうな人になりたいと念じてはゐるのぢやがのう」

松陰の聲はふるへた。文子は、いよいよ頂垂れて、それを聞いた。

「だがのう、お文、わしはここにお前のために、お前が一生、女として妻として心得ておくべき精神を書いておいた。わしのせめてもの寸志ぢや。あとでよう讀んでみる」

「はい。ありがたうござります」

「いろいろと書いておいたが、かんぢんな點は、お前が自分は久坂の妻であると、いふことを自覚することぢや、のう、久坂の妻ぢや。久坂ひとりの妻ぢや、貞婦は二夫に見えず。よいか」

「はう！」

はつきりと肯いて、兄の顔を見あげると、ちやうどその時、松陰も、ちーッと文子の顔を見すえてゐた。瞬間、ぎゅッと身がひきしまるやうなものをおぼえて、文子は、つと目をそらした。

「妻には誰もなれる、女ならばのう。しかし、よい妻になるには、それだけの心がけがなうてはならぬ。努めるのぢやのう」

「はう」

それから松陰は、堅くなつてゐる文子の氣持をとほぐさせようとして、文子の幼時の思ひ出ばなしなども持ち出し、時には文子を笑はせたり、頬を齧らめさせたりもした。そして最後に言つた。

「わしもお前も、よいお父さまお母さまを持つて、まことに仕合せなことぢや。お父さまお母さまの平素のお訓へをな、忘るなよ。それにわが杉家には、まことに立派な家風がある。それは第一に先祖を尊びたまふこと、第二には神明を崇めたまひ、第三には親族と睦しくしたまひ、第四には學問を好みたまひ、第五には田畠のことを親らしたまひ、勤勞を尊び、勤儉質素を重んじたまふこと。かういふことは、どこの家に移しても決して恥かしくないことぢや。——だがのう、お

文、かういふ立派な徳は、どこまでも身につけておかなくてはならぬが、その徳と、單なる習慣とを、ごつちやにすなよ、決してな。久坂には久坂の家やしきたりといふものがあらうからのう。それをお前が——いゝえ、杉の家ではさうは致しませぬ、かうでござります——などと、こつちのしきたりを押しつけようとする、それ、亭主どののにのう、さらはれるてや。はッはッは」

松陰は最後に膝をゆすつて笑つた。この兄が大聲立てて笑ふことなど、十五年も一しよに暮して來た文子にさへ、めつたにないことであつた。けれども、その笑ひにさへ、この兄の奥の深い愛情を感じて、文子は思はず涙ぐんだ。

一方、夫の玄瑞の方は、文子ほどには、結婚生活に酔ふことが出來なかつた。どうかすると、おれは早まり過ぎはしなかつたかといふやうな、悔ひに似た反省

が、チラと頭をかすめた。文子に不満だといふのではない。それならば、むしろ、自分は妻の選び方をまちがはなかつたといふ誇をさへ、ひそかにおぼえてゐた。

自分はまだ十八歳だといふ意識が頭を去らないのである。

「いつたい、貴様は今までに何をしたといふのだ？ 何にもしてゐないではないか。すべてはこれからなんだ。だのに、貴様、もう妻なぞもつて……」

さうした自分の内の聲が、彼を酔はしてくれないのである。

彼はよく高杉晋作の言葉を思ひ出した。あの深夜の村道で大見得を切つた時の晋作の言葉である。

「うむ、あいつ、さすがにうまいことを言ひをつた！」

彼は晋作の言葉のやうな考へ方によつて、この結婚に意義を持たせようと思つた。この理性に富む青年は、結婚生活にも何か自分の納得のゆく意義を見いださ

ないでは、それを喜ぶことが出来なかつた。そして、おれも大いに努力するが、妻にも修養をさせて、ひき上げてやらなくてはと心に期し、よくそれを文子に話もした。

玄瑞は、しかし、豊かな愛情の持主でもあつた。自分の若い妻が、ただただ、夫の意にそむくまいと痛々しい程によく努めてゐるのを、いぢらしく思ひ、報ひなくてはならぬと思つてゐた。

それに、杉氏の暖い家庭の空氣が、すっかり彼を幸福にした。幾年ぶりに味はう家庭の暖さの中に彼は浸りきつてゐた。

かうして彼等は初めての新年を迎へた。

安政五年の新年ほど、杉家にとつて、平和と幸福に満たされたものはなかつた。

松陰と玄瑞は、いまは師弟であり、兄弟であり、最も親しい友であつた。二人

は松の内の一日を幽囚室で語りあひ、韻をわけて新年短古三十首を作つた。  
時をり文子も初々しい新妻姿をそこに見せて、二人のために茶菓を運んだり、  
炭火をつぎ足したりした。

春香十分に宣ぶ

人だれか豪傑の徒

能く天下の先たらん

この身さいはひ未だ死せず

例によつて新年を迎ふ

これがその二人で、おのおの韻をわけて歌つた短古三十首の、最初の一齣である。

幽囚室の外には、冬とも思へぬ、なごやかな陽が射して、小鳥の聲が聞えてゐた。幽囚室の内も外も今は確かに静かであつた。  
しばらく彼等の歌ふのを聞かう。

奔波日に以て劇し

わが心亂れて麻の如し

收拾す舌三寸

讀破す書五車

英雄古より然り

一龍また一蛇

龍蛇時に伸屈すれども

わが心つひに忘れず

狐狸且つ威を逞うす

何ぞ況や豺と狼と

侍憲國士を獲

爾、士の望に負くなかれ

ここまで詠んで来て、松陰は、ちよつと筆をおき、詩稿を黙つて玄瑞の方に向けた。玄瑞は黙讀した。ゆつくりと二度ほど肯いて、ちつと松陰の顔を見つめた。松陰もまた、喰ひ入るやうに若い義弟の顔を見つめて、

「たのむぞ」

と、ひとこと、かすれたやうな低い聲ではあつたが、力をこめて言つた。

(後漢の侍童黃憲は牛醫の子であつたが、年少より秀才のはまれが高かつた。醫

生久坂よ、君もすでに防長年少第一流の英才ではないか。のう、たのむぞ、祖國の運命を擔ふて起てよ!)と松陰は言つたのである。

玄瑞は深く肯いた。

幽囚室の内も外も今は静かであつた。けれども、二人は、その静けさの中に、吹きすすぶ時勢の狂亂怒濤を、ひしひしと感じてゐたのである。

玄瑞もやがて筆をおいた。

「先生! 申し遅れましたが、僕の江戸遊學ですな」

「うむ、その後どうなつた、あれは? 僕も案じてゐたのだが……」

「はあ、おかげさまで、どうやら内定したやうです。實は今朝がた中村に逢つた時に聞いたのですが」

「さうか、それはよかつた!」

松陰は思はず膝を叩いた。それから再び筆をとつて、さらさらと書きつけて、

玄瑞に示した。

幽囚出づべからず

坐して遠人山に對す

山鳥われを慰むるに似たり

來りて庭柳の間に鳴く

東風まさに凍を解くも

解きがたし憂愁の顔

玄瑞は、こんどは低く聲に出して、それを讀んだ。兩手の拳を膝の上に固め、まつすぐに松陰の顔を見つめて、ふるふるやうな聲で言つた。

「先生！ 僕が必ず先生の憂愁のお顔を……」

「お、どうか解いてくれ、君には自由な足があるのだ」

「はい、誓つて、……誓つて！」

玄瑞は更に拳に力をこめた。

「だが、その東遊のこと、お文には……？」

「はあ、話しました。案じてゐたのですが、よくわかつてくれました、あべこべに勵まされたやうな始末でした」

「うむ、さうだらう」

松陰は、わが意を得たりといふやうに、ニタリと笑つた。

時勢の嵐は、青年を暖い巢におちつかせておかなかつたのである。玄瑞は、かねて學業稽古のため三年間の江戸遊學を藩府に願ひ出てゐたが、それが近く許されさうな形勢にあつたのであつた。



夫から江戸遊學の志を打ちあけられた時、文子は、あやうく胸が詰りさうであつた。

けれども、それをおさへることこそ、武士の妻であると思つて、すぐに賛成し、「どうぞ、しつかり御修業あそばして、無事にお歸りになられますやうに……」と、こころから勵ました。

文子は、その日から、ぼつぼつと玄瑞の旅立の支度をはじめた。支度をしながらも、これからの三年間のことを思つた。二人である時には、一日が一瞬のやうに早く去つて行つたが、これからの三年は、まるで三十年もの長さに思へた。ふとしたら、あの人はもう、ここには歸つて來ないのではあるまいか、などと、いはれないことまで時には考へて、うつかり涙ぐうとしたりした。その都度、

「あゝ、だめ、だめ、私はまだ駄目……」

と、自分を叱つたり、

「お留守居をするのは私だけではない、お千代姉さまだつて、お壽姉さまだつて、それから、ほとんどみななりの武士の妻が……」

と考へて、自分を勵ましたりした。

玄瑞は、いよいよ二月二十六日に出發することになつたが、その前の日の夕方、文子は、いまままで自分が使つてゐた手鏡が、さいはひ、男が持つてもをかしくないやうな、色や形だつたので、

「あなた、これをお持ちになつたら如何でせう、おひげなどおあたりになる時に……？」

と聞くと、

「それはありがたいが、そちらが困りはしないかな」

「いゝえ、私は大きいのもありますから……」

「ぢや、もらつて行くかな。もらつて行つて、ヒゲを剃るたびにお文さんのことを思ひ出すとしよう」

「まア……」

文子は、ちよつと玄瑞を睨むやうにして、嬉しさうに笑つた。

「僕もな、あちらへ行つたら、つとめて便りをするつもりだが、ひとつ、こちらからも、時をり萩の様子を聞かしてほしいのう」

「ええ、それはもう、きつと……」

「歌なんぞ出来たら、それも忘れずに入れてのう」

「さあ、それは……」

「さあ……は、チト心ぼそいね！」

「だつて……」

「いや、ほんとうだ、上手下手は問題ぢやない、歌といふものは心の眞を詠むものだからのう、僕はお文さんとかうして相對で話をしてゐるつもりで、拜見するからな、きつと忘れないやうに……。そのかはり僕の方も、歌でも詩でも出来たら、きつと送る」

「ええ、きつと見せて下さいませね。どんなにかお待ちしてをります」

「いや、それは駄目ぢや。まづ、そちらが送ると約束しない以上」

「まア、意地のわるいことをおつしやつて……」

「はてのう、意地わるはどつちが先だつたかな」

「まあ、ほんとに強いことばかりおつしやつて！ ようござります、そんなら夏が来ても夏のお送りして上げませぬから……」

「やあ、そいつは困つたのう。……ぢや、この夏、わしは裕の着物に裕の羽織を着て江戸の町を歩くか！」

玄瑞がそこまで言つた時には、つい文子も笑つてしまつたが、調子に乗つて、「それもよいてや、わしやもともと天下の孤兒ぢやで、それがわしには分相ぶんさう應おとこたへ……」

と言ひかけると、みるみる文子の大きな目に涙があふれ、とうとう、ぶいと顔をそむけて、袂を目にあてた。

「ラッ、どうなされた？」

荷の中に入れる筆や紙をそろへてゐた玄瑞は、驚いて、その手を止めたが、すぐに、

「なんだ、冗談を眞まことにうけて、ばかな……」

と、小さい聲で叱つた。

笑つたり、泣いたり、叱つたり……。この若い夫婦は、いよいよ明日の早朝にはお別れだといふ日になつて、はじめて若い夫婦らしい愚かに甘い情景をゑがき

出した。

もつとかんぢんな話が、どちらにもあるはずであつたが、それが口に出て來ないのである。それにもう時間もなかつた。夜に入ると、兒玉、小田村、久保、そのほかの親戚の人々や、高杉晋作はじめ友人たちが、おとづれて來て、玄瑞のために壯行の宴がはじまつたからである。

その席上には、もちろん、文子も顔を出した。そして絶えずニコニコと、しかも控へめがちに、酒間の世話をした。

そのかはりは、宴が果てると、母や嫂とともに、ざつと後始末をして、すぐに自分たちの居間にひきあげた。

しかし、玄瑞はそこにゐなかつた。高杉たちを途中まで送つて行つたのである。

文子は、力なくそこに坐つて、空虚な部屋の中を見まはした。ひとりでに溜息

が出た。まるで修業の出来てゐない自分が、いつそ、なさけなく思はれた。

文子は、ふと思ひついて、箆笥から懐劍をとり出した。十三歳の初夏の夕べ、一生の守り刀にせよと父に授けられた懐劍であつた。

ひろん、抜きはしなかつたが、右手に柄を、左手に鞘を、しつかりと持つて、握りしめてみた。

せめて劍の感觸に、自分が武士の妻であることを、自分自身に思ひ知らせようとしたのであつた。

玄瑞は出て行つた。

時代の嵐吹きすさぶ江戸へ、京都へ……。

さて、われわれは、十六歳の初々しい新妻には、まだ新婚の夢をみさしておいて、ここでまた數年を飛越すことにしよう。

そのあひだに、時代は、安政から、更に、萬延、文久、元治、と移つて行つて、久坂玄瑞も既に二十五歳の若侍となつた。いな、彼はもう、ただの若侍ではない、彼は京都派遣長州軍の一部隊長であつた。

彼の武者ぶりを見よう。

第十一章  
鏡

元治元年六月二十三日、夜。——いまの時刻の九時頃。  
大小十餘艘の船が一行に、しづかに天満橋をくぐつて、大淀川を溯江してゐた。

三百人の長州兵を乗せた船隊であつた。

その中の一艘に、久坂玄瑞は、ともの方に坐つて、ちつと淀の黒い流れを見つめてゐた。

とくに櫻の宮を過ぎ、やがて毛馬<sup>けま</sup>へ出ると、いよいよ淀川らしい風景を見せて来たが、その時分になると、どの船からも、元氣のよい詩吟や、はづんだ談笑の聲が聞えて来た。

ただ、玄瑞だけが、いつまでも黙々と川の面を見つめてゐた。

彼はもう昔の坊主あたまではなく、黒髪つやつやと、りりしい若侍姿であつた。しかし彼はもう平の若侍ではなく、この一軍の總督であり、最高の指揮者であつた。しづかに今後の方途を案じてゐるのである。

「——が、大綱は既に決してゐる。こまかいことは上陸後、その場の情勢で臨機應變に處置するほかはない。いまはただ、この船が首尾よく山崎へ着くことを祈るばかりだ。——ウム、今夜はもう考へまい」

彼はさう心につぶやき、ひとり背いて、ごろりと船に横になつた。片肘で頬杖をつき、しづかに空を仰いだ。空には一ぱい星が出てゐた。

「ウム、自然は悠遠ぢやのう」

これまた、ひとり心につぶやいて、彼は兩眼を閉ぢた。すると、いまは今後のことよりも、目まぐるしく去つて行つた、この六年あまりの過ぎこし方が、おのづとつぎつぎに思ひ出されて來た。

まつさきに思ひ出されることは、何といつても、師であり義兄である吉田松陰の刑死のことであつた。

井伊直弼を大老とする幕府の政治に、憤りを發した松陰は、幽囚室の中に起ちあがつて、老中間部詮勝の暗殺を策したが、幕府への開えを恐れた藩政府は、つひに松陰を再び野山の獄に投じた。安政五年の十二月二十六日であつた。

老中暗殺策に破れた松陰は、こんどは獄中において、伏見要駕策なるものを計畫した。參勤交代で江戸に上る藩主毛利敬親を伏見に迎へて、勳皇の實行運動を策さうといふのである。

その頃は玄瑞も萩に歸つてゐて、一つには松陰の身を案じ、一つには策そのものの危険性を恐れて、松陰の計畫に反對した。玄瑞ばかりではなく、松陰の門下は殆んど全部これに反對であつた。ただ、入江九一と、その弟の野村和作の二人だけが、師に従はうとした。松陰は憂憤やるかたなく、愛する玄瑞に絶交を申

し送つた。玄瑞だけではなかつた。高杉晋作も、小田村伊之助も、久保清太郎も、桂小五郎（木戸孝允）も、この時ごとく絶交状を叩きつけられた。さうされても彼等は、ただただ、松陰の身の安全をのみ祈つた。いづれは皇國のために一命を投げだしてもらふ時が来るにしても、いまはその時期でないと思つた。

策としては、さうした僕等の態度もまちがつてはゐなかつた。——が、精神は如何？」

玄瑞は目をつむつたまま、ひとり考へる。

「あの純一無雜ただ一筋に皇國のことをのみ思つて、わが身を顧みぬ先生の、あの崇高な精神に比べて、僕等は……」

正直な玄瑞は、さう考へて来て、なにか苦いものをなめるやうな思ひがした。「それも先生が無事でをはさるれば、また別だが……」

安政の大獄が天下に張りめぐらした網の目は、つひに遠い萩の獄中にある松陰をも見のがしはしなかつた。

松陰は、つひに江戸に檻送されることになつた。安政六年五月二十五日であつた。

その時は玄瑞も、義兄弟の小田村伊之助とともに、自分を忘れて師のためにつくした。

「それは先生も満足されたであらうし、おれとしても遺憾はない」  
だが、松陰は、その年の十月二十七日、江戸の獄中に斬られた。

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも留めおかまし大和魂

この歌を書出しにして死の直前二日に認められた松陰の「留魂録」を読んだ時、玄瑞や晋作をはじめ松門の全員が、いかばかり號泣し、感激し、發奮したところか。……



玄瑞は、くるりと船の上に取りかまひ、膝の上に両手をつき、しづかに口のう  
ちで詩を吟じた。

「われいま國のために死す、死して君親にそむかず、悠々たり天地のこと、鑑照  
は明神にあり。……」

いま斬られようとする松陰が、刑場に赴く時に、悠々と三度び吟じた辭世の詩  
であつた。

玄瑞も口のうちに三度それを吟じて、かッと兩眼を見ひらいた。

船は行く。星夜の淀川を溯つてゆく。

松陰の死は、松下村塾の青年たちの胸の中に、死靈のごとくとりついて、彼等  
を起ちあがらせた。

松陰こそは、最も崇高なる一粒の麥であつた。

高弟であり義弟である玄瑞は、門下をひきゐて立ちあがつた。それからの六年  
間、玄瑞の活躍は目ざましきかぎりであつた。

文久元年。——玄瑞二十二歳。九月二十二日。伏見に潜伏して、和宮御降嫁の  
輿を途中に邀せんとし、高杉晋作に謀つたが、これは實現しなかつた。

玄瑞は、和宮御降嫁は、幕府の詭謀として痛憤したのである。松陰の死とともに  
に、玄瑞の目標は一路「尊皇—攘夷—討幕」だつたのである。

その年の十二月には萩に歸つて、松下村塾生と、一燈錢申合いっとうせんあひを作つた。各自  
が寫本を毎月六十枚づつ持ちよつて、その寫本料を貯へて、同志の救済や勳皇運  
動の資にしようといふのである。

文久二年。二十三歳。

正月には、土佐藩士坂本龍馬が、武市半平太の紹介狀をたづさへて、玄瑞を萩

に訪ねて来た。

玄瑞は、中谷正亮とともに、龍馬と、大いに國事を談じ、龍馬が萩を去るに際して、武市に書面を託した。

「つひに諸侯たのむに足らず、公卿たのむに足らず、草莽の志士を糾合して義舉をはかるほかに策これなきことと、私ども同志は申しあはせました」

といふ意味の書面で、

「失敬ながら尊藩も弊藩も滅亡しても大義ならば苦しからず」

といふ言葉もあつた。

三月には、おなじく土佐藩士の吉村虎太郎が、亡命して萩に來、玄瑞を訪ねた。

この月、玄瑞は、馬關(下關)に赴き、薩摩藩の西郷吉之助(隆盛)、村田新八、岡藩の小河彌右衛門等と密議。やがて萩に歸つて、同志たちを説き、藩論を動か

すことに力めた。

四月には京都にゐた。この時に玄瑞は、はじめて眞木和泉と逢つた。眞木和泉は久留米藩の神主で、當時の最も大きな指導者的な勤皇家で、この時は、寺田屋の變の直後で、東洞院の薩摩藩邸に拘置されてゐたのであつた。

これ以後、玄瑞は眞木和泉と常に力をあはせた。

六月には、江戸から萩に歸る公武合體派の長井雅樂を、途中に要撃しようとして、玄瑞は、寺島忠三郎や伊藤俊輔(博文)等をひきゐて、大いに力めたが、果さず、藩邸に自首して謹慎の身となつた。

この謹慎中に、彼は「廻瀾條議」を著して、藩公父子に上り、更に「解腕痴言」を記したが、ともに藩公父子をはじめ藩論を動かすに足る大論策であつた。

九月、謹慎が解かれると、直ちに、薩・長・土の志士と會合して勅使を派し攘夷の勅命を幕府へ降させらるることを奏請した。

十一月には、江戸にゐた。玄瑞は、高杉晋作等と、横濱の各公使館を襲撃しようとしたが、藩世子長門守定廣に懇諭されて、中止したが、十二月には、つひに、高杉、志道開多（井上馨）、伊藤、そのほか、十一人の血盟者と、御殿山公使館を焼打した。

十七歳の折の「ハリス斬るべし」の一念は、二十三歳の冬、かういふ形をとつて、つひに實現された、と言へよう。

文久三年、二十四歳。

正月には京都に出て、公使館焼打のことを藩主に自首したが、七日間の「遠慮」で宥ゆるされた。

藩のためにも、天下のためにも、もはや玄瑞はなくてはならぬ人物だつたのである。

二月十一日、玄瑞は、寺島忠三郎、並びに肥後の轟武兵衛等と、鷹司關白邸に

至り、すみやかに攘夷の期限を定め、且つ言路をひらき、人材を挙げ、もつて時勢に應ずべきの議を上り、命を得ざれば死すとも退かずとなした。關白つひに諾す。

その月の十六日には、玄瑞は佐々木男也とともに主人役となつて、嵯峨天龍寺に、諸藩の志士——宮部鼎藏、平井收二郎、土方佐平、轟武兵衛等を招待して、「天皇親征として加茂石清水行幸」

の議を諮つた。

この席上には、世子長門守、國老益田右衛門介も加はつた。

◇三月四日 將軍家茂入京

◇三月十一日 車駕加茂社に行幸あり、攘夷を祈らせたまふ。

◇四月十一日 車駕石清水八幡に行幸あり、攘夷の成功を祈らせたまふ。

四月、世子長門守は、並々ならぬ玄瑞の勞を賞し、銀五枚を賜ふ。また、攘夷の期限いよいよ迫れるをもつて、萩に歸り、藩主忠正公に、京都の事情を報ずることを命じた。

この月、玄瑞は、京都邸御用掛となり、堂上方および外藩の人々と應接するた  
め、髪を蓄へることを許され、平士となつた。

また、この月、玄瑞は、敵情探索御用として、三十人をひきゐ、馬關に赴い  
た。

五月五日。

この日は、朝廷から發せられた攘夷期限の日であつた。

玄瑞は、壇之浦に進み、庚申丸に乗つて、拂曉、海峡を通過するアメリカの軍  
艦を砲撃した。

同月二十三日、長兵はフランス船を砲撃し、二十六日には、オランダ軍艦を砲  
撃した。

あくる二十七日には、玄瑞は馬關の戦況を報ずるために、いそぎ京都に向つ  
た。

この一年、玄瑞は、攘夷親征のために、一身一家を忘れ、文字どほり粉骨碎身  
した。

かくて八月十三日には、つひに大和行幸の公布となつた。攘夷の御親征が實現  
しようとしたのである。

あらゆる尊皇論者が、討幕論者が、欣喜し、雀躍した。

玄瑞は、その時、宮部鼎藏と、たがひにむづと手を握りあつて、たゞ泣いた。感  
激に胸がふさがつて、ものも言へなかつた。

その玄瑞は、いま、淀川をさかのぼる船の上に、腕ぐみをし、うつむいて、再

び兩眼を閉ぢた。目尻に皺がよるほど、かたく目を閉ぢた。いまたまた、不覺にも涙がにじみ出ようとしたからである。けれども、それは去年の八月十三日の感激の涙とは違つてゐた。

その喜びの日から、わづか五日後の、八月十八日、朝議は一變したのである。

長州藩は九門の警を解かれ、長州とことを共にした公卿は都を追はれ、藩公父子は勅勘の身となつた。

長州藩士は、いはずもかな、これと志を同じうする天下の志士、ことごとく血涙に咽んだ。

が、玄瑞は、その時は泣かなかつた。彼は今日ここまで長州藩をひきずつて來たのである。そして、その志は今や覆へらうとしてゐるのだ。いな、すでに覆へされたのである。

「長州一藩の興亡のみか、天下は再び公武合體派や佐幕派によつて動かされて行

くであらう。さうなつては——」

彼は再び起たなくてはならぬ。更に猛然と起ちあがらなくてはならぬ。

彼は起ちあがつた。

長州を京都から追つたのが、たとひ薩摩にせよ、會津にせよ、こと勅令によるからには、長州藩として、とるべき道は、一途に謹慎の意を表し、嘆願によるほかはなかつた。

嘆願の書は幾度か奉呈された。

玄瑞も、去年十一月、藩の老臣井原主計に隨ひ、遊撃隊壯士をひきゐて、上京した。奉勅始末の一書を朝廷に奉呈するためであつた。

しかし、彼等は入京を許されなかつた。

彼等は伏見にあつて、元治元年を迎へ、玄瑞は二十五歳となつた。三月、山口に歸る。——この頃、藩廳は萩から山口に移されてゐた。

藩には、この上は武力に訴へても、となす強硬派も多かつた。むしろ、その派が藩の空気を支配してゐた。

現に、玄瑞等が山口に歸つた時には、藩主は既に國司信濃に上阪を命じ、強硬派中の強硬派ともいふべき來島又兵衛が、その隨行を命じられてゐた。

來島又兵衛は、この時すでに五十前後、まッ正直で誠忠無比の男ではあつたが、猪のごとき老荒武者であつた。彼は二百數十人の兵をひきゐて上阪しようとしてゐた。

玄瑞は、さうした強硬手段に反對であつた。

「みだりに事を起してはならぬ、臣道を盡して、輿論を有利に導かなくてはならぬ」

彼はそれを説いた。

しかも、形勢は日々に長藩に不利であつた。

京畿には、長藩に同情するものも次第に多かつたが、しかし今は會津と薩摩が京畿を支配してゐた。

「われわれは、朝廷に對し奉つて、どうかういふのではない。會津や薩摩を非難するのだ。君側の奸を除いて、皇國を正しい方向へおし進めて行かうといふのだ」

これが彼等の主張するところであつた。

いはゆる池田屋騒動によつて、吉田稔麿をはじめ多數の長州藩士が、近藤勇等の新選組に襲はれ、關死せしめたことが、これらの強硬派を更に刺激した。

もはや壓へることが出来なかつた。

「ひとつの示威としては、あるひは良策かも知れぬ、兵をひきゐて上京すること

も……」

玄瑞もさう考へた。

彼はまた京都に出た。割策大いに努めた。彼は新選組に幾度その首を狙はれたか知れなかつた。来る日来る日が生と死の境の彷徨であつた。

彼はまた山口に歸つた。そこに塾居中の三條實美以下の公卿、並びに藩世子が、兵をひきゐて、京都に進發することを唱へた。高杉晋作は、玄瑞の真意がどこにあるにせよ、周囲が時のいきほひで、どうして事を誤らぬともかぎらぬと、それを憂へて反對した。

だが、つひに藩世子の進發の令は發せられた。

玄瑞は、眞木和泉、入江九一、寺島忠三郎等とともに、三田尻から船路によつて、大阪に向つた。

船上に幾度か軍議は練られた。

玄瑞等は大阪についた。そして、いまは淀川を溯つてゐる。……船が牧方（むかた）にかかる頃には、すでに朝であつた。

玄瑞は、いつか案じ疲れて、眠つてゐた。目がさめると、浴衣が一枚かけてあつた。入江九一の持物である。松陰の愛弟子の一人で、年も玄瑞よりは三つ上であつたが、ほんとに兄貴のやうに玄瑞に對して優しく親切な男であつた。そのくせ、公のことや學問のことになると、心から玄瑞に師事し兄事する敬虔な氣性の持主であつた。

「いゝ男だな、入江と寺島は……」

玄瑞は心のうちでさう呟きながら、浴衣を疊んだ。すると、ふつと妻の文子のことが思ひ出されて來た。

「あれにも氣苦勞をさせるな。……あれと結婚して今年はもう八年だが、そのあひだに、二人で一しよに暮したのは、さあ、せいせい二年ぐらゐのものかな？…

…が、マア、辛抱してくれ、おん身は松陰先生の妹だ。おたがひに松陰先生の死を無意義なものにしてはならぬ」

そこへ入江九一と寺島忠三郎がやつて来た。

「やあ、お早う、久坂君！」

「お早う、久坂さん、よく眠られたやうですな」

入江と寺島が、くちぐちにさう挨拶しながら、玄瑞の前に坐つた。入江は武骨な顔に、いつもニコニコと微笑を泛べてゐる。寺島は反對に、大がいの時が、いかめしい顔をくづさなう。

「入江君、これ、どうもありがたう」

玄瑞は、浴衣を入江に返しながら、二人のどちらにともなく話しかけた。

「さいはひ、今日もよい天気らしいな」

「そのかはり今日も暑さうですな」

「暑いのがまんするとして、かう風がなくちや困るのう。——なあ、久坂君、この分ぢや前島村に着くのは午すぎになりやしないかね？」

「しかし、前島村から山崎はすぐだからな、上陸したら、すぐ山崎に入り、本隊を天王山に集結し、遊軍をその附近に配置するのだ、旌旗をひるがへしてのう」

「おのづから京都を威壓する軍形ですな」

「さうだのう」と入江が勇み立つて、玄瑞より先に答へた。「もう來島又兵衛老人の遊撃隊と、福原越後さまの第一軍は、伏見に待機してゐるはずだし……」

「さうだ、山崎には……」と、こんどは寺島が言つた。「國司信濃どのの第二軍も到着する頃だ」

「益田國老さまの第三軍六百も今日明日には到着のはずだからのう、天王山に本營をおき、伏見、嵯峨、山崎、の三ヶ所に、主力を集中したら、こりやもう京都は三方から包圍されてしまふわけぢや」



二人が勇みきつてゐるのに對して、玄瑞は、ひどく浮かぬ顔をしてゐた。そして、半ばは自分に言ひ聞かせるやうな調子で、  
「京都を威壓するのはよい、しかし、それはあくまで單なる示威にとどまらなくてはいいぬ」

と、二人に言つた。

「示威！ のう、それ以上つき進んではならんのだ。……われわれは御所に向つて銃先を向ける心は毛頭ない」

「しかし、その御所のまはりには……」

「寺島君！ 君までがさういふことを言つてはいけぬッ」

「はッ、わかりました」

寺島忠三郎は、素直に頭をさげた。

「お早う、久坂さん！ おお、入江君も寺島君も、ここにゐられたか」

と眞本和泉がやつて來た。

容貌魁偉、威風おのづから四邊を壓する六尺に近い老人である。けれども、天下の志士たちから「今楠公」と綽名され、仰がれてゐる勳皇の長老である。他藩の人ではあるが、同志として指導者として、玄瑞とともに、この軍の總督であつた。

「お早うございます、先生！」

玄瑞も、入江も、寺島も、形を正して朝の挨拶をした。

「さあ、いよいよ今日は天王山ですな、久坂君！」

眞本和泉はさう言つて、ニッコリとした。

玄瑞は、山崎に着くと、さつそく河野三平なる變名によつて、關老稻葉長門守

を経て、さつそく嘆願書を呈した。

長州藩の苦しい立場を述べ、誠忠無比の藩公父子の冤罪をすすぎ、藩公父子、並びに三條以下六卿の勸勤をときたまはらんことを哀願した嘆願書である。

更に彼等は、同様の趣旨を、各藩および公卿の一部にも送つて、有利な輿論をつくらうと、必死の努力をした。

哀願ではあつたが、この言論戦の背後には、人心を衝動するに足る兵力を備へてゐた。

御所邊の騒動は一通りでなかつた。

廟議は連日ひらかれた。

公卿の多くは、毛利父子に対する同情もあり、目前に迫つた流血の慘事を恐れる心もあつて、毛利父子の入京を許さうといふに傾きかけてゐた。

だが、一橋慶喜の強硬論が一座を壓して、廟議は、つひに決定した。

「嘆願なら嘆願らしく、武装を解いて、神妙にその筋に申出でよ。嘆願を採用するか、せぬかは、長兵の撤兵してからのことである。まづ撤兵せよ」

この廟議の決定は、長州の京都邸にある留守居役―乃美織江に傳達された。

元治元年七月十八日であつた。

この日の午後二時、長藩の諸將は、男山に會して、石清水八幡宮の社務所に會議をひらいた。

進むか退くかを決定する最後の大會議であつた。

集まるものは、益田右衛門介、福原越後、國司信濃の國老以下、久坂玄瑞、入江九一、寺島忠三郎、眞木和泉、桂小五郎、來島又兵衛……そのほか二十餘名の錚々たる顔ぶれであつた。

福原越後が開會を宣するや、來島又兵衛は、まつさきに膝を進めて、「さて、おのおの方、進軍の用意は整うてをるか」

と、デロリと一同を凄い目つきで見まはした。  
誰も答へなかつた。

又兵衛は、みるみる怒氣を満面にあふらして、

「諸君!! いまや闕下に迫り、君側の奸を除くよりほかに道はないのでござるぞ。然るに諸君に躊躇の色あるは何事でござるか!」

と、荒々しく疊を叩きつけた。

「諸君! われわれの意思は、よろしいか、最初から君側の奸を除き、廟議を昨年八月十八日以前に挽回しようとするにある。こと成らば宿志を達し、成らねばたゞ一死あるのみでござる。いまさら、とやかく評議するにも及ばぬことぢや。評議するとすれば、それはたゞ進軍の手配ぢや。のう、この場におよんで異議あるものは一人もござるまら」

「さや」

しづかに口をひらいたものがあつた。玄瑞であつた。

「われわれの目的は、君侯御父子の無罪を述べ、三條卿以下の職を復して、攘夷親征の實行を期するにあります。君冤をすゝぐには、まづ願喚に嘆願を重ね……」

「いや嘆願は既に重ねて來たのぢや」

「しかし、みだりに禁闕を侵して、朝敵の名を蒙らば何となりませう? それはわれらの素志ではござりませぬ。よし又、いま軍を進めるにしても、われに未だ後援なく、進撃の準備全からず、必勝の計畫なきをもつて……」

「勝敗は論ぜぬ!」

「いや、論ぜねばなりませぬ! これで敗るれば、長州は朝敵の汚名を蒙りませうぞ。論ぜねばなりませぬ! が、さいはひ、若殿の來着されるも近いことゆえ、よろしく要所々々を守つて、御來着を待ち、その上で進撃するか否かを議すべしでござります」

「な、何だど？ 若殿の來着を待つて進撃するか否かを議する？ そ、さういふことが臣子の義として忍び得られることか！ よろしくその來着以前において、断然進撃すべきぢや」

「しかし、來島さん、いま進撃しては、われらに勝目はござりませぬぞ！」  
「卑怯者！」

又兵衛の満面には朱がそそがれた。彼はまっすぐに玄瑞を指さして大喝した。

「貴様は、だから醫者ぢや！ 醫者坊主や俗吏どもに戦争のことがわかるか。貴様等が京都に進むのが嫌なら、天王山に登つて、おれが會津肥後守の首をとつて歸るのを見物してをれッ」

又兵衛は疊を蹴つて、その場を去つた。

玄瑞は、さつと顔いろを變へた。

入江九一と寺島忠三郎は、左右から、しつかりと玄瑞の膝を壓へたが、彼等の

手も憤りにブルブルとふるへてゐた。

一座が水を打つたやうに静かであつた。

福原越後が、やがて、

「和泉どの、御意中は如何でござるな？」  
と、しづかに真木に問ふた。

「はい……御所に向つて兵を進めるは心苦しい次第ではござりますが、ことここに至つては止むを得ますまい。形は尊氏に似てをりますが、われらの心は楠公でござります。私は來島氏に同意でござります」

他藩の浪士たちもそれに同意した。

議は決した。

「この上は、おのおのの御説に従ひます」  
玄瑞も静かに答へた。

蛤御門の戦として史上に残る戦ひは、この翌日ついに火蓋を切られた。いさその戦況を寫すことは本書の目的ではない。

さすがに來島又兵衛の奮戦は目ざましく、彼は古武士の如く立派な戦死を遂げた。

久坂玄瑞の勇戦もそれに劣らなかつた。が、長州軍は敗れ、彼は傷いた。

玄瑞は自刃を決意した。入江と寺島が共に死なうと願つた。玄瑞は、「君が死ぬなら、おれも死ぬ」と言つて開かぬ入江に、

「それでは後事を託する人がない、生きるも死ぬるも等しく忠のためだ。生きてくれ、生きて、若殿に戦況をお傳へ申してくれ」

と泣いて頼み、入江もまた泣いて、玄瑞の命に従つた。——だが、實は入江も

敵兵にかこまれ、衆寡敵せず、むしろ、玄瑞よりさきに戦死した。玄瑞はそれを知らなかつた。眞木和泉が來て、ともに死なうとした時も、

「先生は天下の勤皇家のために残つて、再舉をお計り下さるやう」と願つた。

眞木も、玄瑞の苦衷を察して、一旦それに應じたが、彼も天王山へひきあげて、二十餘人の同志とともに切腹した。その中には宮部鼎藏の弟、春藏——かつての大助もゐた。

玄瑞は眞木の自刃も知らなかつた。

「さて、これでよし。では、ぼつぼつ行かうかのう、寺島君！」

彼は寺島忠三郎を頼みてニッコリとした。髪が亂れて額に垂れさがつてゐた。

彼は懷中をさぐつて、一面の手鏡をとり出した。六年前——最初の江戸遊學の前夜、妻の女子に贈られた手鏡であつた。その鏡に自分の血に染まつた顔を寫し

た。彼の目には、しかし、ニッコリと笑つてゐる女子の顔が寫つた。松陰の顔、父の顔、兄の顔、母の顔、瀧子の顔……。なつかしい人々の顔が、チラチラと目に泛んでは消えた。しかし、彼はかぶりを振つて、その幻想を追ひ、髪のを直した。

「寺島君！」

「はい、久坂さん！」

「松陰先生に御報告が出来るのう、それから宮部鼎藏にも逢へる！」

玄瑞と寺島は、ニッコリと背きあひ、鷹司關白邸の硝煙うづまく庭の中で腹かき切つて、二十五年の生涯を終へた。

第十二章 一つの生き方

玄瑞の戦死がつたへられた時、二十二歳の彼の未亡人は、もはや泣かなかつた。

八年のあひだの修養もさることながら、まはりの人々——父、母、兄、姉、嫂、姉嫁、叔父、叔母——さういふ人々の、暖い同情の目で見まもられてゐると、文子自身は、かへつて、

「おまへは久坂玄瑞の妻ではないか、吉田松陰の妹ではないか」と、自身の心の中に叫ぶものがあつて、泣くにも泣けぬ氣持であつた。

それに文子は多くの場合ひとりであることも出来なかつた。いつも誰かしら側に來て、なくさめ顔に話しかけるのであつた。そのくせ、誰も本人が求めてゐるやうな話題には、決して觸れなかつた。うつかり觸れて、このうへ文子を嘆かせ

ることは誰もしたくなかつたからである。いまさら改めて「武士の妻の覺悟」を説く必要もあるまい、と誰も考へてゐるやうであつた。

わづかに父の百合之助だけが、ひとこと、それに觸れた。

「あれもさうすることがお國のためぢやと思ふて、やつたことぢやからのう、お文」

文子がひとりになつて、思ふさま玄瑞の面影を忍ぶことが出来るのは、夜、ふしどに入つてからばかりであつた。この心の中の世界にだけは、だれも足を踏み入れることが出来なかつたし、ここだけは文子にとつて、いままなほ玄瑞と二人の楽しい殿堂であつた。

八年間の結婚生活、それも實際に二人で一しよに暮したのは、前後わづかに二年でしかなかつた。けれども、文子は、決してその短さを憾みとはしなかつた。短かつたかはりに、それは何と美しく満ちたりたものであつたらう。文子の頬に

は微笑さへ泛んで来る。

文子が玄瑞とともに暮したのは、去年（文久三年）の正月、それもわづかに數日でしかなかつたが、それが最後であつた。

その後も玄瑞は幾度か故郷の近くまでは歸つて來たものの、ある時は外艦の砲撃に、ある時は防長二州の興亡をかけての奔走に、席のあたたまる暇もなく、妻をかへりみることも出来なかつたのである。——そのかはり、彼はよく便りをよこした。どんなに忙しい時にでも、わづかの暇をぬすんでは、こまやかな便りをよこした。それには時折の想ひを述べた歌なども、よく添へられてあつた。

ふるさとの花さへ見ずに

豊浦の

新防人と我は來にけり

これは去年の五月、敵情探索隊の隊長としての玄瑞が、京都から下關に來て、



外艦を砲撃してゐた頃に、文子によせた歌の一つであつた。

「ふるさとの……」と、くちずさんでゐるうちに、いつか文子の頭の中には、樂しかつた去年の正月の思出がえがき出されて來た。

ある日、知人の家に年賀に行つた玄瑞が、夕方になつて歸つて來たので、文子が、いそいそと迎へて、

「お夕食はどうなされます？ まづ、お餅でもお焼きたせうか」

と、たづねた。夫が餅好きであることを知つてゐたからである。すると、玄瑞は、

「いや、いや、餅は……」

と笑ひながら、手と首とを一しよに振り、それから腹をたたいて見せて、

「いやといふほど食つて來た！ なんせ最初は自分の年の數だけと思ふてゐたんだが、向ふでも、こいつ大變な大食ひだと思つてとつたか、しきりと勤めるのでの

う、おちぎをするのも癪だと思ふて、食つた、食つた！ すくなくも三十は食つたのう」

「まあ……」

夫の袴をたたんでゐた文子は、とうとう、袂を口にあてて嘔き出してしまつた。

「しかし、さすがに腹が張つて來た。どりや少し腹こなしをしよう。そこの障子をあけてくれ。——寒いかの？」

「いえ、わたし……」

文子が縁側の障子をあげると、玄瑞は、そちらの方を向いて端座し、朗々と詩吟をはじめた。玄瑞は詩吟の名手で、萩の若い武士のあひだには、玄瑞流といふ詩吟が流行してゐるくらゐであつた。彼の例の「鉦をたたくやうな」朗々たる聲が、杉家の部屋々々にひびきわたると、そら、玄瑞をぢさまの詩吟がはじまつ

た！と言つて、小さい甥や姪たちが二人の部屋に集きて来た。  
すると、玄瑞は、その子供たちのために、こんどは自作の歌へ歌をうたひはじ  
めた。

一つとや、卑き身なれども武士は 皇御の箱ぢやな、これ箱ぢやな。  
二つとや、富士の御山はくづるとも、こころ岩金くださやせぬ、これ、くだ  
さやせぬ。

文久二年三月、玄瑞が「御番武士」と題して、自分等が組織してゐる御番隊員  
の尊皇心を鼓舞するために作ったものであつた。

甥や姪たちは、大よろこびで、手を打ちながら、いつか自分たちも聲をあはせ  
て歌つてゐた。

三つとや、御馬の口をとり直し、錦の御旗ひらめかせ、これ、ひらめかせ。  
いつのまにか母の瀧子もそこに來て、ニコニコと聞いてゐた。嫂も來た。しま

ひには父の百合之助までが、謹嚴な顔に微笑を泛べてゐた。

四つとや、世のよしあしは、ともかくも誠の道を踏むがよい、踏むがよい。

五つとや、生くも死ぬるも大君の……

若い夫婦の部屋は明るく陽氣であつた。

文子は、しかし、しづかに暗の中に目をあけた。玄瑞の妻はなかつた。歌の聲  
も今は聞えなかつた。すべては過ぎ去つたのた。

けれども、文子は、過ぎた日の早かつたことも、短かつたことも、決して憾み  
とはしなかつた。彼女の悲しみは、過ぎた日の短さではなくて、ただ、これから  
さきの月と日の長さにあつた。

「これからさき私は、いつたい、どう生きて行つたらよいのでせう？」

文子はさう言つて夫に聞きたかつた。教へてもらひたかつた。この未熟な若い  
妻を、親身に、なにくれとなく教へ導き助はつてくれた優しい夫……。玄瑞こ

それは、文子の杖であり、柱であり、凡てであつた。そして、凡ては失はれた。文子は生きるに堪へられなかつた。

文子は、玄瑞がゐない時には、いつも枕の下に懐劍を置いて寝たが、いま、彼女の頭の中では、その懐劍の鋭い刃先がキラキラと光つてゐた。

「お文さん、もう寝られたかのう？」

その時、襖の外に母の聲がした。

文子は、あわてて夜着の中に顔をうづめた。

瀧子がさげて来た行燈の灯が、頭の髪だけをのぞかせて、夜着に顔をうづめてゐる文子の、その黒髪を、つやつやと光らせた。

瀧子は、行燈をかたわらにおき、しづかに文子の枕もとに坐つた。彼女は、娘

が、まだ眠つてゐないことはよく知つてゐたが、しばらくは聲もかけず、うるんだ老の目で、娘の夜着の胸のあたりを、ちつと見つめてゐた。やがて手を伸ばして、そのところを、しづかに撫でた。

母の瀧子には、いま、文子が急に三つか四つの幼い子供にかへつてゐるかのやうな氣持がした。

文子は、七人の子供の中で、幼い時に最も母親に手数をかけない子供であつた。文子が生れた當時には、まだ二つ年上の艶子がゐて、その子が病弱だつたり、二つ違ひで弟の敏三郎が生れると、それが腫だつたりして、とかく母の苦勞はそちらに向けられがちであつたが、文子は生れつきらく、な子の上に、おとなしくて、素直で、かはいげのある子供だつたから、兄や姉や親戚の人たちまでが、うつりかはり抱いたり手をひいたりして、よく遊ばせにつれて行き、あまり母親の側におかなかつたのである。

けれども、母の思ひは、いま、その文子のことのみかかつてゐた。幼い時には、あまり添寝もしてやらなかつた文子であつたが、いまはさうしてやりたい氣持であつた。一しよに泣いてもやりたかつた。さうする方が、むしろ、娘にも、母にも、どれほどか氣持がらくだらうと思つた。

「けど、さうしてはならぬ」

瀧子は、まづ自分を叱つた。

「さうしてよければ、どこの母も妻も苦しみはせぬ！」

松陰が、いつ生きて再び歸れるとも知れぬ江戸の獄へ送られる時にも、更にまた、つひに刑死になつたとの知らせを受けた時にも、強く堪へて涙ひとつ見せずに来た母ではなかつたか。杉の一族ではないか。

この子も杉家の娘ならば、松陰が家を出る時に、自分たち妹に残してくれた歌を忘れてはゐまい。

心あれや人の母たる汝らよ

かからんことは武士のつね……

瀧子は、いま、その歌を唱名をとなへるかのやうに、心のうちで歌いたのち、夜着を撫でゐた手に力をこめて、

「お文さん」

と、優しく聲をかけた。

「眠れぬやうぢやつたら、いつとき、お話でもしようかのう？」

返事は聞えなかつたが、かすかに背いてゐるのが、髪の揺れてゐるのでわかつた。やがて自分で夜着をのけて、しづかに起きなほると、文子は、まともに母の顔を見た。しかし、つと母の膝に手をかけて、

「お母さま！」

と、切なげに呼んだかと思ふと、ふつと行燈の灯を消して、母の膝に顔を伏せ

た。

母も答へるかはりに、ひしと娘の肩を抱いた。暗の中に、すすり泣きの聲が聞えた。

いまは母も娘とともに泣いてゐた。けれども、瀧子は、しづかに娘の脊を撫でながら、いつたい、この娘の心をどう引き立てたものかと案じつづけてゐた。彼女の頭の中には、もう數年前、夫とともに、この文子や敏三郎をつれて、宮崎八幡宮にお参りしての歸り途に、夫が娘たちに話して聞かせてゐた「長州の月見」のことを思ひうかべてゐた。

藩祖毛利輝元が關ヶ原の戦に敗れて以來、この屈辱を如何にしてすすぐかといふのが、毛利全藩士の生きる目じるしであつた。主君のお役に立つべき人物とならう。臥薪嘗膽、もつて必ず再起を計らう。それが燃ゆるがごとき長州武士の念願であり、全精神であつた。

年頭の挨拶なども、毛利藩では、家臣は主君に對して「新年おめでたうござります」といふかはりに、「幕府追討は如何でござりませうや」と述べ、主君は「まだまだ」と答へるのを例とした。

この「まだまだ」を「今だ！」と答へる日のためにのみ、長州武士は生きてゐるのだ。

だから、ちやうど關ヶ原敗戦の日にあたる仲秋の名月の夜は、月見の宴のかはりに、昔を忍ぶ夜としたのである。この夜、藩士たちは、毛利家の守護神たる宮崎八幡宮に参り、先祖たちのこの日の無念を忍びながら、連歌、連詩、悲憤慷慨、もつて士氣を鼓舞することに努めるのである。

藩士がさうなら藩主の方でも、再起を期するために、たとへば「よい妻を迎へ、よい子孫を遺す」といふことを、一種の不文律とし家法として、代々それを心掛けて來た。

この「優れた人物は優れた母から」といふ主君の考へ方は、藩の全武士階級に  
つたはつて、どこの家庭でも子女の教育には特に意を用ひた。

敬神崇祖の念を深くもつこと

修養を怠らぬこと

出しゃばらぬこと

夫に對して絶対に従順で、夫を眞の武士にするために内助を怠らぬこと

主君の役に立つべき人物を作ること

これが武家の婦人の理想とされた。

女らしさを尊ぶのと同時に、深窓の女の弱々しさを嫌ひ、あくまで役に立つ婦  
人であることが望まれた。卑屈なことを如何なる悪徳よりも憎んだ。茶の湯、活  
花、そのほか、いはゆる「女のたしなみ」は、もとより重んじられたが、しか  
し、むしろ、これは第二義的なものと見、女もまた非常の時にそなへて、武藝の

たしなみあることが望まれた。女の寺子屋も多かつたが、そこでは読み書きとと  
もに武藝が授けられた。藩費倫館の東長屋では、女の雄刀の稽古があつた。

武士の家庭では、母は乳をあたへる時にも必ず子供を上座に寝かせた。母より  
も偉くなれよとの母の切なる希ひであり、慈愛であつた。

家庭の躰けは厳しかつた。男の子の教育が、すべて「われは武士なり」の自覺  
を持たせることに出發したやうに、女の子もまた「武士の妻なり、母なり」の自  
覺と誇の上に立つて導かれた。

すべてが非常の時に備へるためであつた。しかも、その時が來たのだ。

長い沈黙ののち、しづかに瀧子は口を切つた。

「のう、お文さん、玄瑞さんはお殿さまのために……」

さう言ひかけると、

「いえ、いえ、お母さま！」

意外にも文子が誇に満ちた高い調子で、それをさへぎつた。

「玄瑞は、ただお殿さまのおためだけではござりませぬ！ 天朝さまのおんために、お殿さまをお頭に戴いて……」

「お、さう、さう、ほんにさうであつたのう！」

いつか母の膝を離れて、そこに端然と坐つてゐた娘の手を、母は暗の中にさぐつた。

「ようお言ひぢやつた、よう……。ほんにのう！」

いまは母の方が暗の中に涙をこぼしてゐた。

關ヶ原敗戦の恨みも、一州一番の興亡も、いまは問ふところでなかつた。その憤怒も、鬨魂も、情熱も、生命すらも、すべてが今はただ、この皇國すまのくにをあるべき正しい姿におし進めるためにのみ、捧げつくさるべきであつた。

さうなる日のための捨石となつて、雄々しく若く散つて行つた人々に榮光あ

れ！

母も、娘も、いまはただ、さう祈るだけである。

「お母さま、もうおやすみなされませ、もう遅うござりますす」

いまは文子が、あべこべに母を慰めた。

（やつぱり私の娘であつた、杉の娘であつた！）と心に呟きながら、瀧子は、暗の中に行燈をさぐつた。

人情に厚い杉の一族は、だれ一人として文子のために同情を惜しむものはなかつた。だれもが心から慰め、勵まし、親切をつくしてくれた。とりわけ次の姉の壽子は、母の瀧子について、最もよく文子のために氣を遣つてくれた。

ともすれば一日中でも自分の部屋に閉ぢこもつてゐようとする文子を、壽子

は、よく誘ひ出して自分の家につれて行き、自分の手つだひなどさせた。

壽子は、このあまりにも若い未亡人の妹が、一途に亡き夫を慕ふて、ひっそりと暮してゐる姿を、美しくも思ひ、尊くも思ひ、いぢらしくも思つた。けれども、それだけではいけないと、ひそかに考へてゐた。

「もつと生きることに意義を見つけ出さなくては……」

たとひさういふ言葉は使はなかつたにしても、壽子の考へてゐるところは、たしかにさういふ氣持であつた。

「人は生命のあるかぎり生きてゐなくてはならないし、生きてゐるかぎりは役に立たなくてはならない。身のため、人のため、家のため、お國のため……」

それが壽子の考へ方であつた。さういふ考へ方を頭において、壽子は、文子に、どんだん自分の手つだひを頼んだ。それは文子を慰める道として、たしかに效目のある方法でもあつた。

文子は、この姉夫婦の生き方を珍らしく思ひ、ひそかに目を見はつてゐた。

壽子の夫、小田村伊之助（この頃は素太郎）は、小田村郎山らうざんや小田村藍田らんてんのやうな高名の學者を先祖にもつ由緒のある家柄ではあつたが、壽子が嫁いだ頃の小田村家は、まさに洗ふごとき赤貧の中にあつた。それを小田村と壽子は、扶けあひ、勵ましあつて、一步一步きづき上げて行くのと同時に、おたがひに「物」の世界よりは「心」の世界を重んじ、たとへば、心の持ち方で、三のものを六に活かし、黒いものをも白く見ようとするやうな、さういふ生き方をした。

小田村と玄瑞は、妻の縁につながる義兄弟であるばかりでなく、ともに相許した同志でもあつたから、彼は今は亡き同志の妻を慰めるために、壽子とともに、よく氣をつかつてくれた。

しづたまき、くりかへすらん

青柳の



糸の亂れに昔しのびて

これは、文子が悲しみに心くだかれて、つひに病み伏した時に、小田村が文子のために詠んだ一首であつた。

ところが、その小田村自身も、いまは明日の知られぬ身の上であつた。

禁門の變に一敗地にまみれた長州は、藩論たちまち二つに分れ、幕府に恭順の意を表して社稷の安きを保たうとする俗論黨と、あくまで戦ひ抜かうとする正義派とが、たがひに鎬をけづつて争つてゐた。小田村は正義派に屬してゐたが、つひに俗論黨が藩政府をかためて、やがて彼も同志とともに野山の獄に投ぜられたのである。

勤儉十年家政に勞し

裁縫紡績幾管爲

糟糠いまだ報ひず阿卿の徳

いままた獄中に向つて別離を賦す

妻に一時を残して、つひに彼は曳かれて行つた。

すると、壽子は、たちまち、女丈夫ぶりを發揮するのと同時に、いかにも壽子らしい氣の使ひ方や機智でもつて、獄中の夫を慰め勵ますことに努めた。

壽子は、人目が少くなつた夜を見はからつては獄に行き、たくみに獄吏にとり入つて、夫のために食事や身のまはりのものを送つたが、さういふ時よく文子を誘つて行つた。

暗い物凄しい野山獄の光景は、氣の弱い文子には、思はず身ぶるひの出るほど恐ろしいものであつたが、壽子は、

「ねえ、お文さん、あそこには松陰兄さまもゐられたのですよ」

と勵ましなげに、しつかりと文子の手をひき、いつも朗かに暗の中を獄に向つて急ぐのであつた。

「ねえ、お壽姉さま」

ある日、文子は、壽子の家で言つた。

「小田村の兄さまは、綺麗すぎなお方ですから、さぞお困りでせうね、剃刀も鉄もないのに、おひげやお爪が伸びて……」

すると、壽子は、

「ええ、ですからね、わたし、こんど行く時これをお届けしよと思ひますの」

さう言ひながら、火鉢のヒキダシから、手の中にかくしてしまへるほど小さいとらばさみをとり出して、ニツコリとして見せた。

文子が驚いて、

「だつて、お牢屋に刃物は……」

と言ひかけると、

「ええ、刃物は御禁制ですけど、まア見ておいでなさい」

壽子は、ひとりでもたクスリと笑つた。

さういふ時の姉を見てゐると、文子は、つくづくと、

（瘦せてお顔の色だつてさうお丈夫さうでもないのに、ほんとにお壽姉さまの生々としておいでになること！）

と思ひ、

（ああ、私もこんなにならなくては……）

と考へることもあつた。

さて、それから二日ばかりして、獄中の小田村が、獄吏にわたされた壽子からの重箱をひらいてみると、餅のこぶ巻をそへた握飯が入つてゐた。

「ほう、うまさらぢやのう」

獄中のつれづれ、ひとりごとを言ひながら、小田村は、さつそく握飯をつまんで、ひとくち、わんぐりとやつた。と、たちまち、かちツと音が音を立てた。

「お、痛ッ、これはお壽らしくもない！」

呟きながら、改めてみると、これは何としたこと、握飯の中から小さい小さいとうばさみが出て来た！

「うふッ」

小田村は、あやうく噴き出さうとした。しかし、すぐに、ふくれあがるやうに胸の中が暖くなつて来た。

「あれらしいのう！」

さう心に呟きながら、さつそく、それで伸びたヒゲを剃り、爪を切つた。彼はまた、前に壽子が差入れてくれた瀬戸の茶碗をもつてゐた。その形が「づく入道」の顔に似てゐるといふので、同囚の人々は「づくにう」と名づけ、共同で食器兼

洗面器として重寶がつてゐた。小田村は自分が用をすますと、その「づくにう」と「とうばさみ」を、さいはひ、獄窓におき捨てられてあつた破れソロバンを伏せて、その上に載せ、小窓の外の小縁から隣の部屋へおしやつた。

ソロバンの貨物車は、ガラガラと隣の部屋の小窓の前へすべつて行つた。

「やや、これは奇怪なものが来よつたぞ！」

隣室の囚人——といつても、彼もまた同志の一人であつたが、これまた、さつそく、その「づくにう」と「とうばさみ」で用をすますと、ソロバンの貨物車を更にその次の部屋へ走らせた。

「づくにう」と「とうばさみ」は、かりして次から次に獄窓を廻り、おなじ憂目に悩む同志の人々を、ほゝえませたり、喜ばせたりした。

壽子はまた、さういう機智を見せるだけではなかつた。春が来れば、獄窓にも春を忍べよかしと、わが家の庭の柳の枝を送つたりした。

青柳の

縁はいとを結びつつ

妹が垣根の春ぞこひしき

その時の小田村の述懐である。梅の花を送られた時には、

梅が枝に

妹が情も見ゆるかな

花のかほりに身をばよそへて

とにかく、姉の壽子は、さういふ女であつた。禍にあへば逆にそれを福に轉じようと努め、苦しみや悲しみがあれば、その苦しみや悲しみの中にも喜びや生甲斐を見つけようとする、この姉の積極的な氣性は、内氣な文子の心を強く捕へた。

「ああ、私もこの姉さまのやうでなくてはいけない！」

やうやく文子も本氣でさう考へるやうになつた。

◇

ついで記さう。

小田村は、やがて許されて獄を出たが、まもなく當時は太宰府にゐた三條實美のもとに使ひし、その折に、はからずも薩摩から歸る坂本龍馬に逢ひ、この二人の會見が、やがて薩長聯合の緒ともなつた。――そして、これ以後の小田村は、いよいよ亡き松陰や玄瑞にかはり、その遺志を活かすところで、文字どほり、西に東に、北に南に、生死の巷を國事に奔走したのである。

終章  
涙袖帖

…久坂玄瑞の妻…

女ながらも武士の妻

まさかの時には しめだすき……

どこからかさういふ歌が聞えて来た。

「まあ、元氣のよい聲だこと！ おたつさんか知ら……？」

文子は、そんなことを考へながら、茶の間の縁端で、かひがひしく古鐵瓶のホ  
コリをはらつてゐた。

縁側には、その鐵瓶のほかにも、鐵の鍋、鐵の花壺、刃のこぼれた古庖丁、古  
釘……古道具屋の店先よろしく、中には立派なものもあつたが、中にはまた、臺  
所の棚や物置のすみから持ち出されたやうな古道具が、いろいろ並べてあつた。

そこへ庭の方から姪の豊子がやつて来て、

「ねえ、お文叔母さま、これはどうでござりませう？」と、つまみのある細長い文鎖をさし出した。

「ああ、それも鐵ですな。けれど、それはあなたや小太郎さんが、お習字の時に、いでせう？」

「ええ、ですけれど、お母さまも小太郎さんも、もひとつあるからよいと、おつしやつてでしたから……」

「さう、ぢや、ごいつしよにお届けしませうね」

「ええ。——けれどね、叔母さま、こんな古いお鍋や古い庖丁なんか、どうしてまたお役に立つのでせうね？」

「それはね、お豊さん、こんなものをみんな一つに鎔かしてね、それからこんどは鐵砲の機械やタマをお作りになるのですよ」

「ああ、そして、それで戦をなさるのですね？」

豊子は、コックリと背いたが、こんどはまた何を思いついたか、がらりと綱子を變へて、

「あッ、ねッ、お文叔母さま、あの玄瑞叔父さまが、もうずつと昔に教へて下さつた數へ歌ね！」

「御楯武士の……？」

「ええ、あれの五つとや、叔母さま、おぼえておられますか」

「五つね、五つは……五つとや、生くも死ぬにも大君の……でせう？」

「あッさうさう、やつと思ひ出しました、生くも死ぬにも大君の、勅のままに隨はん、なにそむくべき——ですな？ あ、よかつた、わたし、もう、みんな歌へます！」

十歳になる豊子は、さう言つて、さも嬉しさうにニコリしたが、やがて小さ

い聲で、一つとやから順に歌ひだした。

文子は、鐵の道具類を風呂敷の上に一つにまとめながら、それを聞いてゐたが、やがてその歌がおしまひの、

「遠つ神代の國なりに取つて返せよ、御楯武士……」

といふ玄瑞の烈々たる精神を歌つたところまで來ると、自分も口のうちに、それをくりかへしてみながら、

（ああ、ほんとにその遠つ神代の國なりになる日か、さうでなければ、この長州が幕府の軍に攻めほろぼされる時が、いよいよ來たのではないか）

といふやうな氣がして、思はず身のひきしまるのをおぼえた。

「皆さま、しつかり！ 負けてはなりませんぞ！」

彼女は心からさう祈つた。

俗論黨は、屈辱的な犠牲を拂つてまで、恭順の意を示さうとしたが、幕府は、

つひに長州に對して攻勢に出た。長州征討の大軍は、すでに防長の四境に迫つてゐたのである。

防長の男といふ男が立ちあがつた。

彼等は「後世われわれら臣子の微志傳聞の誤謬なからんため、おのおの一本を懐ふところにするものなり」との趣旨による「合議書」を、めいめい討死の覺悟とともに胸におさめて、奮然と立ちあがつたのである。——その「合議書」は實に三十六萬部も刷られたのであつた。

「幕府征討は如何でござりませうや？」

「今だ！」

つひにその時が來たのである。しかも、それはもはや單なる一藩の私憤や私怨であつてはならなかつた。この戦に勝つことが、ただちに「明日の日本」への道に通ずるものでなければならなかつた。



いまこそ、女たちも長州女の本領を見せるべき時であつた。そして戦ふ男たちに後顧の憂ひなからしめなければならなかつた。

かつて——文政三年の五月、長州がいよいよ下關に攘夷を開始した時、萩の市民が自分たちの方から願ひ出て、菊ヶ濱一帯に外夷にそなへる土壘を築造したが、その時にも、女たちは進んで土木の仕事を手つだつた。藩廳は山口に移り、男たちの多くは下關に敵艦を砲撃してゐたからである。

男なら お槍かつがせ

お仲間ちゆうけんとなつて

攻めて行きたや 下の關

尊玉攘夷と聞くからは

女ながらも武士の妻……

この歌もその時に流行したものであつた。さうして「をなご臺場」と呼ばれる

防壘は築き上げられたのである。

さいはひ、その時は、アメリカの軍艦もイギリスの軍艦も、萩の港までは攻めて來なかつたが、いまは現に幕府の大軍が四境に迫つてゐるのである。

「まア、お文をばさま！」

とつぜん、びつくりしたやうに、豊子が聞いた。

「どうなされるのですか、そのお荷物を？」

文子は、その時、縁ふちのふちに腰をかけて、鐵の道具を包んだ風呂敷包を脊に負はふとしてゐた。大風呂敷の兩はじを胸のところところで結び、それに手をそへると、しつかりと足を踏みしめて立ちあがつた。

「わたしね、お豊さん、ちよつとこれを、おたつさんのところに頼んで來ますからね、おたつさんの家の人が、明日いつしよにお届けしてくれるさうですか……」

文子がさう説明しても、小さい姪は、まだ目をまるくしてゐた。このおとなしい叔母さまが……と思つてゐるのである。

文子は、ニッコリと笑つた。

「驚くことはありませんよ、お豊さん、この叔母さまだけではなく、お壽をばさまなどもね、ふだん大切にしていゐなされたお茶釜や、うすはたなどまで、明日は献上においでになるさうですから……。では、ちよつと行つて來ますよ、お豊さん」

軍器鑄造のための鐵類の献上を、大野たつの家に頼みに行かうといふのである。

「せめて私にも出来る御奉公を……」

文子は、さう思ひながら、裏木戸から家を出ると、そつと邊りを見まはして、さて歩きながら、心のうちでは絶えず考へつづけてゐた。

「ああ、せめて私に子供がゐたら、その子を亡き夫にもまざる立派な人に育てて、そして……いえ、いえ、思ひますまい、それは出来ないこと！ 出来ることをしませう、私に出来る御奉公を……」

うつむいて歩いてはゐたが、彼女のその足どりは、もう、そんなに弱々しさうではなかつた。むしろ、一歩々と力づくよく踏みしめてゆく人の健氣けんきが見えた。それは必ずしも脊の荷物の重さゆえばかりではなささうであつた。

秋の午後の黄色い日射しが、さうして俯向き歩く女の脊のあたりに、斜に射してゐた。

女は自分の長い影法師を踏みつつ進んで行つた。……

二回におよぶ長州征討の不首尾は、かへつて徳川幕府三百年の屋臺骨を、ゆる

がせる因<sup>もと</sup>となつた。

やがて大政は奉還された。

時は、玄瑞討死の年。元治から、慶應を経て、ついに明治となつた。

夜は明けたのである。輝かしい日本の黎明が来たのである。

明治元年、文子は、やうやく二十六歳であつた。

ありし日の玄瑞は、ともすれば時勢にうとくなりがちの女の一人に、自分の妻がなることを氣づかつて、忙しい中に寄せる手紙のはしはしにも、自分たちの運動の眞<sup>まこと</sup>の目的がどこにあるかを説き、また、たまに歸つて來ての談笑の中にも、よく時勢について、わかりやすく、くだいて、話して聞かせたものであつた。

だから、文子は、普通の女よりは、さうした方面にも幾らか早く目ざめてはゐた方だつたが、さて明治の御代になり、あまりにも大きな移り變りを見るたびに、ああ、これは……と心のうちに目を見はる思ひがした。が、すぐにまた、か

つての玄瑞の言葉を思ひ出して、

「ああ、それではあの時あの人が言はれたのは、ここであつたか」

と、ひとり背くこともあつた。そして、さういふ度<sup>たび</sup>に玄瑞を思ふ心も新になるのであつたが、

「さつと、あの人も今頃は、どんなにかそれを喜んでゐられること、あらう」

と考へて、いまは歴史の上の人となつた夫の喜びを、自分の喜びとしようと努めた。

玄瑞の同輩や後輩のもので、いまは政府の顯官となり、時には錦を飾つて故郷を訪ふ人があつた。さういふ人々は、よく松陰や玄瑞のことを忘れず、杉家をおとづれて、文子にも挨拶をした。

文子は、さういふ人たちの榮達を心から喜びこそすれ、つひぞ羨ましいとも嫉ましいとも思ひはしなかつた。兄の松陰にせよ、夫の玄瑞にせよ、かういふ喜び

の日のためにこそ、みづから進んで捨石ともなつたのであらうから、といふ風に強く考へてゐた。ただ、さういふ時には、殊更に、

「ああ、松陰兄さまや、あの人が、今頃まで生きてゐられたら……」

といふ心の奥の未練は、さすがに壓へるすべもなかつたが……。

けれども、さういふ時には、女子は、きまつて夫の手紙を読むことにしてゐた。

國事奔走に日もこれ足りなかつた夫、玄瑞が、その忙しい旅のさきさきから、無理に暇をつくつては、ことこまかに書いてよこした數十通の手紙を、女子は、この上もない寶として、大事にしまつてゐた。彼女は、悲しいにつけ、うれしいにつけ、まづそれをひらいて讀んだ。

その中の一通には、こんなのがあつた。――

……いよいよ御無事とぞんじまゐらせ候。我等も障りなう暮し候まま、ごあんもじ下さるべく候。

金のこと、先日より梅兄へ御めんだう申上げ、おそれ入り候へども、これも致し方なきこととぞんじまゐらせ候。金ぐらゐにて上様の名折と武士の面目をけがし候様に相成候ては、あひすまず、人にすくひを頼まれては人を助けずてはならず、やしなはずてはすまぬ事もあり候ゆゑ、金も人並よりは澤山に入り申候。

これは兄様へもよろしくおんことはりなさるべく候。

さて薩州の日下部妻子には、かんしんの事どもこれあり、杉藏(入江)もぞんじをり申候。

このうち小野寺十内より妻子へ贈られし涙襟集なみせあひらを杉藏の氣付にて日下部へおくり申候。

そのうちに和歌などもこれあり、いと悲しき事どもなり。士の婦人は、はやり歌などうたふは、甚だ見ぐるしき事にて、ひまもあれば少々和歌はよみたき事にて候。ずいぶん氣晴しにもなるものとぞんじまゐらせ候。

杉おかかさま、姉さまなどへもよろしくおんつたへ下さるべく候かしく。

四月三日

玄瑞

お文どのへ

保福寺へは、おり／＼おんまゐりと存じまゐらせ候。(文久二年四月)

また、こんなのもあつた。

……さて此度の事につきては婦人にも中々かんしんなるもの多くこれある事に候。久留米の眞木和泉守と申す神主の娘、此度の事につき上方へ登られし

折から、娘のよめる

梓弓はるは來にけりまこゆ武士の

花さく世とはなりにけるかも

又、梅田源二郎(雲濱)の姪お富と申す女のよめる歌おくり申候。……(文久二年五月)

……この節は歌はできず候や。ひまもあれば、おんつくりなさるべく候。(文久二年六月)

……先日は歌三首お送り、なにより喜び申候。この後も何とぞおんおくりなさるべく候。拙者も返歌なりともおくり度たくぞんじ参らせ候へども、この節はまことに用事多く候ゆゑ、又々おくり申すべく候。(文久二年八月)

…中谷正亮殿などの事のまことに残念千萬の事につき、先日つまらぬ事よみ候まゝ、おんめにかへ参らせ候。

いまさらにあふよしをなみ逢坂の山のはの月、影ぞさぶしも

あき深しみやまの峰の楓葉の過ぎていゆさし此君あはれ

まつろはめ夷ことごとまつろへむ時にしあれど雲かくれにき

月清く秋風さむし草まぐら旅寝もさめず秋風さむし(文久三年十月)

○ ……保福寺へはたへず御まゐりと安心いたし申候。(文久三年)

…申すもおろかながら御先祖さまへのおんつとめ、かんもじ(肝要)にぞんじ参らせ候。(文久三年)

○ ……きんりさま(天皇を指し奉る)の御こころのごとく相ならずては相かなはず、若殿様(毛利定廣)を始め御苦心なされ候事に候。ここにて日本の盛になるもおとろへるも分り候事に候へば、なかなか大事なることと朝な夕な苦心この事にて候。(文久三年春)

…まことに昔の楠木さま新田さまなどのおんこころざしにてなくてはならぬ、すこしもたゆみてはならぬ御時節と、われ事もよるひる苦勞いたし参らせ候。(文久三年八月)

玄瑞の手紙は、いつの日のものも、自分の愛する妻が、いくらかづつでも修養を積み、こころ豊かな立派な婦人となつてくれるやうにと祈る氣持から書かれたものであつた。

文子は、さうした手紙を讀む度に、夫の死後も、どうぞして夫が望んでゐたやうな女になりたいと努めた。

壽子の夫、小田村は、いまは楫取素彦と名を改めてゐたが、彼は、のちに文子のために、その久坂玄瑞の手紙を整理し、表装して、それに「涙袖帖」と題した。

文子の静かな未亡人生活は、すでに十八年の歳月を過した。

母の瀧子は、この若いままに後家を立て通さうとする娘が、いかにも不憫に思へて、これまでも幾度か、それとなく再婚をすすめてみたことがあつた。すると、いつも素直で、おとなしい文子が、この時ばかりは、きつぱりと言下に答へるのが當であつた。

「いえ、お母さま！ どうぞ、それはもうおつしやらないで……。わたくし、松

陰兄さまとのお約束がございますから……」

「松陰兄さまと……？」

「はい。松陰兄さまは私におつしやいました。文は久坂玄瑞の妻ぢやぞ、よいか、玄瑞ただひとりの妻ぢや、貞婦は……」

老ひたる母も溜息をついて、口をつぐむほかはなかつた。

けれども、明治十四年の正月、次女の壽子が四十三歳で亡くなり、すでに老境に近づいた夫の楫取素彦が、子や孫をかかへて、憂ひにとざされるてゐるのを見た時、母は、これこそ、文子の再縁のよい機會だと思つた。これならば、文子にも、楫取にも、その子や孫たちにも、この上もない良縁だし、また、亡き人たち——壽子も、玄瑞も、松陰も、これならば心から喜び、賛成してくれるものと信じた。さうすることが生きてゐる人々の幸福であるばかりでなく、亡き人たちへの追善にもなるであらうし、且つ又、それは世の中のためにも、お國のためにも

も、よいことであると信じた。そして、それを文子にすすめた。

しかし、文子の答は、前と同じであった。

母も、しかし、こんどは簡単にはあきらめなかつた。瀧子は、とうとう、この問題のよしあしを考へてもらふために、——百合之助は既に慶應元年に亡くなつてゐたから——親族會議をひらいてもらつた。

親族會議も文子の心を動かすことは出来なかつた。

「まことに良縁ぢやとは思ふが、かんぢんの文さんがそれぢや……」  
と、親戚の人々は、あきらめた。

母だけがあきらめなかつた。

「のう、お文さん、二人の夫をもつてはならぬといふ松陰兄さまの訓しんは、あなたにかぎらず、日本の女ならば誰もが守らなければいけないことです。けれどもです、こんどの場合、すこし違ふと思ひます。——いえ、それより、あなたが松

陰兄さま松陰兄さまとお言ひぢやから、私もその寅二兄さまのことを話しませう。寅二郎兄さまはのう、お文さん、三十年の生涯のあひだに、それこそ唯一のべんも、母の私の意にさからつたことはござりませんなんだよ」

「……」

「それ、あの野山のお牢屋の頃、二度目の時でござりました、自分の考へが世の皆さまに容れられないのを嘆いて、絶食を思ひ立たれたことがござりましたらう？ 皆さまがそれを心配なされて、止めさせようとなされたけれど、寅二郎はああいふ氣性の男、どうしても止めようとはしませなんだ、それを母の私が手紙の中で頭をさげて頼んだら、寅二はすぐその日から……のう？」

「……」

「さういふ男でした、松陰は。ぢやから母の私がよく考へて、これは女の道にも人の道にもはづれてをらぬから、かうした方がよくはあるまいかと相談すれば、



きつと寅二郎は……」

さう言ひかけて、七十五歳の老母は、しづかに兩眼を閉ぢ、いまは二十二年の昔に刑場の露と消えた息子の姿を思ひおこさうとした。

文子は兩手を膝の上に重ね、深く頭を垂れてゐた。さうした姿のまゝ、やがて靜かに母に答へた。

「お母さま、お母さまの思召は……ようわかりませす。ありがたくて、涙が……涙がこぼれます」

文子は實際に指を險にあてた。

「けれど、お母さま、もうしばらく……」

「もうしばらく？」

「はい、考へて……考へさせて下されませ」

「それはのう、考へなくてはなりませぬとも、どうかのう、お文さん、ほんとに

よく考へて……」

「はい。……はい、考へませす。はい。……皆さま、ごめんなされませ……」

集まつてゐる親戚一統の誰にともなく、さう言つて一禮すると、文子は、逃げるやうにして、その部屋を出た。六疊の自分の居間に歸つた。部屋のすみに、くづをれるやうに坐ると、片方の手を疊につき、うつむいて、もう一方の手の指さきで、しばらく疊の上になら書きのやうなことをしてゐたが、やがて兩手で顔をおほふと、聲を忍ばせて、すすり泣きはじめた。

秋であつた。夕方であつた、ぼちやツ、と庭の方に熟れた柿の實の地に落ちて、くだける音がした。

文子は、この時三十九歳であつた。

あ  
と  
が  
き

これは最初の計畫では「涙袖帖」を本題として、それに「久坂玄瑞の妻」なる傍題をつけるつもりで、すでに企畫届にもさうして提出したのでうつたが、執筆をつづけてゐるうち、現在のやうに改めることになつた。これは單に標題の好みとか感じとかのためではなく、作の内容そのものが最初の計畫と幾らか變つて來たためである。

これでは主人公文子の誕生から三十九歳までの前半生を描いたが、最初の考へでは、むしろ、前半生は「涙袖帖」の思ひ出にゆづつて、後半生を描くつもりであつた。といふのが、この作で作者が狙ひとしたところは、最初は、一つは杉氏の家庭が如何にして優れた六人の子女を生長させたかを眺め、一方には、その家庭の一員である未亡人の問題——未亡人は如何に生くべきかを考へてみたいことにあつた。その意味では、久坂文子（のち美和子）の一生を、われわれにとつて示唆に富む好適例だと私は見たのであつた。

けれども、作者は、けつきよく、その後者の問題については、解決をつけ得ずして結末にした。作者の思索がまだ浅く筆が未熟であることが、最も大きな理由であるが、同時に、さういふ未熟の腕をもつてしてまでも、いま、その問題を、この國家の現状勢の中で、いそいで取扱ふことに意義があるかどうかと私はそれを考へざる得なかつたのである。そのこともまた、この作に解決を急がせなかつた理由の一つだと言つてよい。

◇

玄瑞と小田村の相談により、小田村夫婦の次子桑次郎が、しばらく玄瑞夫婦の養子となつてゐた時代が、短い期間ではあるが、あつたけれども、——そして、それは十分に小説的に興味のあるものではあるが、これではわざと避けることにした。主題の焦點が分裂してしまふ恐れがあるからである。

小説と史實の問題についても、私は私なりに考へてゐることもあるが、ここに

記すほどまだ熟したものではない。これでは小説としての構成上あるひは效果上必要と考へた以外は、なるべく史實に忠實だつたつもりであるが、研究不足のため、あるひは誤つてゐるところがないとも言へない。ただ私としては、史實にひきずられて小説を干乾びたものにさせることは、極力これを避けようと努めたつもりであるが、これとても自信はない。

作中の人物は凡て史上の人物だが、その名前は混乱を避けるために、わりに世人の耳に親しまれてゐるもので大體おしとほすことにした。たとへば、玄瑞にしても最後の場面では義助とすべきところを、やはり玄瑞で通したり、文子も後には美和子と改名したが、それをさうしなかつた如き……。

◇

久坂玄瑞を主題とした参考書は、私の寡聞のせゐもあらうが、至つて少いやうである。私はわづかに福本義亮氏の好著「松下村塾之偉人久坂玄瑞」と、妻木忠

太氏の「文久元年に於ける久坂玄瑞の行動」と、香川政一氏の「久坂玄瑞」の三著しか読んでゐない。それだけに、この三著は作者にとつて、實に有難いものであつた。

女子については、廣瀬敏子女史の「松陰先生にゆかり深き婦人」と、吉川綾子女史の「吉田松陰の母」の二冊。ともに良書である。特に前者がよい。

吉田松陰に關するものや、幕末史の類は、これはもう驚くべき數に上る。私がこの一年間に讀んだ分だけでも優に百冊を超えてゐる。しかし、やはり名著と見るべきものは、さう多くはない。

廣瀬豊、福本義亮、玖村敏雄、岡不可止の諸氏の諸著は、さすがに熟讀の價値十分である。教へられるところが多かつた。田中惣五郎氏の評傳は私には特に興味があつた。

古い文献では日本史籍協會の「楫取家文書」二巻が最も役に立つた。

◇  
これを書くについては實に多數の方々にお世話になつた。却つて失禮かれかも知れないが、芳名を掲げて深く深く感謝の意を捧げさせていただく。

まづ、岸田國士、上泉秀信、西川貞一の三氏は、直接これを書く機会と勇氣を與へて下さつた方々で、深く感激してゐる。出版元の織田雅嗣氏には、締切を半年も遅らせたりして、大變な御迷惑をかけてしまつた。

史料の研究については、萩市において、市長の古屋武助氏、史跡觀光係長の河野道氏、縣立圖書館の香川政一氏、萩市文化協會の田中助一氏、田北夫人の諸氏に。下關市において、内田茂生氏、尊攘堂の内田氏、白石正一郎氏の後裔の方々、野原秋草氏。以上の方々の御教示と御助力を忝うした。この書にも度々登場する杉氏の長女千代の孫にあられる和田國男氏は、偶然にも作者とは同じ隣組で、同氏の紹介で吉田茂子女史にもお逢ひ願へ、いろいろお話を伺ふことが出

来た。福本義亮氏には書面の上でお教へを受け、且つ色々と便宜を計つて戴いたことを私は永く忘れない。

このほか前述の證書の各著者にも當然ここで謝意と敬意を捧げなくてはならぬ。

以上の方々の御厚意と御指導なくしては、到底この作は出来てゐないのである。が、その御厚意にも拘はらず、未熟な作品で赤面のほかはない。私としては今後の努力をお誓ひするほかはない。

◇

八月二十日の朝に筆をおこし、九月十九日の朝この「あとがき」を終る。執筆には一ヶ月を要しなかつたが、それまでの準備には滿一ヶ月を費した。殊に書き出すまでの四ヶ月間は、この仕事以外には全く時間も頭も使へず、しかも一行も書けず、實に苦しかつた。こんな苦しかつたことは作家生活十二年いまでには一度もなかつた。

は一度もなかつた。

これは私の最初の時代物小説である。

古往今來、日本の母や妻は、常につましく歴史の蔭にかくれてゐる。そこに日本女性の美しさも床しさも尊さもある。日本の歴史は、それゆえにこそ一段の輝きを増してゐるとも見える。けれども、せめて我々は、歴史の蔭にそれらの床しき人々を探りたい。さうすることが我々作家の義務の一つである、と私は不斷思つてゐる。さうした念願が私にこの題材を選ばせたのである。

最後に、ここに書くべきことかどうかはわからないが、これを書くについては私の家族三人も苦勞を共にした。

昭和十七年秋

著者

久坂玄瑞の妻

版權所有  
出文協承認あ 290137號



昭和十八年五月十五日  
昭和十八年五月二十日

著者  
發行者  
印刷者  
發行所  
配給元

印刷  
行 (一〇、〇〇〇部)  
定價金二圓五十錢

著者 田郷虎雄  
東京市京橋區銀座西三ノ一  
文協會員一三八〇三三番  
發行者 芳武昌  
大阪市浪速區櫻川一ノ二五番  
印刷者 西川正太郎  
東京市京橋區銀座西三ノ一  
發行所 翼贊出版協會  
振替東京一七八八一七番  
東京市神田區淡路町二ノ九  
日本出版配給株式會社

383p  
19cm

TRC102095



萩市立図書館



111390837